

令和4年度

第28回 日教弘教育賞

教育研究集録

研究主題

学校の実態を踏まえ

明日の教育を考える



第28回日教弘教育賞 教育研究集録発行に当たって

公益財団法人 日本教育公務員弘済会
理事長 岩田 将之

教職員には、常に、教職経験年数や職務に応じた資質、能力、指導力を高めるため研修に努めることが求められています。

そのうえで、

- 教職員の世代交代が進むとともに、働き方改革が推進され、教職員の勤務、研修の在り方について改善を図ること。
- 新たな社会で生きる子どもたちに必要な力を育むために「主体的・対話的な深い学び」という観点から授業改善を図ること。
- ICT活用等による学習活動、教育方法の工夫、充実を図ること。

などが求められています。

私が教職に就いてから定年退職を経て50年近くになります。その間、不易なこととして大切にすべきことも多くありましたが、様々な技術革新が著しく進み社会の変化が激しくなるばかりと感じています。次世代を担う子どもたちを育てる職に就いている教職員には、更なる研修と高い資質、能力、指導力等が必要になっていると思います。

そのような状況の中で、今回は、当会が創立70周年を迎えた記念すべき年に相応しく多数の教育実践論文をいただき、教職員の皆様の変わらぬ研究意欲と教育に対する熱い思いに感銘を受けている次第です。また、応募いただいた論文からは、教職員の皆様が、知恵を絞り様々な工夫、努力を重ねて、子どもたちが日常生活や学習で成長できるよう、数々の困難を乗り越え、子どもたちが着実に成長している姿を見届ける取組をされたことをうかがうことができました。

さて、当会は、奨学金の貸与・給付、学校・教職員・教育関係団体の教育研究・研修等への助成・支援を行っております。これらの事業は、「次代を担う子どもたちの健やかな成長のために尽力する」ことを志し、すべての事業の評価基準は「最終受益者は子どもたち」であることを前提として、21世紀に生きる子どもたちの教育に寄与・貢献するという使命を果たすために行っているものです。

教育研究助成事業の一つとして行っている教育論文募集事業「日教弘教育賞」は本年度で28回目となりました。「教育愛に燃え、子どもたちの未来のためにひたすら努力している教職員の教育実践と研究意欲に対する奨励」を趣旨としたものです。

「学校の実態を踏まえ、明日の教育を考える」という立場から、応募者が具体的な研究主題を決めて、園児児童生徒の具体的な成長を具現する実践と成果を論文にまとめることとしています。

本年度は、公益認定後最多となる3068編の論文を都道府県支部へ応募いただきました。ご応募いただいた論文は内容が充実しており、教職員の皆様の旺盛な研究意欲に心より敬意と感謝を申し上げます。その中から各支部推薦の教育論文(学校部門67編、個人部門51編、総数118編)を慎重に審査し、別掲の結果となりました。

審査、選考に当たっていただいた皆様とお力添えをいただいた関係者の皆様に心から敬意を表し、ご協力に感謝申し上げます。

本年度の研究集録も、変化の激しいこれからの社会を子どもたちがたくましく生き抜いていくために学校、家庭、地域が連携・協力した教育実践集となっています。

本研究集録が各学校等での研修・実践に広く活用され、今後の教育の着実な発展に寄与できれば幸いです。



転換期にあって求められる確かな教育

選考委員長 文部科学省初等中等教育局

主任視学官 宮崎 活志

令和4年度第28回日教弘教育賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。また、長年にわたり全国の教職員に優れた実践研究を発表する機会を提供していただいている公益財団法人日本教育公務員弘済会の皆様にも心から感謝を申し上げます。

さて、令和2年から「コロナ禍」という言葉が日常的に使われるようになりましたが、このことがもたらした社会経済的影響や、私たちのライフスタイルの変化には大きなものがあります。学校教育も様々な制約を受けることになりましたが、この間も、教職員や保護者、地域の方々、教育委員会等行政関係者のご努力もあって、幼児児童生徒の教育活動は日々継続されております。そうした中で学校では、「一人一台端末」などICT機器の整備が飛躍的に進み、個別最適な学び、協働的な学びの中で、主体的・対話的で深い学びの実現を目指して学習指導が工夫され展開されています。教育方法は今、大きな転換期を迎えているといっても過言ではありません。

ご応募いただいた論文のテーマには、地域社会との協働や地域の中に学習材を求めるもの、幼児児童生徒を主体とする活動と学び、言語活動や思考ツール活用などによる深い学び、感性や感情を大切にする教育などがありました。これらは学習指導要領の趣旨やOECDなどの国際的な教育の動向を捉え、学校の中でそれらをどう実現できるのかという観点からの実践研究といえます。ここでは、最優秀賞を受賞された2点をご紹介します。

優れた教育活動は多様な教育的価値を有するということができます。北海道伊達高等養護学校の「藍で繋がる伊達愛プロジェクト」では、学校と地域双方に互酬性の高い「藍育ファンディング」を実施するなど、学校と地域社会、行政との協働（地学協働）を基盤とした「社会に開かれた教育課程」が実現されています。さらに、障害者理解の促進、「自然発酵」による藍染めの探究、学科を横断するテーマ学習など、意欲的で多様な取組が工夫されています。そして、何よりも優れている点は、そうした活動の一つ一つに手間を惜しまず継続的に取り組む教職員、生徒、地域の人々の姿であるといえるでしょう。

鳥取県鳥取市立桜ヶ丘中学校の「対話の質を高める授業構成と言語化の見取りで、深い学びの扉を開ける生徒の育成～思考により生まれる内なる言葉を外言化することの重要性に着目して～」では、深い学びに導く授業を実現するために、内的言語活動としての思考と外的言語活動としての表現との関係に着目した点が優れています。対話の質を高めるには、生徒一人一人の内部で十分に練られた思いを、確かで豊かな表現により相互交流させることが大切です。交流の機会を2段階にするとともに、教師が適時適切に介入する「飛躍点」の設定やタブレットの有効活用、タイムマネジメントの観点から指導の見直しなど、現実的な授業改善の提案となっています。

拡大するICT環境の中で教育方法に大きな転換が求められる今日、これからの学校教育が向かうべき方向を見定めることも極めて重要です。地域社会の伝統や文化に根差す学校教育、自らの考えを深めようとする児童生徒同士が協働する学習活動は、まさにこうした求めに応える確かな教育の実践ということができるでしょう。

日教弘教育賞に応募された先生方が、学校教育の最前線にあって、幼児児童生徒への望ましい指導、支援の在り方を日々模索する姿に感銘を受けました。応募されたすべての方々のご活躍を期待しております。

第28回日教弘教育賞 選考委員

(順不同 - 敬称略)

《選考委員長》

文部科学省初等中等教育局主任視学官 宮崎 活志

《選考委員》

常葉大学教育学部教授 堀井 啓幸

早稲田大学教職大学院教授 田中 博之

前ぐんま国際アカデミー中高等部校長 吉田 シヅエ

公益財団法人日本教育公務員弘済会常務理事 鈴木 岐

《第一次選考委員》

委員 種村 明頼

委員 大橋 明

委員 高橋 秀美

委員 新藤 久典

委員 天野 光芳

委員 大塚 一雄

委員 大井 靖

委員 岡田 哲也

委員 鈴木 岐

《目 次》

◇あいさつ

公益財団法人 日本教育公務員弘済会 理事長 岩田 将之 …………… 2

文部科学省初等中等教育局 主任視学官 宮崎 活志 …………… 3

◇「日教弘教育賞」受賞論文一覧…………… 6

●『最優秀賞』2編

《学校部門》 北海道伊達高等養護学校 校長 浅井 謙作 …………… 16

《学校部門》 鳥取県鳥取市立桜ヶ丘中学校 校長 音田 正顕 …………… 20

●『優秀賞』6編

《学校部門》 千葉県立四街道特別支援学校 校長 日下 奈緒美 …………… 24

岡山県倉敷市立西中学校 校長 松本 一郎 …………… 28

《個人部門》 北海道札幌市立南が丘中学校 教諭 佐久間 勇史 …………… 32

富山県富山市立蜷川小学校 教諭 濱田 幸恵 …………… 36

福井県福井市安居中学校 教諭 川端 康誉 …………… 40

愛媛県立松山南高等学校 教諭 渡部 靖司 …………… 44

●『優良賞』8編

《学校部門》 群馬県立大間々高等学校 校長 高橋 みゆき …………… 48

群馬県沼田市立利南幼稚園 園長 下田 高男 …………… 52

長野県長野市立長沼小学校 校長 市川 英臣 …………… 56

広島県竹原市立大乘小学校 校長 柏木 雅子 …………… 60

《個人部門》 静岡県御前崎市立白羽小学校 教諭 山下 賢吾 …………… 64

鳥取県八頭郡八頭町立船岡小学校 教諭 杉谷 義和 …………… 68

香川県高松市立仏生山小学校 栄養教諭 下岡 純子 …………… 72

宮崎県西臼杵郡日之影町立日之影中学校 教諭 早田 泰大 …………… 76

令和4年度・第28回「日教弘教育賞」受賞論文一覧

◎学校部門

◆最優秀賞

- 【北海道】 藍で繋がる伊達愛プロジェクト
～「地学協働」を意識した地域と共に歩む学校づくりをめざして～
北海道伊達高等養護学校 校長 浅井 謙作
- 【鳥取県】 対話の質を高める授業構成と言語化の見取りで、深い学びの扉を開ける生徒の育成
～思考により生まれる内なる言葉を外言化することの重要性に着目して～
鳥取県鳥取市立桜ヶ丘中学校 校長 音田 正顕

◆優秀賞

- 【千葉県】 病弱教育における「つなぐ」ことによる豊かな学びの実現
～ICT利活用による学習環境のデザイン～
千葉県立四街道特別支援学校 校長 日下 奈緒美
- 【岡山県】 PBIS(倉敷モデル)を活用した積極的學校経営の展開
～ゆるやかなPBISと解決志向アプローチで好循環のサイクルを創出する～
岡山県倉敷市立西中学校 校長 松本 一郎

◆優良賞

- 【群馬県】 生徒主体の活動で多様性のある社会の実現を目指す
～ジェンダーフリーな制服を自由に着られる校内環境づくりから～
群馬県立大間々高等学校 校長 高橋 みゆき
- 【群馬県】 絵本の楽しさを味わい、豊かな感性と表現力をもった幼児の育成
～ねらいや手立てを明確にした読み聞かせ活動の工夫を通して～
群馬県沼田市立利南幼稚園 園長 下田 高男
- 【長野県】 経験値をベースにしながら歩む防災・減災教育
～地域・有識者・各種団体とつながる学び・活動を通して～
長野県長野市立長沼小学校 校長 市川 英臣
- 【広島県】 考えを「つなぐ」、学びを「つなぐ」児童の育成
～インタラクション(相互作用)とリフレクション(振り返り)を重視した算数科授業を通して～
広島県竹原市立大乘小学校 校長 柏木 雅子

◆奨励賞

- 【北海道】 日本遺産「～北の産業革命～炭鉄港」で滝川市を学ぶ
～コロナ禍のピンチを新しい地域学習を行うチャンスに転換した活動～
北海道滝川市立明苑中学校 校長 鎌田 俊博
- 【青森県】 より高い課題解決に挑戦する生徒を育成する学習指導の研究
～よく聴く・自分の考えをもつ・互いに学び合う場の工夫(ICT機器の活用を通して)～
青森県青森市立南中学校 校長 渡邊 諭
- 【岩手県】 自ら考え、表現できる生徒の育成
～「わかる授業づくり」と教員研修システム、全校学習活動を通して～
岩手県北上市立北上中学校 校長 高橋 邦尚
- 【岩手県】 地域連携による探究的な学びの推進
～「花高魅力化プロジェクト」を通じた「知行合一」の実践者の育成～
岩手県立花泉高等学校 校長 嶋 隆



【宮城県】	特別の教科「道徳」の授業の質を高める教育実践 ～「二中方式」による道徳授業の実践を通して～ 宮城県富谷市立富谷第二中学校	校長	佐藤 秀二
【宮城県】	自立した学習者たちの育成 ～「分からないから教えて」と言える適用問題20分の設定を通して～ 宮城県石巻市立鹿又小学校	校長	浦山 正幸
【山形県】	子どもが明るく・元気に・笑顔で過ごせる学校づくり ～自己肯定感を高め、相手意識を持った言動ができる子どもの育成 に向けた取り組み～ 山形県鶴岡市立大泉小学校	校長	奥田 満哉
【山形県】	学ぶ意欲に火をつけ、生き生きと学ぶ生徒に！ ～3本の矢(授業改善・自己管理能力の育成・小中連携)を通して～ 山形県尾花沢市立福原中学校	校長	今野 栄治
【福島県】	生かせる知識・技能の育成(算数科) ～タブレット一人一台の授業づくり<適用・習熟問題に取り組む時 間の充実>～ 福島県郡山市立日和田小学校	校長	伊藤 孝行
【福島県】	算数科における確かな学力の定着をめざして ～「わかる・できる」が実感できる授業づくりを通して～ 福島県郡山市立三和小学校	校長	遠藤 佳子
【栃木県】	併設型小中一貫校をつくるための工夫と実践 栃木県日光市立足尾小学校・足尾中学校	校長	須江 信之
【埼玉県】	通常学級における特別支援教育の組織的運営 ～全職員研修で共通理解をもって、特別支援教育を推進する学校をつくる～ 埼玉県吉川市立吉川小学校	校長	小山 悟
【新潟県】	「協働的な学び」のより一層の充実を目指して ～「逆向きに考える授業」「ヘルプワード・思考スキル」「MIM」を取り 入れた授業改善への試み～ 新潟県阿賀野市立水原小学校	校長	鈴木 正彦
【新潟県】	学校から世界を見つめ、「夢」を叶える生徒を育成 ～Think Globally, Act Locally～ 新潟県柏崎市立第五中学校	校長	小熊 哲也
【長野県】	「全職員が全校児童を指導・支援・見守る『多様な学び』の創造」 ～「ローテーション」「シャッフル」が生み出す多様な価値観との出会いを通して～ 長野県上水内郡小川村立小川小学校	校長	永井 宏樹
【茨城県】	教科の枠を超えて、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す学習過程の在り方 ～「問い」から始まる深い学びを目指す授業改善を通して～ 茨城県那珂市立第四中学校	校長	永井 美恵子
【神奈川県】	学校業務の整理に関する考察 ～校務分掌の業務分析を通して～ 神奈川県相模原市立夢の丘小学校	校長	城田 善夫
【神奈川県】	「文化・言語・学習習熟度が大きく異なる生徒全員に、学びを保障する授業の追求」 ～夜間学級において3年間で、日本の義務教育相当の学習を提供するために～ 神奈川県相模原市立大野南中学校分校(夜間学級)	校長	宮坂 賀則
【千葉県】	簡単にすぐにもできる教科横断型授業から探究活動の充実を図る ～キャリア形成にもつながる「ブロック型クロスカリキュラム」の開発を目指して～ 千葉県立千葉女子高等学校	校長	釜沼 徳行
【山梨県】	OPPAを活用した特別支援学校におけるICT活用に関する校内研修 ～教師の苦手意識を払拭しやる気を引き出す意識変容をもたらす研 修の方法について～ 山梨県立わかば支援学校ふじかわ分校	校長	荒川 昌浩



【静岡県】	「戸田ってすごい！」を実感することも園経営 ～地域の強みを生かした食育の推進を通して～ 静岡県沼津市立戸田こども園	園長	朝香 美智代
【富山県】	生徒個々の実態に即した支援(指導)体制の構築を目指して 富山県立新川みどり野高等学校	校長	高島 由順
【石川県】	自ら考え行動できる児童の育成を目指す学校経営 ～組織的な取組を通して教師力を高める～ 石川県加賀市立湖北小学校	校長	坂口 明美
【石川県】	キャッチーな「愛言葉」で心を育て、心を繋ぐ「うちの学校」 ～教職員も子どもたちも「思いやりのあふれる大徳小学校」をめざして～ 石川県金沢市立大徳小学校	校長	島倉 晴信
【福井県】	伝え合い、学び合う子を育成するための実践研究 ～対話をうむ効果的なICTの活用を通して～ 福井県勝山市立鹿谷小学校	校長	北川 喜樹
【福井県】	ふるさとを愛し、誇りに思い、そして、役に立ちたいと思う児童の育成 ～地域教材(南川)体験活動を中心にした4年生の取組を通して～ 福井県小浜市立今富小学校	校長	平井 和雄
【岐阜県】	「2 + 1 = 3.5」を創り出す学校経営 ～小中一貫校のメリットを生かした「力のある学校」を目指して～ 岐阜県岐阜市立厚見小学校・厚見中学校	校長	岡田 芳子
【岐阜県】	教職員の働き方改革を推進し、生徒の生活の充実を図る学校経営 ～生徒の活動終了「16時30分」の教育課程の編成より～ 岐阜県下呂市立下呂中学校	校長	中村 好一
【愛知県】	地域を愛し、地域の未来を自分たちで創っていかうとする子どもの育成 ～理想の豊田市像を練り合うWEB交流を柱に～ 愛知県豊田市立拳母小学校	校長	保科 克之
【三重県】	子どもの主体性と協働性を育み、確かな学力を身に付けさせるために ～「第二小チャレンジシステム」と「授業改善」を軸にして～ 三重県松阪市立第二小学校	校長	加藤 富雄
【三重県】	地域資源を活用した「総合的な学習の時間」の構築 ～令和5年度のコミュニティ・スクール全面実施を視野に入れて～ 三重県多気郡多気町松阪市学校組合立多気中学校	校長	吉村 元宏
【滋賀県】	どの子にも学びのある授業づくりを目指して ～坂本小スタンダードを基盤とした授業づくり、学びに向かう集団づくり～ 滋賀県大津市立坂本小学校	校長	上畠 憲一
【滋賀県】	1人1台端末を生かした「生徒の主体的な学びづくり」と「教員業務の軽減」 ～導入初年度に起こした“変革の軌跡”を追って～ 滋賀県栗東市立栗東西中学校	校長	平子 博之
【兵庫県】	地域課題に根ざしたアントレプレナーシップ教育の推進 ～探究活動における深い学びの実現をめざして～ 兵庫県丹波市立春日中学校	校長	細見 能成
【兵庫県】	単元の楽しさを中心に据えた体育学習 ～なりたい自分を目指して仲間とかかわり合う～ 兵庫県神戸市立こうべ小学校	校長	杉山 昌宏



【大阪府】	新指導要領に則った校内統一の評価活動支援システムの構築 ～評価活動の共有による生徒・保護者との信頼関係構築と教職員の働き方改革に資する事務作業量軽減をめざして～ 大阪府貝塚市立第三中学校	校長	荒木 規夫
【奈良県】	地域をまきこんで取り組む安心・安全な学校づくり ～自分も周りも大切にする児童を育てるために～ 奈良県大和高田市立菅原小学校	校長	吉川 淳
【和歌山県】	生徒の主体的な学びと自己肯定感を高める教育実践 ～農業体験学習を核とした地域交流活動を通して～ 和歌山県日高郡印南町立稲原中学校	校長	森 暢也
【鳥取県】	保育者の人材育成につながる職員研修 ～保育理念を引き継ぐための「記録」、保育の質を高める「保育カンファレンス」～ 国立大学法人鳥取大学附属幼稚園	園長	渡邊 文雄
【岡山県】	小学校における学力向上の取組 ～学校が組織としてつまずき解消と授業改善に取り組んだ軌跡～ 岡山県津山市立鶴山小学校	校長	森本 宏伸
【広島県】	I C T機器を活用した動画編集による情報活用能力の育成 ～1人1台端末環境下における表現力の向上～ 広島県広島市立牛田中学校	校長	長谷川 洋
【山口県】	トウガラシプロジェクトで地域を元気に ～学校を核とした地域活性のあり方を探る～ 山口県周南市立須磨小学校	校長	坂井 竹俊
【山口県】	コミュニティ・スクールの可能性を探る実践研究 ～シティズンシップ教育を取り入れた地域連携教育からのアプローチ～ 山口県山口市立島地小学校	校長	福井 章夫
【香川県】	郷土の大学と連携する公立小学校の挑戦 ～「大学生と遊ぼう」に込める 新たなキャリア教育の視点～ 香川県高松市立鶴尾小学校	校長	田中 義人
【徳島県】	自ら考え 仲間とともに学びを創り 未来を逞しく生きる子供の育成 ～組織・指導体制の構築と「へそっこキッズタイム」の学びを通して～ 徳島県三好市立池田小学校	校長	高岡 和恵
【徳島県】	主体性を持って取り組む児童の育成 ～コロナ禍にあっても全校が繋がり協働して歩む学校を目指して～ 徳島県板野郡藍住町立藍住南小学校	校長	北岡 八千代
【愛媛県】	教員の働き方改革を推進するための部活動の在り方の改革 ～マツガクアカデミープロジェクトの推進を通して～ 学校法人松山学院松山学院高等学校	校長	吉田 慎吾
【高知県】	探究的な学習における協働と地域連携の実現 ～関わりを通して、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指す取組～ 高知県高知市立昭和小学校	校長	小川 晶子
【大分県】	生徒が主体的に学ぶ教育の実践 ～デザインシンキングが生徒の学びと教員の授業を変える～ 大分県立情報科学高等学校	校長	橋本 武晴



【大分県】	対話的な学びを通した「気づき 考え 実行する」生徒の育成 ～平和学習を進化させ、子どもたちと未来への希望を共有する～ 大分県中津市立緑ヶ丘中学校	校長 田中 浩志
【福岡県】	主体的に学ぶ生徒を育てる学習指導法の研究 ～学習の見通しを意識した「めあて」と学習のつながりを意識した「まとめ」、 ねらいに応じた「振り返り」のある授業づくりを通して～ 福岡県京都郡苅田町立苅田中学校	校長 竹原 昭夫
【宮崎県】	これからの学校で求められる事務職員の役割について ～ICT教育と災害対策の観点から～ 宮崎県西臼杵郡高千穂町立田原小学校	校長 金丸 恭浩
【熊本県】	豊かな学び手が育つ授業の創造 ～主体的・対話的で深い学びの具体化を目指して～ 熊本県熊本市立出水南小学校	校長 上妻 薫
【熊本県】	地域や専門機関との連携・協働による特色ある学校づくりの推進 ～「ICT教育・英語教育日本一」を目指して～ 熊本県球磨郡山江村立山江中学校	校長 中野 浩二
【鹿児島県】	自ら学び高め合い、心豊かに、たくましく生きる生徒の育成 ～キャリア教育における資質・能力の向上を目指して～ 鹿児島県阿久根市立鶴川内中学校	校長 井久保 康彦
【鹿児島県】	考え、議論する道徳授業の創造Ⅱ ～ICT機器を活用した対話活動の工夫～ 鹿児島県肝属郡肝付町立内之浦小学校	校長 永峯 光朗
【佐賀県】	主体的に学び、共に高め合う児童の育成 ～伝え合う力を高める国語科指導を通して～ 佐賀県佐賀市立南川副小学校	校長 熊本 輝美
【長崎県】	人と人がつながる力・関わる力を高める教育活動の創造 ～1人1台端末の活用と体験活動の融合～ 長崎県佐世保市立大野小学校	校長 松田 美穂
【沖縄県】	新学習指導要領実施に伴う指導と評価の一体化 ～三観点の指導とみとりの方法を通して更なる授業改善を図る～ 沖縄県立北中城高等学校	校長 田名 裕治

◎個人部門

◆優秀賞

【北海道】	「生徒の主体的取組を核とした課題探究的な自律的学習」に関する授業 ～令和新時代における授業スタイル・誰一人取り残さない未来への 教育実践へと広げる取組～	北海道札幌市立南が丘中学校	教諭	佐久間 勇史
【富山県】	主体的・対話的な学びのある授業を目指して ～思考ツールの活用～	富山県富山市立蜷川小学校	教諭	濱田 幸恵
【福井県】	生徒 Agency を育む理科教育のあり方の探求 ～主体性を育む3年間の長期的なプロジェクト学習～	福井県福井市安居中学校	教諭	川端 康誉
【愛媛県】	課題解決型学習（PBL）における産学連携データ利活用人材の育成 ～企業と松山南高生が取り組むデータマーケティング教育プログラム～	愛媛県立松山南高等学校	教諭	渡部 靖司

◆優良賞

【静岡県】	「これからの社会を生きる力」を育む探究的な総合学習 ～地域活性化レー(カレー)作りという本物の経験を通して～	静岡県御前崎市立白羽小学校	教諭	山下 賢吾
【鳥取県】	出会い・感動・発奮 ふるさとキャリア教育 ～地域の偉人・先人の生き方に学ぶ道徳教育を基盤とした第6学年の 実践をモデルとして～	鳥取県八頭郡八頭町立船岡小学校	教諭	杉谷 義和
【香川県】	新たな日常の中での、チームで取り組む食育の推進 ～食の重点課題を明確に、学校内外で連携して取り組む食育について～	香川県高松市立仏生山小学校	栄養教諭	下岡 純子
【宮崎県】	未来社会を切り拓く「生きる力」を育むキャリア教育の実践 ～ICT活用と地域との協働による「学びをつなぐ」活動を通して～	宮崎県西臼杵郡日之影町立日之影中学校	教諭	早田 泰大

◆奨励賞

【青森県】	学びから行動へ 社会改革へと向かう生徒を育てる実践および評価 ～アウトプットを重視したプロジェクト型活動の取り組み～	青森県立大湊高等学校	臨時実習 助手	南澤 英夫
【青森県】	探究のサイクルを重視した総合的な学習の時間でのE S Dの実践による自己有用感の育成 ～人口減少地域での地域貢献・地域活性を中心課題に据えた取組を通して～	青森県東津軽郡平内町立東平内中学校	教諭	山脇 啓大
【秋田県】	適応指導教室の生徒たちと創る探究活動 ～「サイエンスクラブ」の活動を通して～	秋田県由利本荘市理科教育センター	理科教育 指導員	佐藤 和広
【宮城県】	大切にされている実感を溜め自立心を育む「ほっとルーム」を目指して ～特別支援教育の視点を生かした登校渋り児童へのチーム支援に関する一考察～	宮城県多賀城市立城南小学校	教諭	豊田 幸二



【福島県】	新型コロナに負けない！令和の日本型音楽教育 福島県福島市立平石小学校	教諭	守谷 千晶
【栃木県】	児童が主体的に学び合う国語授業づくり ～児童の問いを生かした物語文の授業展開・単元構成を通して～ 栃木県宇都宮市立東小学校	教諭	内山 季方
【栃木県】	「学習への取り組み」と「学力の向上」の相関から考察する指導方法の改善 ～学習への取り組みの要となる「自己分析」に着目した指導方法の模索～ 栃木県立学悠館高等学校	教諭	山本 育代
【埼玉県】	児童の自己肯定感を高める取組の工夫 ～「やってみよう！」「自分もみんなも大好き！」の気持ちが育つ学級 経営の実践～ 埼玉県久喜市立栗橋南小学校	教諭	石松 雄太
【埼玉県】	コロナ禍での実感を伴う学び ～一人1シャレでモンシロチョウの観察(小学校3年・理科)～ 埼玉県新座市立栄小学校	教諭	野末 淳
【長野県】	場面緘黙の改善を目指した支援事例について ～具体的な支援とその経過～ 長野県若槻養護学校	教諭	津瀬 直彦
【茨城県】	平和で民主的な社会の形成者に必要な公民としての資質・能力を育むカリキュラム構想 ～戸頭中学校包括的平和教育(Togashira Peace Curriculum)の実践～ 茨城県取手市立戸頭中学校	教諭	土屋 啓一
【茨城県】	よりよく生きようとする意欲と態度を育むキャリア教育の在り方 ～夢や希望をもち、自己実現に向けた活動を通して～ 茨城県稲敷市立江戸崎小学校 夢を育むプロジェクトチーム	チーム代表 教諭	栗山 美智子
【東京都】	地域と関わり、つながりながら一人一人が主体的に学ぶ安全学習 ～地域連携とICT活用に主眼を置いた安全マップの制作・発信を通して～ 東京都杉並区立天沼小学校4年グループ	指導教諭 主幹教諭 主任教諭 主任教諭	新宅 直人 稲葉 八重子 澤 祐一郎 廣川 晶子
【東京都】	短歌の授業「短歌名人になって日本中に自分の気持ちを届けよう」について ～短歌を通して児童の自己表現力を育てる～ 東京都東村山市立化成小学校	主任教諭	實川 泉
【神奈川県】	健康な心と体を育てる ～遊びの中で進んで体を動かす子どもを育てるには～ 神奈川県秦野市立西幼稚園	教頭	高木 真紀
【千葉県】	コロナ禍の制約が気づかせてくれた、重複障害児にとっての音楽教育の意義 ～児童の実態に応じた「音楽の個別化」の配慮と相互作用に「音楽の持つ期待感」を利用すること～ 千葉県立大網白里特別支援学校	教諭	大澤 理恵
【山梨県】	教員評価における「授業研究」改善へのアプローチ ～ワンペーパーがつながり多忙化・コロナ禍に負けない授業力向上のための取組～ 山梨県甲府市立湯田小学校	校長	一瀬 孝仁
【静岡県】	豊かなスポーツライフを支える「楽しさ」を引き出す体育科授業 ～「楽しさ」10の因子に着目して～ 静岡県牧之原市立勝間田小学校	教諭	宇田 哲也



【富山県】	RS(リーディングスキル)と数学の学力との関係性についての一考察 ～生徒の読解力の向上を目指して～	富山県高岡市立志貴野中学校	教諭	竹嶋 和裕
【京都府】	外国語科における小6と中1の接続に関する研究 ～小中連携による小6英語の実践を通して～	京都府舞鶴市立青葉中学校	教諭	武内 弥生
【京都府】	中学校社会科における主体性を育む形成的評価の在り方の追求 ～地理的分野「世界の諸地域・ヨーロッパ州」の単元を通して～	京都府京都市立北野中学校	教諭	小西 信行
【兵庫県】	「新書研究とポップ」を通じた総合的な探究の時間の授業実践と繋がりが合う地域の書店・学校・17歳の学び ～17歳のポップが伝える新書のぬくもりと地域との協働学習から見えるもの～	兵庫県立川西北陵高等学校	教諭	稲中 優子
【大阪府】	「総合的な学習の時間×家庭科 災害について考える」 ～探究的な学習を通して災害時を想定した、中学生にできる行動を考える～	大阪教育大学附属池田中学校	教諭	大野 真貴
【大阪府】	0から始める学校のICT教育の推進 ～熊野小ICT化モデルの実現に向けた2年4か月の取り組み～	大阪府堺市立熊野小学校	指導教諭	川俣 英之
【奈良県】	小学校第5学年国語科における「書くこと」の活動を通じた「考えの形成」の指導 ～「資料を見て考えたことを話そう」の実践から～	奈良県葛城市立新庄北小学校	教諭	毛利田 奈津子
【和歌山県】	特別支援学級における二次的障害改善の教育実践 ～応用行動分析を基礎とした自閉症スペクトラム障害のある生徒への教育臨床心理的支援～	和歌山県和歌山市立有功東小学校	講師	宇田 康助
【岡山県】	「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の往還」による自律的に学び続ける児童の育成 ～家庭学習と授業をつなぐ「予習的課題」の導入と「学びの足跡」の共有を通して～	岡山県美作市立大原小学校	指導教諭	永井 由紀江
【広島県】	主体的な問題解決を生み出す観察単元の指導の在り方 ～児童の課題意識と内化を促す「描く」活動の位置づけ～	広島県福山市立引野小学校	校長	光成 直美
【山口県】	「子ども自ら学びを創り出す授業づくり」に関する一考察 ～自らの「問い」を探求するために読む～	山口県下関市立長成中学校	教諭	野村 梨香
【香川県】	生徒が主体的に学び、より深い学びにつながるアウトプット型授業の研究(生物基礎・生物の指導を通して) ～PDR型授業の提案 P(preparation・presentation)予習 プレゼンテーション D(discussion)グループ議論 R(reflection)振り返り～	香川県立坂出高等学校	教諭	岡内 博信



【徳島県】	数学のよさを実感させる授業づくりについての実践研究 ～ STEAM 教育を取り入れて～	徳島県阿波市立吉野中学校	教頭	三橋 和博
【高知県】	関数的な見方・考え方を育成する教材の開発と授業デザイン ～『ピックの定理』に関数的な視点からアプローチする試みを通して～	高知県高知市立大津中学校	教諭	鈴江 暢朗
【高知県】	跳び箱運動の特性や魅力に触れる楽しさや喜びを味わわせ、資質・能力 をバランスよく育成する体育授業 ～ 1人一台端末を使って「見方・考え方」を働かせる学習を通して～	高知県高知市立秦小学校	教諭	横山 信吾
【大分県】	食品ロスさせない連携 ～食品廃棄物を活用した商品開発～	大分県立大分商業高等学校	教諭	山下 智史
【福岡県】	解のない理科の課題追究活動の研究 ～日常の科学トピックの教材化を通して～	福岡県筑紫野市立筑紫野南中学校	教諭	高嶋 浩二
【福岡県】	自己肯定感を高めるための、通級指導教室における自立活動について ～WISC-IV検査をエビデンスとした支援の見立てを通して～	福岡県糟屋郡粕屋町立粕屋中央小学校	教諭	坂本 美恵子
【宮崎県】	手洗いに対する意識を高める指導の在り方 ～手洗いの有効性の可視化と児童の実態に即した指導を通して～	宮崎県宮崎市立清武小学校	指導教諭	三角 友香
【熊本県】	自然の事物・現象から問いを見出し、自分の仮説を立てて科学的に検証 する授業づくり ～第5学年「種子の発芽と成長」の学習から～	熊本県球磨郡あさぎり町立免田小学校	教諭	大園 佳和
【鹿児島県】	情報活用能力を育み、主体的・対話的で深い学びへとつなげる音楽科授業の在り方 ～音楽科におけるICTの効果的な活用法～	鹿児島県出水市立鶴荘学園	教諭	原之園 亜季美
【佐賀県】	子供のコミュニケーション力を高める自立活動の実践的研究 ～語彙を増やし、実生活で使うことを通して、言葉表出の力を高め るソーシャルスキル・トレーニングの実践を通して～	佐賀県佐賀市立開成小学校	教諭	林田 真一
【佐賀県】	主体的に学び解決しようとする子どもの育成 ～自力解決・自己調整の場面を取り入れた算数科指導の工夫～	佐賀県佐賀市立小中一貫校北山校	教諭	遠藤 周平
【長崎県】	地域の偉人「千々石ミゲル」を核とした、「総合的な学習」へのアプローチ ～「具体的かつ発展的な教材」を通して、地域を身近に感じる（親しみ） 児童の育成を図る～	長崎県諫早市立北諫早小学校	教諭	吉武 徹也
【長崎県】	障害の重い生徒の教科学習における授業計画・実践・評価・改善について ～国語科の育成すべき資質・能力を「Sスケール」の視点で捉えた「評 価できる」指導の検討～	長崎県立諫早特別支援学校	教諭	松下 周平

賞 育 教 弘 教 日

賞 秀 優 最

賞 秀 優

賞 良 優

藍で繋がる伊達愛プロジェクト

～「地学協働」を意識した地域と共に歩む学校づくりをめざして～

北海道伊達高等養護学校

校長 浅井 謙作

1 はじめに

(1) 本校の概要

本校は、「伊達と言えば北の湘南！」で有名な北海道伊達市にあり、昭和56年4月に北海道で初めての職業学科の高等養護学校として開校した。現在106名の生徒が園芸科、窯業科、農業科、木工科、工業科、家庭総合科の6学科に在籍し、個々の特性を活かし卒業後に一般就労を目指す学校である。

以下、取組について論述していく。

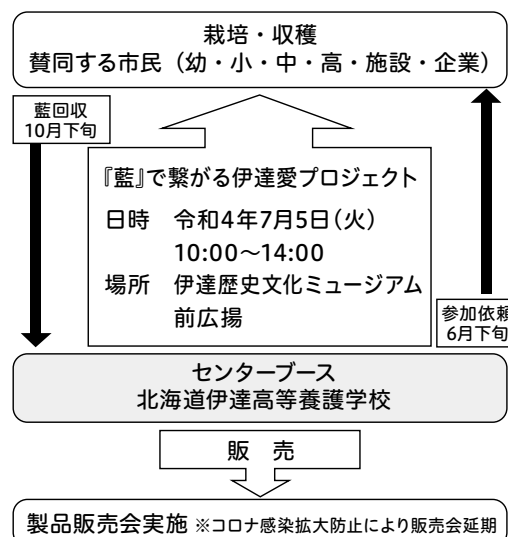
(2) プロジェクトの経緯

本校では、平成31年から伊達市の古き良き伝統や文化を知るために、伊達市の伝統工芸の一つである「藍染め」を研究してきた。そして先人の思いや技術等を少しでも伝承することで、本校の職業学科としての特性を活かして伊達市へ貢献することができ、伊達市の地域活性化の糸口に繋がるという思いの中で実践してきた。藍染めに関わる作業工程については、本校の教育課程上及び教場(農場)における藍の作業には限界があり、現状以上の作業(藍の生産性)を展開する困難さが課題となっていた。そこで、本校と伊達市がコラボレーションして藍の播種、そして苗を栽培から収穫、藍染めまで一緒に取り組むプロジェクトを立ち上げることにした。それが、「藍で繋がる伊達愛プロジェクト」である。本プロジェクトは、趣旨に賛同してくれる伊達市民や幼・小・中・高校及び施設、企業等の協力を得て、各々が「藍を栽培、管理して育て収穫して本校へ届けてもらう」というものである。藍の播種からポット上げまでは、本校農業科と園芸科の生徒が授業で取り組み、希望する方へ藍の苗を預け育ててもらい、収穫できるころに本校へ持ち寄っていただくという「藍育(あいいく)ファンディング」の実施を考案した。これにより、藍の生産性は向上し安定した藍染め作業実施の材料が確保できる。さらに、生徒にとってより良い学びの機会となることだけではなく、学校と地域が一つとなり取り組むことで、伊達市の地域活性化

化の向上に繋がり、伊達市が掲げる「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」にある3つの視点、①地域資源を生かした産業を育て雇用を生み出す②選ばれる「市民幸福度最高のまち」となる環境をつくる③生涯健康社会の実現、にも繋がると考えた。そして、将来このプロジェクトを通して伊達市民の障害者理解が今以上に進み、本校生徒が伊達市をはじめ、一般就労の道を切り拓くことができれば、伊達市におけるノーマライゼーションの深化につながり、伝統や文化を伝承し伊達市が掲げる「2060年の伊達市『こころ』も『からだ』も健康に暮らせるまち 健康に暮らすなら伊達市」のビジョンに繋がるプロジェクトと考えて推進してきた。

今回、本校が目指してきたのは、地学協働をキーワードに地域の伝統文化の伝承というとても大きなものである。その中でも藍染めは化学染めではなく、本来の藍独特の色合いが出る自然発酵にこだわった。1年目は惜しくも失敗に終わったが、今年度2年目において見事成功にいたった。これには多くの方々の御指導や御助言等サポートしていただいたからこそその結果である。特別支援学校による藍染めの自然発酵の成功は全国でも初めてのことだと感じている。

今回はこの快挙でもある自然発酵の成功までの生徒と



教師のプロジェクトをまとめた。

2 プロジェクトの取組

(1) 藍育ファンディング

藍育（あいいく）ファンディングでは、クラウドファンディングの「その目的に賛同する人がお金を出资し、できた製品を返礼品としてもらうシステム」を活用し、本目的に賛同する市民等へ藍の苗を渡し収穫まで育ててもらう。そして収穫時期に本校へ持ってきていただく。（もしくは取りに伺う。）その返礼品として、本校の製品を渡すというシステムを考案し、地域と密接に取り組める方法の一つとして進めた。

4月上旬、昨年度に播種した藍の苗を丁寧にバットから外し一つ一つポットへ移す作業から始め、

7月の当日まで愛情込めて温室で育てた。また、藍の苗は、天候の状態を確認し5月に本校の農場に定植した。

生徒たちは藍育ファンディング本番に向けて、接客対応など事前学習を行い担当職員と確認しながら本番に向かった。

7月5日(火)伊達歴史文化ミュージアム前広場において「藍で繋がる伊達愛プロジェクト」の藍育ファンディングを開催した。担当した3学年の生徒たちは、藍の苗約300ポットを無償で配付するブースと、各学科の製品（木工科のベンチ、園芸科のドライフラワー、窯業科のコップやお皿など）を格安で販売するブースを設営した。



開店と同時に市民が続々と集まり、藍の苗300ポットは1時間足らずで完売となった。市民からは、「みんなすごいね〜ありがとう!」という声をいただき、生徒たちは達成感や充実感を肌で感じ、地学協働の大切さを学んだ。

(2) スクールキャラクターの取組

生徒会がこのプロジェクトを盛り上げようと、本校のキャラクターづくりを提案し、全生徒に呼びかけ「生徒会企画! スクールキャラクターの募集!!」を始めた。応募総数40作品を超える中から全生徒による総選挙が行われ、圧倒的投票数で見事選ばれた。「侍のサム」と、「藍のアイ」を繋



げて名前を「サムアイ君」とした。今回生徒会が企画運営することで、生徒や先生方の中に一体感が感じられ、本校への帰属意識の高まりを感じ保護者や地域関係者の皆様からも高評価をいただき、生徒会執行部の生徒や担当職員も大変喜んでいました。決定後は、美術専科の職員により手書きデータからデジタル化された「サムアイ君」は、HPやのぼり、名刺、封筒などあらゆるところで使用され、今では本校のマスコットとして大活躍中である。

(3) 各学科の取組

本校には6学科があり、それぞれが藍で繋がりこのプロジェクトに参加し各学科の藍製品開発に挑戦している。具体的には下記のとおり。

①園芸科：藍の入浴剤や消臭ポプリの試作



園芸科では、刈り取り乾燥させた藍の葉や茎を細かく加工し、10cm角の大きさの布の中に詰めて入浴剤や消臭ポプリとしての試作に取り組んだ。藍は大学の論文等では、疲労回復や抗菌作用等様々な効果が証明されていることを突き止め、改良に改良を重ね成功することができた。

②窯業科：藍色の焼き物の試作



窯業科では、藍の葉を釉薬に混ぜ焼いてみたり、藍の葉を粘土に混ぜたりと挑戦したが、どれも上手くいかなかった。今のところ藍色の釉薬を使用した焼き物となっているが、現在も生徒と教師が日々研修し試作に励んでいる。

③農業科：藍の生葉染め、羊毛染めの試作



農業科では、藍染め液の作成が中心だが、それ以外にも生葉染めは、藍の生の葉と水をミキサーにかけ、そこに薬品を入れ一定の時間が経つとインジゴが生成され、本来の藍色ではなく綺麗な薄い水色に染まった。染めた布は生徒たちの主体的な取り組みの中でハンカチやコースターとして試作した。また、羊毛染めでは、ブローチやイヤリングなど生徒の斬新なアイデアを取り入れて試作中である。

④木工科：木材を藍染めしたベンチの試作



木工科では、木材を染める研修に取り組んでいたが、思うように染めることができなかった。何度も試行錯誤する中で、木材を熱湯にくぐらせると染まりやすいということ

が判明し、時間はかかったが、綺麗に染め上げることに成功した。

木工科では、地域の小学校から藍染めされたベンチの受注があり、デザイン重視ではなく安全性を第一に考えた新しいデザインは、生徒と職員が何度も検討を重ねた。例えば、染めた木材が服やズボンにうつるのではないかと、木材と木材の間に指や足が入ってけがをしないかなど、藍のベンチを作成する中で多くの気付きに触れることができ、主体的な学習への意欲も高まった。

⑤工業科：藍染め布を用いた金工カレンダー



本校の工業科作業学習ではコンクリート製品づくりがベースとなる。しかし、今回は各学科で藍を活用するというテーマのプロジェクトでもある

ので「金工製品に藍を活用する方向で生徒と一緒に何ができるか」というところから話し合い、金工のカレンダーに藍をコラボすることになった。切り出された鉄板を加工し、藍染めされた布を置きその上から透明のアクリル板で挟み固定すると、またひと味違うカレンダーとなった。

⑥家庭総合科：藍のロックビスケット



家庭総合科では、学校祭でも大人気であるロックビスケットとのコラボで進めることはすぐに決定したが、藍そのものが食べられるものなのかどう

うなのか、安全面を探ることから始めた。担当職員で手分けしながら調べ安全性を確保し、6学科最後になったが「藍(愛)のロックビスケット」として校内販売を実施した。購入した教師にアンケート用紙を配付しデータを集め製品開発に活かした。今回は乾燥葉を粗く砕いたリーフ、ミキサーで細かくしたパウダー、藍の種を煎ったシードの三種類とした。今後はデータ分析からシード

をベースとした新しい配合で再挑戦していく。

このように各学科が製品開発をすることで、生徒の主体的で対話的・深い学びの学習が向上し、職員と生徒の「難しいけど面白い。もっと挑戦したい」というモチベーションにも繋がっている。今後も引き続き斬新なアイデアを出しながら製品開発、試作に取り組んでいく。

(4) 返礼品について



1年目は、まだ藍染めの製品が完成していなかったため、本校の各学科の製品である窯業科の小皿、園芸科の入浴剤、農業科のポップコーンなどを返礼品として地域の皆様にお渡しした。今年度は、実際に藍染めした各学科の製品も増えてきているので、本校の自然発酵の藍染めで製品を量産し返礼品として、地域の皆様に少しでも還元していきたいと考えている。

(5) 道外の高校との交流学習の取組

1年目このプロジェクトを進める中で、教師から道内外で藍の取組をしている学校があれば交流学習をして生徒同士の繋がりを広めてはどうかと提案があった。そこで農業高校の教師の御協力もあり調べることができた。道内で藍染めに係わる取組をしている学校はなかったが、徳島の県立A高等学校が実際に藍を種から育て収穫し藍染めを行い、また、地元企業とコラボして地域活性化の一つとして取り組んでいることを発見した。そこですぐにその学校の校長へ連絡を取り事情を説明し交流学習をすることとなった。



令和4年1月18日(火) zoom 回線を用いた遠隔による、徳島県立A高等学校との交流学習が行われた。はじめに両校生徒の自己紹介から始まり学校紹介があった。当日本校は雪が積もっていたので徳島の生徒たちは「すごーい!!雪を見たいです!!」という場面もありリラックスしたムードで取りかかることができた。

本題の藍の取組については、本校から1年目の実践を説明。結果として自然発酵に至らなかったことを伝え終了した。次に徳島県立A高等学校の実践発表が始まると、記録をとる生徒、質問する生徒など積極的に関わろうとする姿が見られた。これはその場にいた

教師も予想をしなかったことだった。

生徒自らが自分たちの取り組んだ藍の自然発酵が失敗に終わり、落ち込んでいる中での交流学習だったので、何故失敗したのか、原因は何か、どうすれば成功する可能性があるのか、次から次へと質問が出された。徳島の生徒たちの、その一つ一つの質問に丁寧に優しい言葉でわかりやすく説明する姿は、まさしく本来の交流学習であり、時空を超えた素晴らしい交流学習となった。



終了後、生徒たちから担任へ話した言葉は、「僕たちは確かに自然発酵に失敗をしました。でも落ち込んでいる訳にはいかないし、これは失敗ではなく学びだと思いたいです。この学んだことを後輩たちに繋げたいと思います。僕たちはあと少しで卒業しますが、先生なんとかして成功させてください」と委員長が話してくれた。感動した。このプロジェクトを始めるときには、こんなにも生徒たちが主体的に取り組むことはあまり予想していなかった。どちらかという、教師が指示をしたそのとおりに生徒たちが動く、そんな活動が多いと予想をしていた。しかし、それがこの一年間取り組む中でこんなにも生徒たちが考え悩み行動し、上手くいかず失敗して落ち込みを繰り返し、それでも最後には後輩のために、なんとか成功させたい思いを担任へお願いをする。そんな成長を目の当たりにできたことは、藍の自然発酵の成功よりも、もっと大事なものを学びとれたことだと思った。

3 実践の成果と可能性

中央教育審議会は平成 27 年 12 月に、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」の各答申をまとめた。そこには地域との連携については従来から「開かれた学校づくり」として進められてきたが、「地域とともにある学校」はさらに一步踏み込んで、地域の人々と学校が教育目標やビジョンを共有して、一緒にパートナーとなることを求めている。また、北海道教育委員会では、地域学校協働活動を「地学協

働」と造語化し、地域と学校が相互にパートナーとして連携、協働する活動を積極的に展開し、地域と学校が Win-Win の関係を構築することが求められ、地域のあらゆる方々と繋がり参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う活動としている。

今回、本校が取り組んだ「藍で繋がる伊達愛プロジェクト」は、こうした背景を基に伊達の伝統工芸の一つである藍に焦点を当てた。このプロジェクトを通して高齢者、成人、学生、保護者、民間企業、障がい者施設等様々な幅広い地域住民等の皆さんと繋がることで、本校のプロジェクトを知っていただける機会だけではなく、伊達市の伝統工芸や文化、伊達市が進める「だて学」を振り返る機会となった。学校教育目標や伊達市が掲げる「2060 年の伊達市『こころ』も『からだ』も健康に暮らせるまち 健康に暮らすなら伊達市」のビジョンに繋がり、さらに地域と学校が Win-Win の関係となっていく可能性が非常に大きいと考えている。

4 おわりに

このプロジェクトを通して改めて学んだことは、学校内で完結している学習からの脱却ということだった。地域に足を運び地域を一つの教場として捉え、地域で活動する中で、多くの地域の方々と関わることで、学校教育はこれで大丈夫か、ずれていないか、遅れていないかなど、点検、発見、改善等様々な視点を学ぶ機会となった。地域住民や保護者が学校運営に参画する「コミュニティー・スクール(学校運営協議会)」の推進が挙げられている中、本校もコミュニティー・スクールを今年度から設置し、多くの御助言をいただきながらこのプロジェクトを進めてきた。こうした社会や地域の繋がりの中で学ぶことで、生徒たちは、自分の力で人生や社会を少しでもよりよくできるという実感をもつことができ、「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る」という大きな目標へ繋がっていくと確信している。

今回、藍の自然発酵に成功し、プロジェクトを進める中で一定の成果が得られているが、まだまだ課題も多くある。この課題一つ一つにしっかり向き合い、生徒、職員、そして地域が楽しみながら考え悩み、ワイワイしながら多くのことを学び合える、そんなプロジェクトになっていけるように引き続き学校としてできることを全力で取り組み探求し続けていく。

対話の質を高める授業構成と言語化の見取りで、深い学びの扉を開ける生徒の育成

～思考により生まれる内なる言葉を外言化することの重要性に着目して～

鳥取県鳥取市立桜ヶ丘中学校

校長 音田 正顕

1 はじめに

「深い学びに導く授業とはどういうものか」「内部で深まった学びをどう見取るのか」「基礎基本も定着しづらい現状では、深い学びへの到達は困難ではないか」。

3年前、新学習指導要領の全面实施を前に、職員から多くの疑問が挙げられた。さらに、新型コロナウイルス感染症の拡大で対話的な学習に条件が付き、慎重を期した中での授業実践は、様々な点から従来の学び方を見直さなければならない必要性に迫られていた。

2 主題設定の理由

学びに対する興味・関心の希薄さや、受験終了と同時に剥落する「知」の危険性は、日本の教育の危機とされてきた。本校でも、個人で習得した知識・技能を活用して仲間と共に発展させる活動や、「わかった、できた」という達成感に加えて更に新たな問いを立て、探求しようとする姿には至っていなかった。そこで、深い学びのきっかけになると考えたのが、「思考と表現の間にある生徒の気づきや学びを見取る」ことである。

本校の特色として、校区の全小・中学校で取り組む短時間グループアプローチが挙げられる。これは人間関係づくりを目的としたスキルの醸成と、自分に向き合う時間を週1日終学活に10分間だけ取る活動であるが、7年目を迎える実践の積上げにより、意見交流に抵抗感が少なく、誰もが思いを話せる強みに繋がっていた。これを授業に生かし、対話を重視して学びを深める「桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング」という本校の学習スタイルが生まれた。授業の本時目標を達成するために、どのような学習の手立てを重視するかを「態度目標」として示すことにより、生徒同士の対話や学び合いを意図的に取り入れる学習の型である。生徒の関心や意欲は高まり話し合いは活発になったが、学力の定着や深まりについては効果が実感できないまま試行錯誤を繰り返していた。その打開策として研究の柱としたのが、「生徒の思考した言葉(内なる言葉)を、誰か(何か)に表現する(外言化する)、その過程に着目する」授業構成である。既



グループで和やかに意見交換する生徒

にある「話し合いの土台」を基に、話し合っている内容のレベルを教師が丁寧に見取り、話し合いの精度をどう高めていくかを各教科で研究することとした。

本研究は、「①学びを深めるための授業の構成」「②①を実現するためのタイムマネジメント」「③学びの深まりを見取る方法」の三つを柱として進めていった。

3 研究の構想

(1)授業構成

本校では、以下の展開で授業の型を構成していた。

桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング【従来型】

- ① 「目標・授業の流れの提示」
- ② 「個別の取組」
- ③ 「グループでの取組」
- ④ 「全体交流や評価問題の実施」
- ⑤ 「振り返り」

単にグループ協議するだけでは、話し合いに深まりを欠き、表面的な活動に終わってしまう。また、十分に吟味した発問であっても、深まるかどうかはグループの力量に左右されることが多く、学級全体として目標に到達できないこともあった。この解決策として、一度の話し合いで学びを深めようとせず、最初の協議を深めるために二度目の話し合いを設け、学級全体で一つの課題を追求していくことにした。従来型の④で全体交流を行った後に、学びを深めるための活動を加え、全教科共通の「改定型」を以下のように示した。

桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング【改定型】

- ① 「目標・授業の流れの提示」
- ② 「個別の取組」
- ③ 「グループでの取組」
- ④ 「全体交流の実施」
- ⑤ 「グループでの取組(④を深める)」、作品制作などの場合は「個別の取組(自身による再考、発展的・挑戦的な制作、④を深める等)」
- ⑥ 「二度目の全体交流や評価問題の実施」
- ⑦ 「振り返り」

従来型は主として「知識・技能」「主体的に取り組む態度」を養う授業の型とし、改定型を「思考力・判断力・表現力等」を養う授業の型とすることにした。

(2) 二度の話し合いを持つために

対話的な活動を入れても、結果を全体発表するかしないかの内に時間が終了してしまうことがある。それを二度の話し合いを行い、発表し、さらに振り返りを行うとなると、学習時間をどう調整するか戸惑いの声が聞かれた。そこで、一単位時間に二度話し合うための時間確保の仕方を全体研究会で提案し、研究グループを組んで協議を重ね、実践していくこととした。

(3) 学びの深まりの見取りについて

「〇〇を頑張った」、「〇〇について分かった」、という振り返りは生徒の意欲や達成感の面では注目すべき点であるが、客観的な評価とはなりにくい。そこで、「振り返りに何を書かせるか」「何をどのように説明させるか」「目標達成のためにはどのような発問が必要なのか」等について教材研究を深め、評価につながる表現方法や表現内容の見取りを教科ごとに明確化した。

4 実践事例

(1) 桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング[改定型]の実践

実践例 1【社会】アフリカ州「アフリカが抱える課題とその解決につなぐための取組」

目標「貧困問題の解決策を考える活動を通して、アフリカの自立は世界全体で取り組む課題であることを学ぶ。」【思考・判断・表現】

授業の流れ

- ①**目標の提示**「アフリカの課題に対して、どのようなことに取り組んだらよいか考える。」
- ②**個別の取組**「貧困から抜け出すために必要なことは何か考えよう。」
- ③**グループ学習**「自分の考えを班で共有しよう。」
- ④**発表**「③の発表」
- ⑤**グループ学習**「③の発表を元に、パートナーシップの視点からどのようなことができるのか考えてみよう。」（飛躍点）
- ⑥**発表**「⑤の発表」
- ⑦**振り返り**「今日の授業で学んだこと、もっと調べてみたいこと」

実践例 2【国語】表現を見つめる——「走れメロス」

目標「観点を立てて作品を分析し、物語の展開や人物像、表現の工夫が作品の魅力につながることを学ぶ。」【思考・判断・表現C読むこと(1)エ】

- ①**目標の提示**「作品の魅力を分析し、伝えることができる。」
- ②**個別の取組**「観点ごとに、作品の魅力を分析しよう。」
- ③**グループ学習**「考えを班で共有しよう。」
- ④**発表**「③の発表」
- ⑤**個別学習で④を深める**「紹介された意見を参考に、作品の魅力を整理して文章にまとめよう。」（飛躍点）
- ⑥**発表**「⑤の発表」
- ⑦**振り返り**「今後、他の作品を読むとき、どのような観点に着目して読むとよいか。」

(2) 二度の話し合いを持つためのタイムマネジメント

一単位時間の授業で、二度の話し合い、もしくは作文やレポートを完成させ、さらにそれを発表して振り返るためのタイムマネジメントとして、以下の点に留意して授業を展開した。

①個別の取組を十分に

個別活動の時間を確保し、ワークシートやノートにあらかじめ自分の考えを書かせる。

②一度の話し合いは、基本5分以内に

二つの資料を読み比べてそれぞれ分析する場合などでも最大7分以内を目安とする。

③ホワイトボードには結論（キーワード）のみ

細かな理由や発表の原稿、資料の引用等は書かない。

④発表順は教師が意図を持って指名

教師は話し合いの時点で、おおよその内容を把握しておく。二度目の発表は時間次第で数組に絞り、残りは掲示に留める等の工夫や配慮を行う。

⑤司会者指導

授業の流れ、司会者の役割、留意点などを確認する。

(3)「飛躍点」の設定による学びの見取り

「教科会や教材研究の重要性を再確認する中で、教師は単元や授業において生徒の思考を集中させ、深めるポイントを掴むことができるようになる。」本校研究の助言者から、そのポイントを『飛躍点』と称し、タイミングを逃さずに適切な指示や発問を行い、対話的活動を入れて思考を深めさせるよう指導を受けた。また、生徒が短時間に集中して思考した内容を、どのように言葉として表現しているか（内言の外言化）に意識を置くようにした。話し合いの内容やまとめ、発表など、生徒が自分の考えを言語化した元の内容を類推することで、教師が現状のレベルを見取る感度や精度が向上した。教師は、生徒が問いに対して書き表す文章や発言以上に大量の思考をしていることを認識すべきであり、その内なる言葉を目的に応じて整理し、表出させることが深い学びの入口に立たせる鍵になると考えた。

(4)一人一台端末の活用

個人の意見を班へ素早く反映させたり、一気に全体共有したり、多くの意見を集約するなどの目的のため、タブレットを有効に活用することとした。



Jamboardで「具体」と「抽象」に分類していく(国語)

5 成果と課題

(1)桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング改定型

①社会「アフリカが抱える課題とその解決につなぐ取組」

「アフリカの課題に対して、どのようなことに取り組んだらよいか考える」という目標に対し、一度目の話し合いでも「食事と安全な水」「家」「教育」など、複数の提案があったが、この段階では課題解決に必要なものを得る方法や、事象と事象との関係性までは言語化できていない。また、「貧困じゃない人が手助けをする」などパートナーシップに言及する意見もあるが、「貧困じゃない人」とは誰か、どんな支援をするかなどは明確にはなっていない。そこでパートナーシップに着目してさらに何ができるか話し合わせると、「他国からの支援」「輸出」など意見がより具体化されると同時に、アフリカ州のみに置かれがちだった視点が、世界経済や国際交流など、よりグローバルな視点に広がっていった。

生徒用ワークシート:簡条書きから文章へ発展

まとめでは、「さまざまな支援」など抽象的な理解ではなく、「経済成長した他国からの金銭的支援」など、思考を具体的に言語化した記述が92%、支援だけでなくアフリカの自立に関わる内容にまで言及した記述が84%あり、学びの深まりが見られた。あらかじめ「パートナーシップ」について示しておくのはいかがでしょうかとも協議したが、生徒の思考には順序があり、初めから広い視野で考えられる生徒は限られている。学級全体で深い学びに到達するには、二段階で順を追って進行していくのが効果的だという結論に至った。

②国語「走れメロス」

作品の魅力については「場面展開」「表現の仕方・文体」「主題」「語り手」「人物像」などの観点を置き、フォームで投稿して共有した。

場面展開	○ピンチもなくそのままに合うのではなく何か山場を作ること また、読者を最後まで引きつけることができる。
表現の仕方・文体	○話の切り出し方が急で「メロスは激怒した。」から始まるので読者に「何?」と思わせることができ、次のストーリーに興味を持たせる事ができる。
主題	○妹の結婚式のなごやかが後の激しい展開を引き立たせる
語り手	○冒頭の上は読み込まれたように深かった→王の怒りを感じる→王の心の揺動
人物像	○走るメロスのスピード感ある書き方が、読者も一緒に走っているような気持ちにさせる。ハラハラして、体ではなく心がストーリーの中を走っているような感じになる。
	○ 寝まいきなことをいひつゝ、」から後に続く表現で王の邪悪さやサイコパス感、人を信じることのできない気持ちがわかる。
	○メロスに子供がいたと行動は違うと思うので、独り身の設定はともいいたく思います
	○メロスと王の立場や年齢、考え方が真逆で、その設定がキャラクターを際立たせている。
	○フィロストラトスは一瞬しか出てこないけど、描かれていない王とセリスティアウスの三日間を想像させたり、メロスに走る意味を深く考えさせたりするうえで、実はとても重要で、欠かせない人物

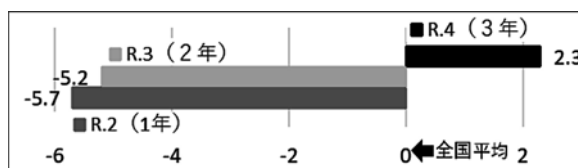
観点別作品分析のまとめ(一部抜粋)

この時点ではまだ簡条書きで、表現も拙い。そこからさらに任意に二つ以上の観点を選択し、ひと続きのまとまった文章として、20分程度で書きあげていった。



「走れメロス」の魅力について論じた生徒のノート:ノルマはノート半分以上、1頁以内。7割の生徒が1頁近く一気に書き上げた

以上のように振り返りやレポートを書かせることに重点を置いた活動を継続していった結果、令和2年度入学時点では、教研式標準学力検査の「書くこと」領域で全国平均から5.7ポイントのマイナスだったが、令和4年春には2.3ポイントのプラスに転じた。



(2)タイムマネジメント

①「個別の取組を確保」することが、最終的には時間短縮につながった。早くグループ活動に入らせたいという焦りもあるが、考えがまとまっていなくて、結局のところ話し合いそのものが進まず、深まっていかなかった。また、生徒たちは個別活動のあとにグループでの話し合いがあることや、この段階でしっかりと取り組んでおかなければならないことを理解していたため、話し合いは意見を集約することに集中できた。

②「基本5分以内の話し合い」は、当初は時間が足りず苦しい印象があったが、教材の難易度に応じて発問や協議問題を工夫することで、短時間で濃密な意見交換を行うようになり、5分以上の設定をすると却って時間を持て余すようになった。コロナ禍における近距離でのグループ活動を短時間とすることは、話し合いによる感染の不安が軽減されるメリットもあった。

③「結論のみのホワイトボード」で、詳しい説明を書くこ

とのみに終止したり、できる生徒が発表原稿を書くだけ、という状況を回避したりでき、話し合いの時間確保につながった。一方で、ホワイトボードが意見集約のツールであり、書けていることが発表準備完了の目安となっているが、更なるスリム化のためには道具に頼らない口頭での発表も検討したい。これは意識の高まりと、発表技能の向上が前提条件である。

④「発表順の指示」で、関連した意見を続けて発表させたり、内容の深まりに応じて順を組み替えたりすることで、よりよい理解につながった。また、二度のうち必ず一度は発表できるようにすることで生徒の発表意欲も維持できた。

⑤「司会者指導」により、流れを十分に理解して話し合いに臨むことができる、司会者同士が協力して授業を良いものにしようとする一体感が高まる、司会者が意欲と責任を持って授業に取り組むことができる、という雰囲気が醸成され、話し合いが充実した。

(3)飛躍点の試行と「深い学び」につながる振り返り

観点を明確に指示し、学びの深まりが具体的に記録される振り返りやまとめを目指した。以下に、目的が達成されたと推察される振り返りの実際を示す。

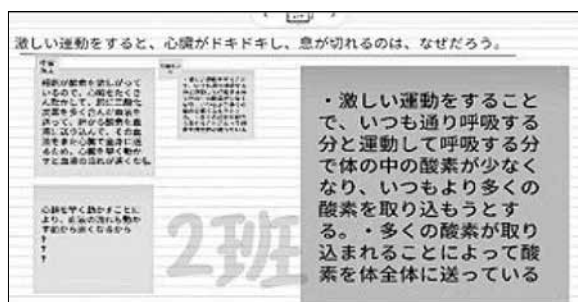
【国語】
 ○質問で相手の思いや考えを引き出すには、話し手から出てきた言葉やキーワードから関連付けて質問したり、話題になっていることをきっかけにして面白さを聞いたりすると考えを引き出せると思った。
 ○話をつなげていくことで、その話の本質を知ることができると分かりました。話してくれたことをつぶしてしまわず、広げていくことで、深く知ることができるのではないかと思います。

【保健体育】
 ○お尻を上げたら前に出やすくなりました。しかも、下を向きながらスタートできるようになりました。
 ○強く速いバスは通ったけど、遅いバスは通らなかったの、速いバスを出せるようにしたいです。

【理科】
 ○人間がけがをしたら、皮膚が破れることがあるけど、植物は細胞がなくなっても成長点を保護する根幹となって、自分の成長を支えていますすごいと思った。
 ○水を電気分解することができる考えた人はすごいと思ったし、私たちの生活に結び付いているなと思いました。SDGsにも貢献できるなと思いました。

(4)タブレットを活用した話し合いと意見集約

Jamboard を話し合いに活用した事例では、意見の視覚化がスムーズであったと同時に、個の意見を集約し、班全体の意見として集約される過程が可視化された。グループ協議のあと、全体の意見集約として Google フォームを活用した事例では、より多くの意見が短時間に集まり、通常の授業では紹介されにくい一人ひとりの考えも、全体



個人の見解を左に、集約した後の班の見解を右に大きく色分けして示す (理科)

に対して反映されやすかった。一方で玉石混交の情報が整理されないまま集まると、情報の取捨選択に苦勞する生徒の姿も見られた。



オンライン授業 (数学)

6 おわりに

本研究は、コロナ禍にあっても生徒の学びを止めない点を考慮し、深い学びに導く手立てについて全職員で研究協議し、実践した一考察である。「活動あって学びなし」と言われることもある対話を重視した学習について、これまでの授業を見直し、新たな観点で三つの方策を立て、思考力・表現力の伸長を期する授業づくりを目指して全教科で取り組んだ。

深い学びにつながる授業を構築するためには、何より教材研究が重要である。しかし、若手教師も増える中、独自のやり方でよりよい授業を継続して行うのは負担も大きくなる。全校体制で「型」となる学びのスタイルを構築し実践することを通して、教師にも生徒にも定着していく中で目標の達成が積み上げられ、学びの質の向上を実感できるようになった。特に、生徒が頭の中で思考している内容をどのように表現しているかに着目して指導することで、生徒は自分の考えを誰かと共有したいと思うようになり、表現を工夫することの意義や面白さを認識するようになっていった。また、教師の生徒理解の感度も高くなり、教師と生徒間の信頼度と呼応して良い意味の緊張感が生まれ、授業の目標を達成しようとする雰囲気が高まって、授業の満足度も上がっていった。

今後は、思考と表現の間の言語の往還をどのような根拠を持って見取り、評価していくかを掘り下げ、各教科の見方・考え方を基盤にして、生徒が深く学ぶことの意義をさらに感じられるような授業づくりを目指していきたい。

病弱教育における「つなぐ」ことによる豊かな学びの実現

～ ICT 利活用による学習環境のデザイン～

千葉県立四街道特別支援学校

校長 日下 奈緒美

I はじめに

新型コロナウイルス感染症の感染拡大禍に、全国の学校がこれまでの学びのあり方を根本から見直すというより、従前の形を否定され、創意工夫というチャレンジを繰り返す中で、子供たちも学びの形を変えてきた。病弱教育は、病気で入院や治療を必要とする子供たちの学習保障をする教育である。病気の子供たちは、治療や病気により、様々な生活規制を余儀なくされる。コロナ禍になる前から、「できないことをどうしたらできるか」の創意工夫を繰り返してきた教育でもある。

本校では、平成 27 年度から 4 年間、文部科学省の研究指定を受け、高等部での ICT を活用した遠隔教育のあり方を検証した。その成果を教育課程に生かすなど、早くから遠隔での実践に力を入れてきている。

II 本校の概要

本校は、隣接の医療機関（以下、A 病院）のほか、2 医療機関と連携している。近年の医療の進歩に伴う入院の短期化・頻回化で、自宅での加療も少なくなく、本校も約半数の児童生徒は自宅からの通学生である。多くは慢性疾患であるが、かつて多数を占めていた喘息や筋疾患は過少で、精神疾患が増加傾向にある。

III 研究の概要

1 主題設定の理由

GIGA スクール構想下、遠隔教育はさまざまな実践が繰り返されている。病弱教育でのこれまでの実践を生かしながら、ICT による「つなぐ」意味を再考し、豊かな学びの実現を目指した学習環境をデザインすることが重要である。併せて、つなぐ意義を考えることで、学校教育の本来の意義について見つめ、ICT 利活用の推進に生かしていきたいと考える。

2 目的

配信することやつなげることが主体となりがちな行事

での取組を通して、遠隔における ICT の利活用のあり方を整理し、学校教育の意義を考察する。

IV 実践

1 高等部訪問学級の卒業式

(1) 現状

本校から車で 40 分ほどの距離にある B 病院には、本校の院内学級と訪問学級がある。令和元年度末からの感染症対策下、教員が入ることができない。令和 3 年 10 月より、遠隔による授業が可能となったが、セッティング等を医療側に全面協力いただいている状況である。また、訪問教育は、週 2 回、一回が 30 分と限定され、教材等の搬入も月 1 回と決められている。

対象生徒は、重度重複障害のある高等部 3 年生である。表出の見取りが難しく、多くの時間をベッド上で過ごしている。

(2) 経緯—遠隔での授業再開

本校では、直接対面できない場合でも、遠隔授業を実施するなどして学びの保障を行っている。画面越しに一对一の対面で行う形と、画面を通じて児童生徒が教室の授業に参加する形が主である。いずれも児童生徒が操作して活動に参加することが求められるため、障害が極めて重く、自らが動いて画面に働きかける等の反応が困難な児童生徒にとって、遠隔授業の取組は難しいと考えていた。そこで、第三者（医療スタッフ）を介した働きかけを試みることにした。

(3) セッティング

教員は病棟内にも入れないため、生徒の学習環境に関しては、全面的に医療スタッフの協力を得なければならない。これまでの、音楽 CD をベッドサイドでかけてもらうのとは違い、今回は PC や Web 回線の準備や、生徒への働きかけもお願いする。医療スタッフに教員の代替として動いてもらうためには、事前の準備はもちろんのこと、当日も、わかりやすい伝え方や言葉、教材を考えて臨むことを大切にしたい。最初のうちは、30 分の多くを調整にとられることもあったが、

授業後に情報交換を必ず行い、伝え方を工夫することでお互いが徐々に慣れ、取り組める活動が増えていった。五感に働きかける音や香り、季節を感じるものを取り入れたり、母学級の友達との交流や、卒業制作、書初めに取組んだりした。これらの授業における取組が、卒業式当日の連携に生かされたと考える。

当初は、学校の卒業式に遠隔で参加する形を想定した。しかし、式に参加するというより、本人が卒業を感じられることを大切にしたいという思いがあった。具体的には、本人への直接的働きかけとして「証書を受け取る」ことができる環境設定を実現したいと考えた。通常の授業同様、全面的な医療側の協力が必要である。依頼したいことを具体化し、相互に要望と対応可能なことの調整を丁寧に行った。特に、①生徒本人の様子を保護者にも伝えられること、②主治医からの祝辞、③卒業証書の授与方法に焦点を置いて環境を整えた。

(4) 当日の様子

学校の体育館で卒業式が行われた同日の午後にも、もう一つの卒業式が挙行された。

①生徒本人の様子を保護者に伝える



図1 本人(病室)・主治医・学校をつないで一訪問学級卒業式

保護者も、約2年近くの間ほとんど生徒に会えていない状況だった。卒業式当日は、画面を通しての間接ではあるが対面がなかった。母親の言葉かけに、わずかではあるが表情の変化が見られ、それに気づいた保護者が満面の笑みを見せたことが印象的であった。

当日は、カメラでとらえた生徒の表情を、参加者によりわかりやすく大きな映像として伝える工夫をした。そのことにより、保護者も細微な本人の表出に気付くことができ、卒業の喜びを親子で共有できている感覚を得られている様子がうかがえた。

②主治医からの祝辞

主治医は、ベッドサイドで祝辞を述べる予定だったが、当日の不測の事態により、他の場所からの出席となった。想像をはるかに超える多忙な中で、出席を快諾いただけただけでなく、祝辞を頂戴できたことには本当に感謝

している。「もうひとつの式」を実施することは、病弱の学校では珍しいことではない。その際、どうしても場所や時間の都合から縮小されて実施することが少なくない。そのような中でも、医療関係者からの祝辞をいただけたことは、生徒本人も喜んでいるであろうが、関係する教員はもとより、保護者も身の引き締まる思いで言葉に耳を傾けた。不測の事態でもご臨席叶ったのは、遠隔での環境設定をしていたからでもある。

③卒業証書の授与

今回、「本人を感じられる式に」という思いの中で一番にこだわったのが、証書授与の仕方である。医療



図2 卒業証書授与

スタッフと相談し、アイディアを出し合った。学校で校長が証書を読み上げて画面越しに差し出し、病室で医療スタッフが本物の証書を本人に渡すという演出とした(図2)。

(5) 医療スタッフの感想

式後、これまで本生徒に縁のあった職員がお祝いの言葉を伝えるために参集した。12名の本校職員が列を作り、一人一人順番にカメラの前に座って画面向こうの生徒を祝った。本人と一番長く時間を共にしたという旧担任が話しかけた時、画面から医療スタッフの驚きの声が聞こえてきた。「心拍数が上がっています!」「○○さん、泣いています、涙が・・・」一番に驚いていたのは医療スタッフで、後に「考えさせられることが多かった、患者さんとの向き合い方が変わります」と感謝の言葉を伝えてくれている。

2 全校運動会

(1) 現状

本校では、小学部、中学部、高等部が一堂に会する運動会を、例年5月頃実施している。全校が一体になれる、重要な行事の一つである。しかし、「一堂に会することは、ここ何年かコロナ禍にあって実施できていない。令和2年度は、休校で予定日にできず、その後も見通しが立たない等の理由から、その年度は中止された。

昨年度は、感染拡大の心配があるものの、形を変えての実施を模索し、遠隔でつなぎ分散実施した。当初は、教員の中には、一緒にできないことや画面で観ても限

界があることへの否定的な意見もあった。しかし、実際に行ってみると、競うことの楽しさ、見合い応援しあう嬉しさ、そして称えあう喜びを、児童生徒がそれぞれに感じることができ、その大切さに気付くことができた実感した。

今年度、つなぐことで精いっぱいな感も強かった昨年度の経験を活かしながら、再び分散実施をすることとした。

(2) セッティング

体育館を本会場に、競技ごとの入れ替え制とした。競技に参加していない学部学年は、各教室から画面を通して応援する。また、A 病院の感染対策により登校できない児童生徒は、病棟内の別会場で競技に参加し、応援する。他病院や自宅からも同様に参加できるようにした。

昨年度の経験を活かして「臨場感が持てるよう」にすることにも力を注いだ。昨年度は、“まず” つながることを目標に全校が一体になれる環境を設定したが、今年度は、“どう” つながるかの工夫をした。ある機材と流れや活動の工夫をすることで、一体となれる空間を子供と大人とともに作り上げることを目指した。

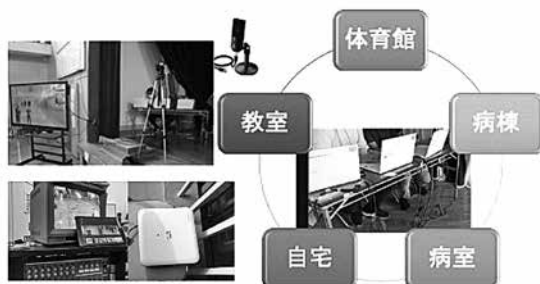


図3 分散実施の運動会一つながりの工夫

①音を伝える工夫

USB コンデンサーマイクの設置場所を工夫し、より各会場で聴く本会場の様子が伝わりやすいようにした。通常の集音マイクであると、体育館のような会場の音がきれいに伝わらず、聴き手にはストレスになってしまう。体育館のスピーカーの音を拾うのに、どの位置に設置をしたら一番臨場感のある音が伝わるかを何度もシミュレーションして当日に備えた。

②流れを止めないタイミングの工夫—3台の PC

複数会場をつなぐことから、円滑な画面の切り替え等の動作性向上のために3台の PC で配信体制を整えた。ホスト用はビデオカメラの映像と音声を配信、入室者の参加許可や、動画や写真、資料の配信用とした。モニター用は各場所でのように聞こえているか確認し、それぞれの配信状況に応じた微調整が可能とした。レコーディング用は記録するためであるが、他の2台と分けることでパフォーマンスの向上が期待できる。

③流れを止めないタイミングの工夫—練習風景動画

入れ替え制では、各教室等から体育館まで移動する時間が必要である。一定の時間の換気、体調に合わせた移動ペースの配分等を考慮すると、どうしても各競技の間に児童生徒の待ち時間が多くなってしまふ。

そこで、事前に各学部学年が取り組んでいた練習風景を動画に編集し、入れ替え等の待ち時間に流すようにした。これは、昨年度の実践から、児童生徒の参加がより主体的で、一体感をもてるようにとの工夫である。児童生徒は、「間」の時間も十分に楽しみながら、他学部の先輩後輩が、友達が、どんな取組をしていたのかを知る機会にもなり、その後の応援にもつながっていた。

④臨場感をもたせるカメラワークの工夫

本会場の体育館の様子を配信する際の撮影には、より機動力が高くなる iPad 等の端末を活用した。

昨年度は、主にビデオカメラによる広角機能等を用いたが、可動性が低く、迫力の点で限界があった。そこで、今年度は、撮影要員を増やし、端末でより柔軟な角度から撮影し、体育館の臨場感が伝わるようにした。

(3) 当日の様子

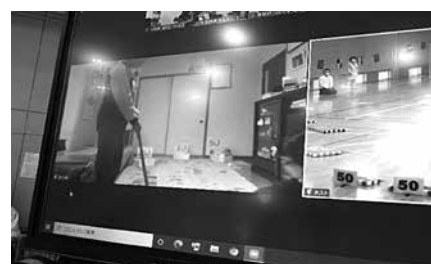


図4 自宅がもうひとつの競技場

体調等により登校できない児童生徒は、自宅から参加した。家庭の協力あ

つてのものだが、自宅に競技スペースを設け、リアルタイムで競技に参加した。同じ組の児童生徒は、映し出される画面に集中し、その勝敗に一喜一憂した。自宅で参戦した児童生徒は、自身の結果が体育館の得点板に反映されるのを見て満足そうな表情をしていた。

V 考察

1 学習を保障する—学びたいを大切に

ICT 活用により、多様な学びの形態が可能となった。

実践の2全校運動会では、児童生徒がそれぞれの体調等により、多様な参加形態をとった。登校できなければ参加できないではない。体調がよくなければ競技に出られないではない。また、自分のことで精いっぱいだから他人のことまで関心が及ばない、ではない。子供たちは友達や仲間の頑張っている姿を見て、自分も頑張ろうとする力を得ることができている。自分の体調が悪くなるまで友達を応援する姿、他人に無関心だった子が画面の向こう

にいる仲間を一生懸命励ます姿、負けず嫌いな子が自分に勝った相手を称賛する姿、そんな姿が運動会にあった。このような姿を見せられると、大人もどんなに準備が大変であっても、やってよかったな、と感じる。こうやって、教員も子供たちから力をもらっている。

子供にとっての学びたいは、希望であり、生きる力そのものだと考える。「学びたい」を大切にすることは、希望を持っていいよ、という学校・社会からのメッセージでもある。

2 学習環境のデザイナー—わかる喜びにつなげる

実践の1高等部訪問学級の卒業式では、生徒本人を主体に演出を考えた。どのような内容であれば、本人が卒業を感じられるか、周囲の祝う気持ちが伝わるかを、担任が大事にしたことで、学校での式に合わせてつなぐことにこだわらない式を行うことができた。ここに、本当の意味での「つなぐ」ことの大切さがあると考えている。本実践では、医療側の協力がなくてはなしえなかった。卒業式挙行の背景には、昨秋から始めた遠隔授業において、医療スタッフが徐々に教員の指示への対応に慣れ、生徒へのかかわりのポイントを押さえてくれていた等の積み重ねがあると推察する。週2回、一回が30分程度の限られた遠隔授業ではあるが、単につないで配信するのではなく、常に教員が生徒の実態に合わせた働きかけを行っていたから、医療スタッフも真摯に取り組んでくれ、その結果が卒業式の当日に生まれたのだと考える。本当の「つなぐ」を考えるとき、具体的なつなぎ方に回答があるのではなく、やはり、児童生徒の実態をとらえ、どのような豊かな学びを実現するかが考えられることなのである。

3 「学ぶ」ことの意義—教育の意義を考える

平成6年12月、当時の文部省は「病気療養児の教育について」で、病弱教育の意義を明示している。平成25年3月には再度、その取組の徹底を図るよう通知している。病弱教育の充実については、病気療養している児童生徒の教育保障の点から、その重要性が示され、理解と啓発が進められてきているところである。

一方で、GIGA スクール構想下とコロナ禍での「学校にいけない」状況対策が相乗し、ICT 利活用での遠隔授業等は、Society5.0 推進において、珍しいものではなくってきている。これまで、退院後の復学(自分の元の学校に戻る事)の際の支援に、遠隔でつなぐことを提案しても、相手校からよい回答を得るのは難しかったが、その障壁も近年少なくなってきたと感じることもあ

る。ICT 利活用による、つなぐことへのハードルはだいぶ低くなっているのは事実である。

そこで、今一度、病弱教育で従前から大事にしてきたことや、平成6年通知で示された意義を改めて考え、現況における学校教育の役割・意義を意識した取組みが重要と考える。学習保障とは、単に、知識・技能を教えることや、教科書の内容を進めることではない。「学習保障」することで、子供たちが担任の先生や学級の友達から離れた孤独感や喪失感を埋めることができるのであり、そのことが治療に向かう力となり、その子らの将来につながる力になる。つまり、つながって、勉強する機会を保障できるような条件が整ったのであれば、どうつながるか、が学校教育としては重要だと考える。

VI おわりに

これからの生活に不安を覚えながらも希望に満ち、新しく始まる高校生活にわくわくしていただろう、そんなときに病気がわかり入院した生徒が、この4月、本校に転入した。これから遠隔授業が始まり、自分の高校に戻ること目標に入院生活も勉強も頑張るつもりだった。そんな矢先に、その子の人生が閉じられた。あまりにも急だった。突然の家族や友達との別れは、本人自身が一番驚いていたことと思う。何より、これからたくさんのしたいことがあったであろう、何がしたかったのだろうか、と思うと、「生=いま」という時間に向き合う子供たちの時間を大切にしなければと、病弱教育を担う我々の責務を改めて重く感じる。遠隔授業の準備をもう少し早められなかったか、高校との教育課程の内容の協議を、もう少し早く整えられなかったのか、もっと何かできることはなかったのか、何が必要だったか、できたか。そんな自責の念が押し寄せる。

勉強が嫌い、と言っていた子供ほど、入院してから「今日の宿題は何?」と宿題の催促をしたりする。小学校の担任の先生に伝えると、そんなはずはない、いつも宿題はやってこない子です、と驚かれて笑われる。その子は、宿題がしたいのではないのだ。宿題という「学校」とつながってほしいのだ。学ぶ、学びたい、と思う子供の真髓がここにあるのだと考える。

【引用文献】

- 1) 文部省(1994)「病気療養児の教育について」文部特 294号
- 2) 文部科学省(2013)「病気療養児に対する教育の充実について(通知)」24 初特支第 20 号

PBIS(倉敷モデル)を活用した積極的学校経営の展開

～ゆるやかなPBISと解決志向アプローチで好循環のサイクルを創出する～

岡山県倉敷市立西中学校

校長 松本 一郎

1 はじめに

本校は、全校生徒 911 名、32 クラスの大規模校である。倉敷駅や大規模商業施設が学区にある倉敷市中心部の中学校である。旧岡山県倉敷実業学校の校舎として建築された築 80 年を超える木造校舎は、卒業生をはじめとする地域の人々の誇りとなっている。

2 現状と課題

本校は、今までも生徒指導における問題行動が学校経営上の課題であった。県警本部少年課学校警察連絡室の重点配置校であり、着任時には、5～6名の教室に入りにくい生徒がいた。また、問題行動をはじめ様々なストレスが、教職員の心身に悪影響を与えていた。これらの課題は、市内外を問わず、どの学校でも起きうる可能性がある課題である。

3 研究仮説

これまで学校は、問題に焦点を当て、問題を解決することで、いわゆる問題のない学校を目指してきたのではなかろうか。私は「悪いことがない学校がよい学校ではない。よいことがいっぱいある学校がよい学校である。」をテーマに、生徒のよい行動の増加こそ、課題解決の着眼点であると考えた。

この研究では、徹底してよい行動に焦点を当て、好循環を生み出し、よい行動を増やすことで、不適切な行動を未然に防止する考え方を基本とする。

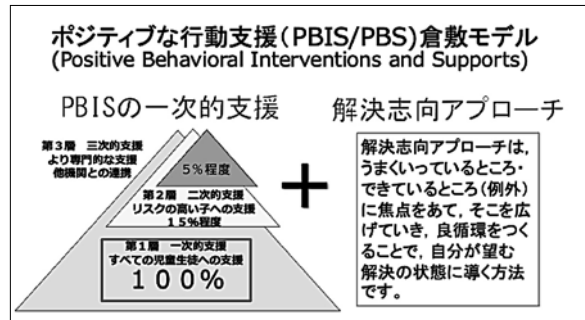
そのためには、問題対処的学校経営から、未然防止的学校経営へ、さらには積極的学校経営を推進する方向へ、校長自身が考え方を転換する必要がある。

4 研究の理論的背景及び研究計画と目標

(1) PBIS(倉敷モデル)の理論的背景

PBIS(倉敷モデル)とは、倉敷市教育委員会人権教育推進室が、いじめ未然防止を目的とし、平成 30 年に開発したプログラムである。(PBIS(倉敷モデル)は、以下、倉敷モデルとする。)

倉敷モデルとは、近年、岡山県でも実践が報告さ



れているPBIS(ポジティブな行動支援)の一部(100%の生徒を対象とする一次的支援)に、解決志向アプローチを組み合わせた。PBISは、応用行動分析を基礎理論とする包括的生徒指導の取組である。解決志向アプローチは、ブリーフセラピーに属するカウンセリング理論の一つである。近年は学級経営等、集団にも適用し、効果を挙げている。両方とも、できていることやよさを認める着眼点が共通しており、両者をグッドビヘイビアカード等(グッドビヘイビアカードは、以下、GBカードとする。)でつなぎ、好循環のサイクルを加速させることを、基本的な考え方とする。

(2) 自尊感情を高めるGBカードの活用理論

PBISの一次的支援には、本校では、GBカードを主に活用する。本校のGBカードは、一般的にPBISで活用されているGBカードとは異なった理論を適用し、成果を挙げている。

通常、PBISでは、行動チャート等でよい行動のモデルを示し、その行動を強化するために教員から生徒にGBカードを出すという手法をとる。



本校では、令和元年度 6,000 枚近い GB カードを教員が書いて、生徒によさを認めるモデルを示した。2 年目から、生徒会を中心とした生徒主体の活動に移行した。ポジティブ心理学を提唱したマーティン・セリグマンは、感謝の訪問の実験を行っている。そこでは、感謝の手紙を書いた人の幸福感が高まり持続するとしている。(セリグマン、2005)

本校の GB カードは、もらうことよりも、主体的に書いた生徒の自尊感情が高まり持続するというセリグマンのポジティブ心理学の理論に基づいている。積極的に周りの人々の無限にあるよいところを見付け、感謝の言葉を添えて GB カードを書くことで、学校への適応感も高まると考えている。

(3) 研究計画と目標

本校では、令和元年度から、スクールワイドで実践をスタートし、本年度で 4 年目を迎える。

年度	年次目標と実践の概要
令和元年度	GB カードがある環境をつくり、教員がモデルとなり、徹底してよい行動に着目する教員の資質を育成する。
令和2年度	GB カードを書く主体を教員から生徒に移行し、生徒によい行動に着目する資質を育成するとともに、教員は各教科・領域での活用実践を始める。
令和3年度	GB カードの活用バリエーションを増やし活用機会を多様に設けるとともに、授業に活用した成果をまとめる。
令和4年度	生徒主体の倉敷モデルの発展型を創造し、ICT の活用も含めた授業への倉敷モデルの応用を一層推進する。

5 実践の概要

(1) GB カードのスタート

教員と生徒・保護者との良好な人間関係の構築を目標に、令和元年 6 月下旬の職員会議に提案し、7 月からスタートした。5 月、美術部の生徒約 40 人に原画を描いてもらい、6 種類の GB カードを各 1,000 枚、合計 6,000 枚を印刷した。年度末には、全ての GB カードが、ほぼなくなった。教職員が約 6,000 枚のカードに、生徒の善行を書いて渡し、よさに注目するモデルを示した。

(2) 生徒用 GB カードの誕生

令和 2 年 2 月、GB カードについての振り返り生徒

アンケートを実施した。その中で、「先生からもらうのもうれしいのですが、私たちが書きたいです。私たちのカードを



作ってください。」という意見が多数あった。教員がモデルを示した成果の現れと認識し、当初の計画通り、生徒主体の GB カードへ移行するため、生徒用として、春夏秋冬をモチーフにした生徒デザインの 4 種類の GB カードを、各 1,000 枚、合計 4,000 枚作成した。以後も増刷を重ね、3 年間で 2 万枚を超える生徒用 GB カードが活用された。単価は、1 枚 10 円である。

(3) 生徒会が主催する生徒主体の GB カード

2 年目から生徒会が主催し、生徒主体の取組に変わった。各クラスで 2 名のグッドビヘイビア実行委員(以下、GB 実行委員とする。)を募った。GB 実行委員は、人気がある。生徒会執行部が、カードを入れるポストを設置し、見本のカードを掲示し、呼びかけを行った。木曜日をグッドビヘイビアの日とし、帰りの会を 5 分延長してカードを書いた。クラスのカードを GB 実行委員が、集計室に持ち寄り、各学年学級に仕分け、仕分けられたカードを学級に持ち帰り、学級の生徒に配付する。もらった生徒は、返事を書くという好循環も見られ、活用するカードが増えていった。直近の令和 4 年 6 月～7 月の取組では、生徒会の集計で約 3,700 枚の GB カードが、全校で交換された。

(4) 学級活動で感謝の気持ちが連鎖

令和 2 年度から、学級で GB カードを生徒同士で書き合う学級活動に取り組んだクラスが多数ある。50 分で、約



200 枚～250 枚の GB カードが書かれると担任から聞いた。生徒一人当たり 7 枚程度になろう。令和 3 年度末、卒業間際に実施したクラスでは、学級委員が担任に、「クラス全員分のカードをください。」と申し出たという。「私は、学級委員としてクラスのみんなに、

心から感謝をしている。一人ひとりにGBカードを書きたいのでクラス人数分ください。」と申し出た。この言葉の背景にこそ、その生徒の自尊感情の高まりを担任は見たのである。GBカードは、もらってうれしいが、「自分が書くもの」という考え方で、先の学級委員のように自分の努力次第で、いくらでも書くことができる。先の学級委員の元へは、クラスメイトから多数のGBカードが、返礼として届いたとのことだった。GBカードは、感謝の連鎖を生むことで、生徒相互の自尊感情を高め合う。

(5) GBカードを活用した地域とのつながり

令和2年3月、新型コロナウイルス感染拡大を防止するため、学校が臨時休業となる直前、当時の第一学年の生徒たち約300名は、倉敷市内の七つの大病院の医療従事者の皆さんへ応援メッセージを贈った。模造紙にGBカードを貼り付けて作成した応援メッセージは、病院関係者の皆さんを勇気づけた。同時に、病院関係者からのお礼のメッセージが、学年の廊下に掲示された。生徒のGBカード作成活動や病院関係者からのお礼のメッセージは、生徒の社会貢献意識を



高め、「コロナいじめ」を未然に防止する効果を発揮したと考えている。

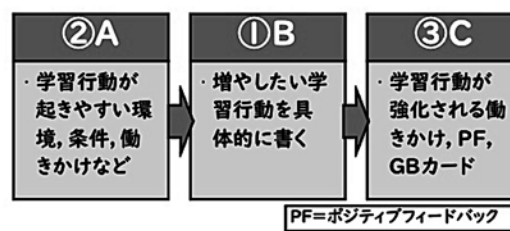
令和3年度は、倉敷市防災教育モデルプランを作成するため、先の学年が研究指定を受け、研究授業や防災現地研修を行った。防災学習のまとめの活動として、GBカードに真備町を応援するメッセージを書き、地域とつながるアイテムにもなっている。

(6) 倉敷モデルを学習指導に応用するメリット

令和2年度から倉敷モデルの考え方を学習指導に応用する実践を行ってきた。この考え方を学習指導に応用することで、新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」を実現することができると考えたからである。

応用行動分析で活用されるABC分析(行動随伴性)の考え方をもとに、そのモデルを学習指導に応用す

ABC分析で学習活動を考えてみると



る。そもそも、授業は、生徒の適切な行動の集積である。読む、聞く、書く、話す、まとめる、話し合う、発表するなど、学習指導案の学習活動の述語は、全て、学習場面における適切な行動であることが分かる。

上図を参考に、まず、①Bは、授業で増やしたい適切な学習行動とする。次に、②Aは、適切な学習行動が行われ易い条件を示す。そして、③Cは、適切な学習行動が行われたときに、教員がどのようなフィードバックを行うかを示す。これを、ポジティブフィードバック(PF)と呼んでいる。これまでの学習指導案では、①Bと②Aについては、細かく書かれていたが、③Cについては、重点的に意識されてこなかったと考えている。

本校教員が、倉敷モデルを学習指導に応用した効果について、令和3年度末研究収録から抜粋する。

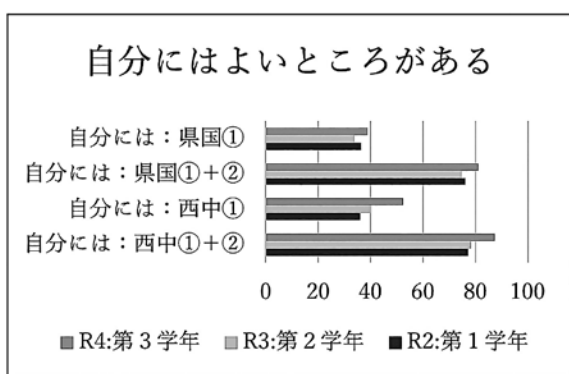
- ・生徒の発言や記述に対して、今までより、より一層認める・ほめる・励ます回数が増えた。(③C) また、生徒の興味を引く導入を考えるようになった。(②A)
- ・活動を指示するときに、何を、どのようにすればいいのか、生徒に達成させたいことを意識して説明するようになった。また、生徒の頑張っていることを意図的に全体に伝えることが増えた。(③C)
- ・生徒のよさを見ようとすると、生徒の理解度が分かる。間違っていて認識していることを発見し易くなるし、反対によく理解し、発展した考えをもっている生徒がいることも分かる。それにより自身の授業改善につながった。

6 県と全国の学力・学習状況調査の結果から振り返る成果と課題

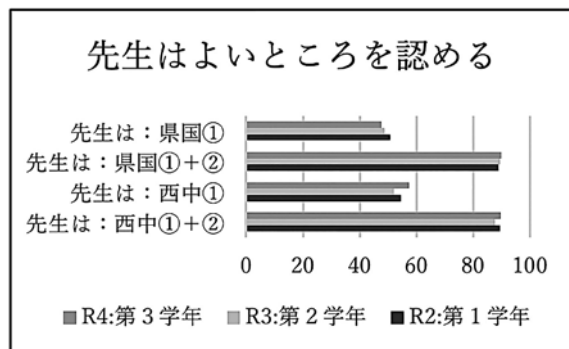
初め、倉敷モデルを考案したねらいは、いじめの未然防止であった。同モデルは、生徒の人間関係づくりへ、また、自尊感情の育成から、学力の向上まで、幅

広い応用を可能とする。校長は、積極的学校経営の核心として位置付け、教職員とともに、一途に実践を続けている。

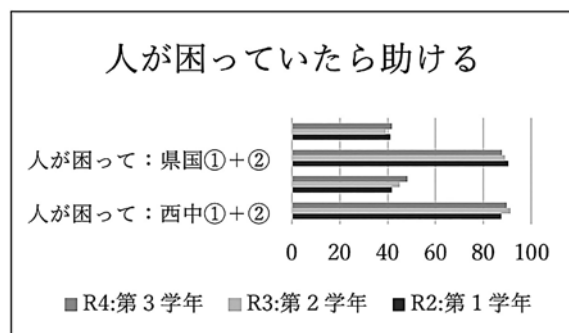
今年度の第3学年は、入学した令和2年度から、倉敷モデルを理解した学年団教員によって、GBカードを中心とした本校の実践を中心となって推進してきた学年である。その学年の第1・2学年時の岡山県学力・学習状況調査と第3学年時の全国学力・学習状況調査の質問紙から時系列で比較し、分析する。①は、「当てはまる」、②は、「どちらかといえば、当てはまる」と回答した生徒の割合である。①+②は、肯定的回答の割合の合計である。



「自分にはよいところがある。」と肯定的に答えた生徒は、学年が上がるほど増加し、特に、①と答えた生徒が52.5%（国38.8%）と高くなっている。

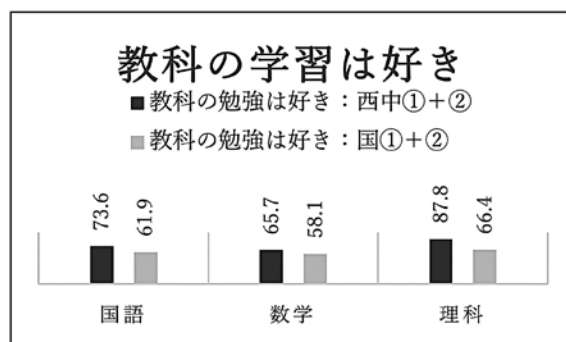


「先生はよいところを認めてくれる」と答えた生徒は、約90%で県国平均とほぼ同じだが、①と答えた3年生は、57.5%と国平均より9.9%高い。



「人が困っていたら助ける」については、善行の指標にもなる項目である。①+②について、県国は、学年が進むと減少傾向にある。これは、いじめの傍観者が増えているという見方にもつながる。しかし、本校は、①と答えた生徒が全国平均より6%以上高い。（国41.9%）これは、いじめを止める・報告する可能性が高い生徒が比較的多いことを示している。

「教科の学習は好き」と肯定的（①+②）に答えた生徒は、全国の平均に比べて、数学は7.6%、国語は11.7%、理科は21.4%と、3教科とも高い。



本校は大規模校であるので、3年間3教科とも、3人の教員が学年を受け持っている。これほど高い結果を得るためには、全ての教員が、倉敷モデルの理解を深め、生徒のよさを認める方向性で授業を行い、PFで生徒の意欲を高めているからである。

令和4年2月の教員アンケートでは、「倉敷モデルは効果がある。」と、100%の教員が答えている。

現在、倉敷モデルは市内小中学校の約半数で実践されている。今後、この実践を学習指導に活用できる学校を増やすことが、倉敷モデルの効果を広め、定着させる課題になると考えている。

7 おわりに

令和4年7月、本校の教職員で一人3枚ずつ書き合ひ、GBカードの交換を行った。一学期の終業式の日、職員室が温かい笑顔に包まれ、同僚性の高まりを感じた。生徒のよさに着目し、よさを伸ばし、よい行動を増やすという方向性を、教職員が共感的に共通理解する。その中で、各学級・学年や校務分掌を担当する教職員により、多種多様な実践が生まれている。その主体性と多様性が、本校の最大の強みである。

最後に、校長が積極的に生徒や教職員のよさを認める姿勢で行動し、そのよさを日常会話や定期面談、GBカード等で伝え、教職員の共感を得つつ、好循環のサイクルを創出し続けることが、積極的学校経営を実現する核心であることを訴えたい。

「生徒の主体的取組を核とした課題探究的な自律的学習」に関する授業

～令和新時代における授業スタイル・誰一人取り残さない未来への教育実践へと広げる取組～

北海道札幌市立南が丘中学校

教諭 佐久間 勇史

1 はじめに 研究の目的

グローバル化、情報化、科学技術の進歩が加速し、世界的にもSDGsで定めた2030年まで10年をきり、誰一人取り残さない持続可能な発展の重要性が日に日に高まってきている。そのような中、筆者は中国政府日本教職員招聘プログラム(2017年5月国際連合大学)、マレーシア教師海外研修(2018年JICA北海道)を通して海外の教育事情を視察し、生徒が主体的に学習活動に取り組む、新時代に対応した授業を提案し実践してきた(JICA地球ひろば 中学校の実践事例・学習指導案:2030年SDGsを達成するために)。

一方、筆者が勤務する札幌市では、2017年に「課題探究的な学習」の推進方針を発表した。これは、「課題探究的な学習」を「自ら疑問や課題をもち、主体的に解決する学習」と定義している。この課題探究的な学習のより一層の充実を図ることが新学習指導要領の趣旨(主体的・対話的で深い学び)に沿った授業を実現することにつながると考え、中学社会科の授業を中心としながら他教科にも応用できる授業を考えた。

2 研究計画・方法

3年計画で研究を進めた。授業計画と授業実践及び校内研修会での発表等、PDCAサイクルの確立を研究の中心とし、研究当初と最後に同一生徒にアンケートをとり、変容を3年間の成長の姿で捉えた。

1年目 2019年度 主体的な学びを核とした授業

2年目 2020年度 対話的な学びをより意識した授業

3年目 2021年度 深い学びをより意識した授業

3 研究内容

(1) 授業計画～新しい授業スタイルの立案

1997年に宮城教育大学大学院教育学研究科を修了したが、その際、恒常的に同じスタイルで授業を行うことにより、学習意欲が続く限り生徒の知識定着度が

高まることを学んだ。そのため本研究では、生徒の主体的取組を核とする新しい授業スタイルの構築と定着を考えた。

① 現状の把握、方向性の確認

新しい授業スタイルの実施にあたり、アンケート調査を行った(2019年7月中学1年100名回答)。主な結果は以下の通りである。

質問1:社会科の授業は楽しい。【はい42%・いいえ19%・どちらでもない39%】

質問2:これまでの社会科の授業は、主体的に取り組むことができる授業である。【はい16%・いいえ84%】

質問3:これまでの社会科の授業は、対話的に取り組むことができる授業である。【はい21%・いいえ79%】

質問4:これまでの社会科の授業は、より深く学べる授業である。【はい14%・いいえ86%】

質問5:課題を挙げるとすればどんな点ですか。

- ・自分で調べて発表し、他のみんなの考えを知りたい。
- ・もっと覚えられるようにして社会の成績を上げたい。
- ・黒板を写すだけのノートになっているので、もっと工夫したい。

アンケート調査の結果から生徒たちは、

- 自分で調べて発表したい
- 他者の考えも知りたい
- ノートの記述内容を自分なりに工夫したい
- 理解力を高めたい

という気持ちをもっていることが把握できた。

このような結果と、学習指導要領及び課題探究的な学習の充実を念頭に新しい授業スタイルを考え、提案することとした。

② 新しい授業スタイル(以下、S授業と略す)

※S授業: self-directed learning, 主体的のSの意味

S授業について、心がけたことは以下の通りである。

- a. 課題(学習目標)を明確にして全員が把握できる
- b. 授業の形式が誰でもわかりやすく実行可能である
- c. 生徒自身による工夫の余地を大に残している
- d. 課題探究の方法が多様である
- e. ICTの積極的かつ有効的な活用に対応している
- f. 主体的に課題解決を図り、皆と共有できる
- g. インクルーシブ教育にも対応している

a～gの視点を踏まえて1時間の授業を考えた。

I) 学習目標

- ・主体的に(自分から意欲的に)学ぶ
- ・対話をして(意見交換をして)学ぶ
- ・深く(新しい発見、話を聞いて視野を広げて)学ぶ

II) S授業

毎時間、中心発表者(生徒1名)と発表者以外に分けて学習活動を行った。中心発表者は学級全員に単元ごとに割り当て(生徒の主体的な学習意欲を尊重するため希望を優先した)、最終的には全員が発表できるように事前に支援した。

【中心発表者】(括弧内は授業内の時間配分)

- ・授業前: 予め単元について調べておき、板書計画を立てる(教師が事前に確認し打合せを済ませる)。
- ・授業での動き
 - 活動1: 教室の前方に立ち、授業をリードする
⇒学習課題の提示と課題追究の開始の指示(2分)
 - 活動2: 板書(23分)
 - 活動3: 説明・まとめ(10分)
 - 活動4: 補足、質問をたずねる(2分)
 - 活動5: 先生の補足説明、評価を聞く(10分)
 - 活動6: 自己の振り返り(3分)

【発表者以外】(下の活動の数字は上記活動に対応)

- ・授業前: 教科書、ノートを開いておく。
- ・授業での動き
 - 活動1: 発表者の話を聞き課題を把握する(2分)
 - 活動2: 学習課題を確認し、課題追究を行う。
班活動として調査テーマを分担し、それぞれが課題追究を行って、班内で課題解決を図る。自分なりに工夫してノートにまとめ、意見交流を経て仲間の良い部分を取り入れる。

- 活動3: 発表者の説明を聞きながら、自分の班の学習内容と比較する。必要な部分を付け足す。
- 活動4: 発表者の足りないところを補足説明する。
分らないところを質問する。
- 活動5: 先生の説明を聞き、必要な部分を付け足す。
- 活動6: 振り返り・まとめを行い、評価する。

(2) 授業実践

① 主体的な学びを核とした授業(1年目)

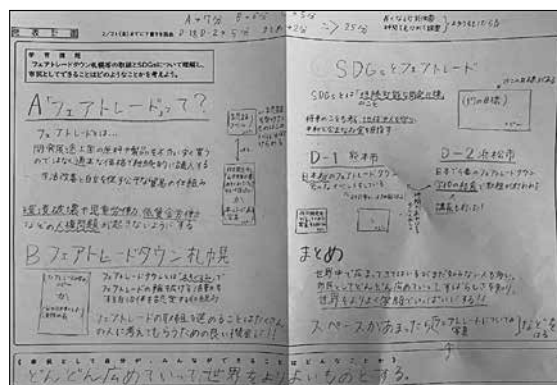
まずは教師が手本を丁寧に示し、「これならできそうだ」と思わせるところからスタートした。その後、S授業を実践した。生徒の主体性を生かし、学級や班内でも自分が学びたい項目を積極的にアピールさせ、自分なりに工夫してまとめ、責任をもって発表させ、適切な評価(教師がノート点検時に個々にコメントを記入し、中心発表者の生徒には多くの良い点と課題を1つ提示する)を与えることで、充実感、自己有用感をもたせる指導を心がけた。生徒による素晴らしい取組や発表については、授業の様子を表す写真を廊下に掲示したり、他の学級にも知らせたりするなどして啓発を図った。校内研修会においても授業を公開することで、S授業が主体的な学びを促進する授業の一形態であるということを経験員内で共有することができた。

▼ [生徒による板書例]



フェアトレードタウンさっぽろとSDGsに関する授業も行った。(2020年2月27日 協力: 浜松市教委)

▼ [生徒による板書計画例]



浜松市立学校の授業実践の資料を基に板書計画を生徒自らの力で組み立てる生徒の様子も見られた。個々に

まとめるノートについても、資料通りにまとめる生徒が多かったが、イラストの挿入など工夫も見られた。

② 対話的な学びをより意識した授業(2年目)

新型コロナウイルス感染症が拡大し、生徒と生徒の距離をとらなければならなくなり、向かい合って話し合う活動ができなくなってしまうなど、授業のスタイルも大きく変えざるを得ない状況となった。

このような状況を前向きに捉え、授業改善を行った。

【中心発表者】

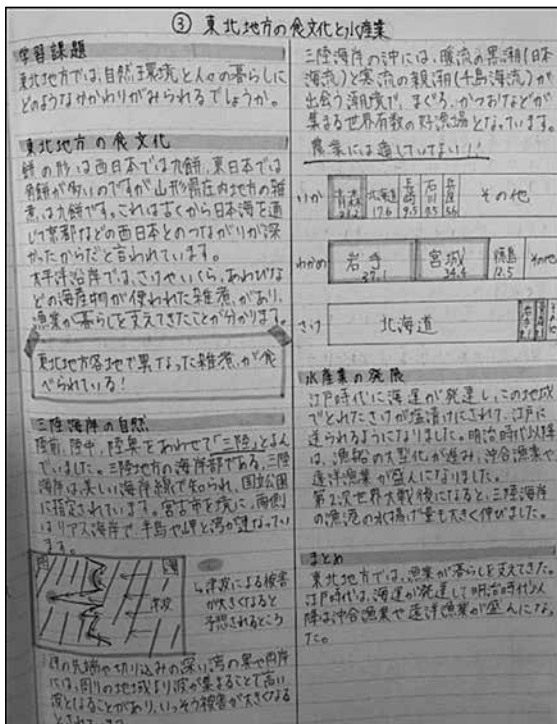
・活動3では、話し合い活動が難しいため、挙手で理解度を推し量るなどの工夫をさせる。話が長くなるようにするため画用紙等でフリップを作成する。

【発表者以外】

・活動2の課題追究では班単位での話し合い活動や役割分担をやめ、個人内で課題探究を完結させた。意見交流は個々のノートを班内で回し、コメントを余白に記入してもらうこととした。

コロナ禍において、実際に生徒同士が対話することは非常に難しい。その代わりにノート点検の回数を増やし、ノートづくりの指導を丁寧に行った。ノート内で、[学習課題⇒課題探究⇒まとめ]が完結し、それぞれに工夫を凝らした十人十色のノートが作成された。これにより主体的な学びと対話の様子を評価できた。

▼【生徒が主体的にまとめたノート例】



③ 深い学びをより意識した授業(3年目)

新型コロナウイルス感染症拡大が続いたため、これまでの取組を基礎としながら、いかに深い学びを実現するかということに重きを置いて授業を改善し、3年目の実践を行った。一人一台端末(Chromebook)が導入されたこともあり、大幅な授業改善を行った。

【中心発表者】 ※発表者は自由選択

・活動2では、プレゼンテーションソフトを積極的に活用し、より説得力のある説明を行う。

・活動3の説明において、必ず「問いかけ」を行う。内容・形式は自由とする。

・活動2の板書、活動3の説明・まとめにおいて端末内アプリケーションソフトを活用した、プレゼンテーションを行うこともできる。

【発表者以外】

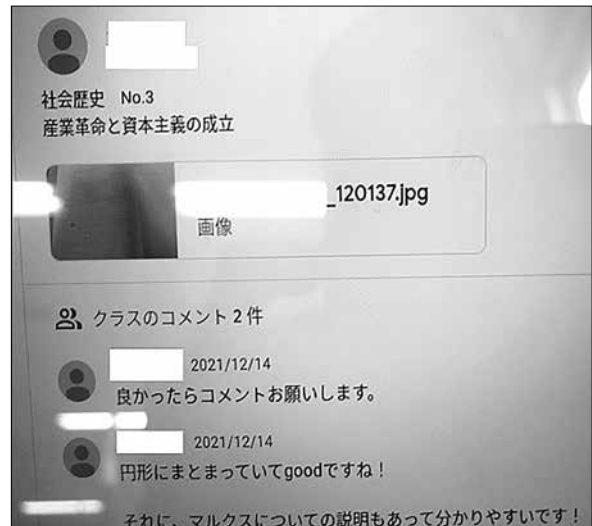
・活動2のノートのまとめでは、教科書や資料集中心のまとめから脱却し、インターネットも積極的に活用する。簡潔な言葉でノートにまとめる。

・活動2において、ノートは端末で撮影した後、端末内のクラスルームに投稿し、生徒が誰でも全員のノートを閲覧できるようにする。他者のノートを閲覧し、良い点をコメントし自由に交流する。

・活動3では発表者の問いかけに対してよく考え自分の考えを伝える。学びの過程をノートに記し、「まとめ」は自分の考えをはっきりと主張させる。

また、特別支援学級の生徒2名が通常学級で授業を受けるインクルーシブ教育を通年で行った。特別支援学級の生徒も端末使用により表現がしやすくなった。

▼【端末内クラスルームでの意見交流】



端末の活用により、学級内にとどまらず、他の学級の授業の様子や発表(板書)を閲覧することもでき、授業時間外の「対話」や「深い学び」も生まれた。これにより学習課題に対する多様な見方や考え方を知る機会がこれまでの3倍(学級数分)に増加し、学びの幅を広げることができた。

▼ [生徒による発表の場面]



「問いかけ」では、説明に関する質問について、選択肢の提示や、消費者と生産者、政治家と国民など異なる立場を考えさせるなどの工夫が見られた。発表者の独創的な工夫(描画ソフトを活用した資料の提示や動画視聴、参加型授業など)を目の当たりにすると、そこからさらに工夫した発表が見られ、オリジナルの授業が各学級で行われ、学年内で共有化が図られた。生徒による「問いかけ」を起点として、教師による「問いかけ」への反応も良くなり学習意欲が向上した。

(3) 3年間の授業実践を終えて ～アンケート結果～

S授業の検証にあたり、アンケート調査を行った(2022年3月 中学3年 95名回答)。

質問1:社会科の授業は楽しい。【はい86%・いいえ3%・どちらでもない11%】

質問2:社会科の授業は、主体的に取り組むことができる授業であった。【はい99%・いいえ0%・どちらでもない1%】

質問3:社会科の授業は、対話的に取り組むことができる授業であった。【はい87%・いいえ13%】

質問4:社会科の授業は、より深く学べる授業であった。【はい87%・いいえ13%】

質問5:自分が発表してみて、成長した点

・自分で工夫し、アレンジしたものを発表したりイラストを使ったりして、端末のスライドでより分かりやすい発表にすることができた。・どうすれば分かりやすい言葉で説明できるのかを考える力が付いた。・人前に立つ時緊張しなくなった。・知識の確認を大切にできた。・スピー

チの力が付いた。・自分の中の疑問や分からない所を見つけて解決し、それをみんなに分かりやすく伝えられるようになった。・1年生の時は教科書を写していたけど、3年生になって簡潔にまとめられた。

質問6:授業によりどんな力が身に付いたか。(複数回答あり 括弧内の数字は全体に対する割合)

- ・要約できる力(95%)
- ・重要語句を確認できる力(82%)
- ・図や表の読み取りができる力(57%)
- ・学習課題に対応した課題追究ができる力(67%)
- ・まとめについて自分で考えて表現できる力(72%)
- ・時間内に終わることができる課題解決力(69%)
- ・仲間の良い点を見付ける力(75%)
- ・主体的に学ぶ力(71%)
- ・深く考える力(74%)
- ・仲間や教材と「対話」できる力(43%)

4 考察

上記アンケート結果により、3年間を通して社会科を好きになった生徒は約2倍となったことから、S授業は学習意欲の向上に大きく寄与できたと考えられる。またS授業の内容について、①主体的は99%、②対話的は87%、③深い学びは87%の生徒が実現できる授業であると実感していることから、かなり高い割合であるといえる。S授業により身に付いたと考える力は多岐にわたるものであり、生徒の自己有用感を高めると共に、非常に効果的な授業である。一方、校内研修会における授業交流では、理科で校内の教諭によるS授業が行われたことにより、他教科でも実施可能な授業であることが示唆された。

5 成果・課題

本研究における成果は、以下に集約される。

・S授業は、学習課題を意識して課題追究を個々に行うことにより主体的な学びが実現する。他者との対話や中心発表者による問いかけを通して深い学びを実現できる授業である。すなわち、自律的学習が行える。

・ICTの活用により教育効果を高めることができる。

・授業形態の工夫により他教科でも実施可能である。

課題として、今回の研究はアンケート等主観に基づくものが多くを占めており、テストの結果等、より客観的な尺度で教育効果を検証することが必要であると考えられる。また学びのスタイルを習得していく中で、より効果の高い授業へと改善を進めていく必要がある。

主体的・対話的な学びのある授業を目指して

～思考ツールの活用～

富山県富山市立蜷川小学校

教諭 濱田 幸恵

1 はじめに

平成 29 年に告示された新学習指導要領（文部科学省,2018）の改訂では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が求められている。

本学級には、「主体的・対話的な学び」を実現させている姿が見られる一方で、課題に対して自分の考えをもてなかったり、友達の考えが理解できなかったりするために、学ぶ楽しさを感じることができていない子供も見受けられる。

5 年生・5 月アンケート	はい	いいえ
自分の考えを発表するのは得意ですか	64%	36%
自分の考えを書くのは得意ですか	84%	16%

「いいえ」と答えた子供は理由として、主に「考えをもつのが難しいから。」「考えをうまくまとめられないから。」という意見が出た。このような学びに苦手意識をもつ子供が、学ぶ楽しさを感じられるようにするためには、思考しやすくしたり、理解しやすくしたりする手立てが必要である。

そこで、本研究では、思考スキルの向上を実現するための枠組みである「思考ツール」を用いて、子供一人一人の主体的で対話的な学びのある授業につなげたいと考えた。思考ツールを使用することで、どのように考えたらよいか明確になり、ねらいとする思考へつながっていく。子供たち一人一人が自分の考えをしっかりとめることで、学びの楽しさを感じることができる。思考ツールの活用がどのように子供たちの学びに効果があるのか検証を進めていきたい。

2 使用する思考ツールとその思考スキル

比べて考えることや分析すること等を子供に指示をしても、子供にとっては難しい行程である。どのようにすると比較できるのか、どのような学習活動を行うと分析できるかを明らかにし、それを学習活動として用意することが欠

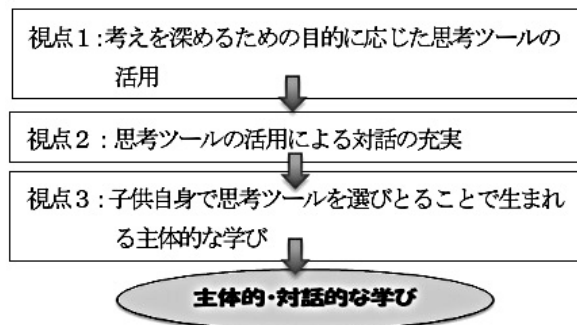
かせない。ここに必要となるのが思考ツールである。

数ある思考ツールの中で、子供たちに紹介したのは以下の 8 点である。（※資料 1）

思考ツール	思考スキル	枠組み
(1) ベン図	比較する 分類する	
(2) イメージマップ	アイデアを出す 広げる 関連付ける	
(3) クラゲチャート	理由付ける 関係付ける 要約する	
(4) Yチャート・Xチャート	多面的に見る 多角的に見る 焦点化する	
(5) ピラミッドチャート	焦点化する 構造化する	
(6) キャンディチャート	仮定する 予想する 推論する 見通す	
(7) バタフライチャート	広げる 変化を捉える 関連付ける 推論する	
(8) フィッシュボーン	分析する 構造化する 関連付ける	

【資料 1】 本学級で使用した思考ツール

3 研究の視点と研究内容



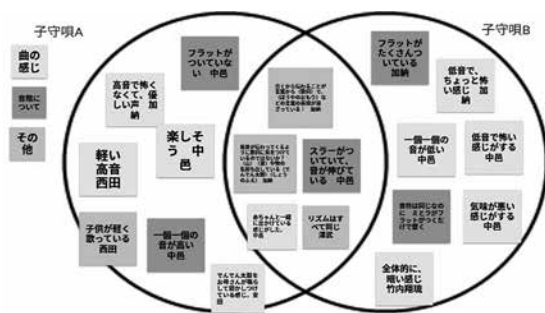
4 研究の実際

視点1：考えを深めるための目的に応じた思考ツールの活用

思考ツールには、比較や分析、焦点化等、それぞれに思考スキルがあるため、子供たちは思考ツールを活用することで、ねらいとする思考に自然に方向付けられる。1時間の授業の中でどのような思考をすればよいのかが明確になり、見通しをもつことができるため、子供たちは自ら学びに向かうようになる。また、教師自身も、単元のねらいにせまるためにどのような思考活動が必要になってくるのかを、思考ツールの活用を意識することで、考えることができる。

実践①第5学年音楽科：子守唄Aと子守唄Bを比較し、2つの旋律のひびきの違いを感じ取ろう〈ベン図〉

本単元は、旋律の異なる2つの子守唄を聞き、それぞれのひびきの特徴を捉えることで日本の曲のよさを感じることをねらいとする。それぞれの曲の特徴を捉えて言語化するには、その違いを感じるのが苦手な子供やどう表現すればよいか分からず考えがもてない子供がいるのではと考えた。そこで、班で1枚のベン図を情報端末上で配布した。(※資料2)曲の特徴の違いを記入するそれぞれの円には何が入るのか、共通点である中心には何が入るのかと、子供たちは自ら相談し始めた。このように、思考ツールの枠組みを与えるだけで、子供たちは2つの曲を比較してひびきの違いや共通点を感じ取り、自分の考えをもつことができた。



【資料2 ベン図を活用した比較】

実践②第5学年社会科：身近な情報の生かし方を多角的にみて、そのよさや危険性を見つけよう〈バタフライチャート〉

本単元は、日常的に活用されている情報(ネットの活用)には便利さがある一方で問題点もあることを捉え、両面を理解することで、これからの情報との関わり方について考えることをねらいとしている。子供たちは、調べ学習やSNSによるやりとりの中で、普段から便利さ

を感じている。その一方で、ニュースや他教科の学びの中でネットトラブルなどの危険性も感じていると考えられる。そこで、バタフライチャートを活用し、便利さと危険性について度合い別に整理しながら記入していけるようにした。(※資料3)



【資料3：バタフライチャートを活用した分析】

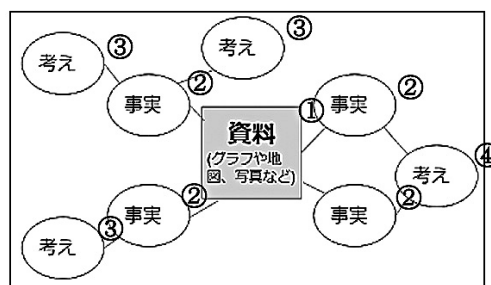
バタフライチャートを活用したことで、「情報の活用について多面的に考える」という活動が明確になり、子供たちはねらいに合った自分の考えをもつことができた。また、危険か便利かだけでなく、度合い別に整理できたことで、視覚的にも情報との関わり方について考える大きな手助けとなった。

視点2：思考ツールの活用による対話の充実

○イメージマップを活用した資料の読み取り～第5学年社会科「食料生産とわたしたち」～

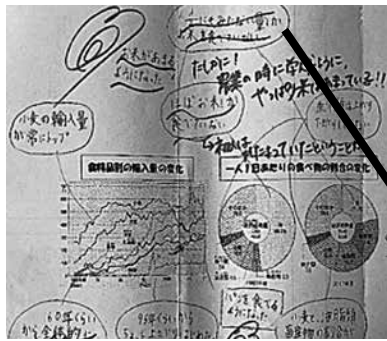
社会科の学習では、資料の読み取りを通して、ねらいに迫る活動が多い。2学期からは一貫して、思考ツールのイメージマップを活用して資料の読み取りを行った。使い方は以下の通りである。

- ①イメージマップの中心に、資料を提示する。
- ②資料から読み取った「事実」は、中心にある資料から線で結び記入する。
- ③事実から生まれた「考え」は、②で記入した「事実」から線で結び記入する。
- ④複数の「事実」を関連づける場合は、両方向から線を結びつなげる。



【資料4 社会科でのイメージマップの活用の仕方】

資料5は、社会科「食料生産とわたしたち」の学習で、「食料品別の輸入量の変化」を示した折れ線グラフと「1人1日あたりの食べ物の割合の変化」を表した円グラフを読み取った時のW児のワークシートである。資料から読み取った「事実」と「考え」が視覚的にも明確に分けられ、自分の考えを整理することができた。



【資料5：児童(W児)が記入したイメージマップ】

更に、イメージマップは「関連付ける」という思考スキルにも役立つ。子供たちは、イメージマップによりたくさんの「事実」を読み取っていく中で、複数の事実を関連付けて「考え」を生み出すようになった。資料4で示した④の過程の線が繋がれていることから、複数の「事実」を関連付けて考えていることが分かる。

また、資料5で示したワークシートをもとに話し合った実際の授業では、以下のように発言する児童の姿が見られた。

T	この2つのグラフから、どんなことを読み取ったかな？
A児	アのグラフから、1960年から2017年にかけて、米以外の割合が全て増加したことが分かりました。そこから、昔に比べてお菓子とかお寿司が増えたのかなと考えました。
B児	私は、割合が増加した食品の中でも畜産物の割合が増えていることを読み取りました。アのグラフで輸入が増えてきていることが分かるので、輸入によってお肉などを食べられるようになったのかなと思います。
C児	私もBさんと同じで、畜産物が増えていることに気づき、他にも油脂類も増えているので、そこからトンカツ等の料理が増えていると考えました。
T	事実を細かく読み取って、考えを出しているね。
D児	※賛成のハンドサインをあげる。 1960年にはなかった食べ物や料理が、今はたくさんあると考えました。
E児	肉とか小麦が特に増えているから、そういうのを使った新しい料理のアイデアがどんどん生まれたんだと思います。
T	新しい料理って？
つぶやき	(パン。うどん。タピオカとか?)
F児	輸入量が全体的に増えていることが分かります。食生活が変化しているから、輸入量も多くなっていると思います。

「事実」と「考え」を分けて、考えを述べている。

2つのグラフそれぞれから読み取った「事実」を関連付けて「考え」をもっている。

友達が読み取った「事実」に共感し、新たな「考え」を付け加えている。

資料の読み取りをもとに話し合いを行うと、「事実」と「考え」が混在し、子供も何を発言し、どういう視点で聞けばよいのが分からなくなる。しかし、資料5のイメージマップを活用することで、「事実」と「考え」を明確にして発言することができた。他にも、C児のように友達の見解を理解した上で自分の意見をつなげる子供もいた。

また、この後H児の「輸入に頼ってばかりだ」というつぶやきから、「輸入量が増えたことは、いいことか悪いことか」という話題に焦点化されていった。

G児	アのグラフを見ると、昔から今にかけて小麦の食べている量は変わらないのに、アのグラフを見ると小麦の輸入量が増えています。輸入の割合が増えたということだと思います。
H児	輸入に頼ってばかりじゃん。よくないな。
T	輸入量が増えたのはよいことか悪いことか考えてみよう。(グループ活動)
児	国産の方が安心安全じゃない？輸入品は心配だな。
X児	でも外国の新しい味に出会えるよ。
Y児	お互い外国の文化分かち合えるよね。これは、よいことだ。
W児	でもこれ見て。(アのグラフを指す。)輸入品がたくさんあるといろいろなもの食べられるけど、お米を食べる量が4分の1になったよ。日本のお米が余ってしまう。

子供たちは、輸入量が増えることの利点や問題点を、自分がプリントに書き込んだことを参考にしながら考えていった。イメージマップを活用することで、授業前半の多様な考えを出し合う時間に子供が発言しやすくなるだけでなく、話し合いが焦点化された際にも、もう一度自分が書き込んだ考えを見返してさらに考えを深めることができた。

視点：3子どもたちが自由に思考ツールを使用することで生まれる主体的な学び

1学期から、学習活動で思考ツールを使い、子供たちに思考ツールのよさを提示してきた。2学期には、子供たちが自分で思考ツールを自由に使用できる場を設けた。(※資料6)8種類の思考ツールのワークシートとそれらの思考スキルの説明を、教室の壁面に掲示した。子供たちは、グループでの話し合い活動や家庭での自主学習で、自ら思考ツールを必要とし、自分たちで用いて学習に取り組むようになった。



自分たちで自由にとって使用できるように、ポケットの中にワークシートが入っている。

【資料6：壁面に掲示した思考ツール】

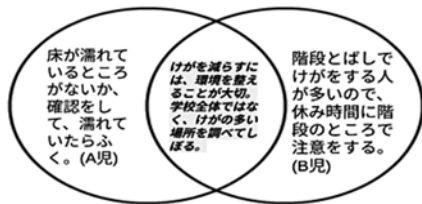
使用例①第5学年国語科「よりよい生活のために」

国語科「よりよい生活のために」の学習では、実際に自校の学校生活の中で課題を見付け、班ごとに話し合いを通してその解決策を出すという学習活動を行った。話し合いの中で、教科書に提示された話し合いの型だけでなく、思考ツールを活用したいという班が複数出た。「仮説をたてて解決策を出したい」という班はキャンディチャート(※資料7)、「まずは一人で解決策を

考え、それぞれの意見を比較して共通点から解決策を出したい」という班はベン図（※資料8）、「解決策の案を広げたい」という班はクラゲチャートなど、思考ツールが掲示された壁面を見ながら自分たちで考え、どの思考ツールを活用するのかを決めていた。（※資料9）それぞれの思考ツールのよさを十分に感じる段階を経て、自分たちで選びとり活用する場をつくったことで、主体的に学びに向かう姿につながった。



【資料7：キャンディチャートを活用した推論】



【資料8：ベン図を活用した比較】



【資料9：壁面を見て思考ツールを選び、思考ツールを活用して話し合う子供たち】

使用例②家庭での自主学習

家庭での自主学習の際にも、子供たちは自分のしたい学びを思考ツールを基に考えるようになった。「ベン図を使えば昔と今の農業の比較が簡単にできるな」「5の2のよいところをイメージマップで整理しよう」（※資料10）など、思考ツールとその思考スキルが視覚的にも明確になっていることで、それを見ながら子供たちは、その日の自主学習ノートの内容を考えるようになった。これまでは、算数の教科書のまとめや漢字練習が主流だった自主学習ノートであったが、学習内容の幅が広がった。思考ツールが主体的な学びにつながると感じた。



【資料10】

5 実践からわかったことと今後の課題

実践を通して、子供の意識に変化が現れた。

	はい	いいえ
自分の考えを発表するのは得意ですか	5月 64%	5月 36%
	2月 75%	2月 25%
自分の考えを書くのは得意ですか	5月 84%	5月 16%
	2月 89%	2月 11%

【アンケート1：学習に関するアンケート】

質問	とても	まあまあ	あまり	全く
思考ツールは考えをもつのに役に立ちますか	77%	20%	3%	0%
思考ツールは考えを深めるのに役に立ちますか	80%	20%	0%	0%
どんなことに役立ちましたか	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい考えを出したり、関連付けたり、膨らませることが簡単にできる。 ・頭の中の考えを整理することができる。 ・たくさんの視点で考えを出すことができる。 ・友達の考えを聞くときに、思考ツールがあると理解しやすい。 ・自分でノートを作る時に、自分のわかりやすいノートをつくることできる。 			

【アンケート2：思考ツールに関するアンケート】

アンケート①から、思考ツールの活用を続けたことで、考えを発表すること、考えを書くことのどちらの点においても、得意とする児童が増えたことが分かる。アンケート②からは、思考ツールが考えをもち、更にその考えを深めることに役立つと感じた児童が、9割を超えていることが分かる。

このように、思考ツールは子供たちの思考の手助けになっている。情報が可視化され思考が方向付けられることで、考えが生まれるだけでなく、その枠組みを利用して整理しながら考えを述べることができる。共通した枠組みであることから、聞き手にとっても、話し手の考えが理解しやすい。①自分の考えをもち、②分かりやすく考えを伝え、③友達の考えを理解する、という3つの行程に効果が得られ、これらは主体的で対話的な授業につながると考える。

思考ツールの活用を初めた頃、思考ツールは、どう思考したらよいか分からない子供のためのものだった。6年生になった今、思考ツールを自ら必要とし選んで活用したり、自分で使いやすいように形や使い方を変えて活用したりする姿が見られるようになってきた。このことは、思考ツールを活用してきたことで、子供たちは思考スキルを身に付け、学び方にも変化をもたらしたといえる。これからも思考ツールを通して、子供たちの学びの可能性が少しでも広がるよう、学びの場をつくりあげていきたい。

6 参考文献

・「考えるってこういうことか！『思考ツール』の授業」

田村 学・黒上 晴夫

生徒 Agency を育む理科教育のあり方の探求

～主体性を育む3年間の長期的なプロジェクト学習～

福井県福井市安居中学校

教諭 川端 康誉

I. はじめに

安居中学校は、福井県福井市に位置し、「志を持って、挑戦し続ける生徒の育成」を教育目標としている学校である。全校生徒は80名で各学年1クラスずつとなっている。全校一体型教科センター方式を採用しており、生徒がほぼすべての授業を教科教室で受ける形をとっている。また、研究指定校であり、2020年度から全校を挙げて Agency を育む学びの研究を行っている。

安居中学校が位置する安居地区は、自然豊かな地域で特にホテルが有名である。しかし、外で遊んでいる子供たちは少なく、自然にはあまり関わる事ができていない。

II. 研究の目的

本研究は、「生徒 Agency（本稿で登場する生徒 Agency の解釈は、自ら考え主体的に行動し、社会変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力とする。）を育む理科教育のあり方を探求するため」に行っている。その中でも本稿は、主体性を育む3年間の長期的なプロジェクト学習について取り上げた。この研究に至った経緯は2つある。1つ目は学校の中での生徒の実態。2つ目は OECD が示した OECD ラーニングコンパス 2030 を読んだことにある。

1. 生徒の実態

私は本校に2019年度に異動してきた。4月の1回目の授業で全校生徒を対象にアンケートを行った。項目は「理科は好きか」と「日常の現象でなぜと考えているか」の2つである。すべての学年で「理科は好きか」に関して肯定的な回答をした生徒の割合は、50%以下。「日常の現象でなぜと考えているか」に関して肯定的な回答をした生徒の割合は、30%以下という結果になった。

また、国際数学・理科教育動向調査 (TIMSS2019) の質問紙調査において「理科の勉強は楽しい」と答えた生徒の割合は国際平均を下回っているのが現状である。

本校生徒にそう思っている理由を聞くと「点数をとるために勉強している」「実験は教科書の説明をされてそれを行うだけ」等の声が出てきた。これは本活動に限ったことではない。教育活動の中で生徒がこのように感じながら行っている活動は他にも多くあるのではないだろうか。「やらされている活動」や「何のために行っているかわからない活動」になる根本を変えていかなければならない。まず、理科の授業のあり方を変えることで、理科だけではなく他の活動でも生徒が自ら考え主体的に活動できるようになっていくと考えた。また、主体性を意識して授業をつくることで、理科が好きな生徒も増えるのではないかと考えた。

2. これからの生徒に必要な力

OECD ラーニングコンパス 2030 では生徒 Agency を「変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」と定義している。現在の社会は、複雑で予想が難しい VUCA の時代と言われている。だからこそ生徒 Agency のような自ら考え主体的に行動できる能力が不可欠になってくるのではないかと考えた。

III. 具体的な取り組み

「生徒 Agency を育む理科教育のあり方の探求」を目指して大きく分けて4つの取り組みを行った。1つ目は「3年間の指導計画の作成」。2つ目は「課題解決型の授業」。3つ目は「生徒が行う授業」。4つ目は「外部との連携」である。この4つを系統的に捉え、3年間の長期的なプロジェクト学習とした。

1. 3年間の指導計画の作成

まず、3年間の長期的なプロジェクト学習の枠となる指導計画を作成した(図1)。この指導計画は、どの単元で、「課題解決型の授業」、「生徒が行う授業」、「外部との連携(科学の祭典など)」を行うかが、わかるようになっている。この指導計画を4月のオリエンテーション時に生徒に配付、生徒も今後の見通しが立ち、授業

のビジョンを持ちやすくなった。また、教員自身も長期的なビジョンを持つことで、3年間の時間の中でどのように生徒に力をつけていってもらいたいか考えることができた。

3年間の指導計画		
1年	2年	3年
○いろいろな生物とその共通点 地域のビオトープの植物図鑑作り。外部との連携	○化学変化と原子・分子 通常授業	○化学変化とイオン 課題解決型の授業
○身のまわりの物質 化学実験の基礎技術を習得しよう。技能アートをを行います。	○生物のからだのつくりとはたらき 生徒が行う授業	○生命の連続性 生徒が行う授業
理数グランプリに出場		
安居科学の祭典を主催（11月開催の場合）外部との連携		
○身のまわりの現象 「光の世界」→課題解決型の授業。	○天気とその変化 単元全体が課題解決型の授業	○運動とエネルギー 課題解決型の授業
「音の世界」→課題解決型の授業		
○大地の変化 生徒が行う授業	○電気の世界 通常授業	○地球と宇宙 通常授業
安居科学の祭典を主催（11月開催されなかったとき）外部との連携		
		○地球と私たちの未来のために 通常授業

図1 3年間の長期的な指導計画

2. 課題解決型の授業

この授業形態の最大の特徴は、生徒が単元を貫く課題を考えることである。課題設定の流れは以下の通りである。

- ①単元全体に関わる実験や資料を提供される。
- ②気づき・疑問カードになるべく多く記載。
- ③カードを一枚の模造紙にまとめ、単元の最終課題を設定。
- ④単元の最終課題を探求。

実際に「光の世界」で行った授業を下記に記した。

(1) 気づき・疑問カードの作成

第1時で、光源装置、鏡、レンズ、光源、ガラスなどの「光の世界」の授業で使用する実験器具を配付。生徒は、1時間自由に実験し、見つけた気づきや疑問をカード1枚に1つずつ書いていく(図2)。

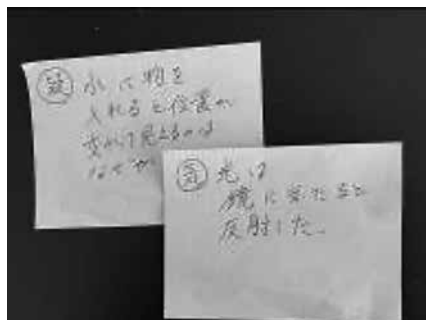


図2 気づき・疑問カード

授業後30人学級で約400枚のカードが出てきた。面白い発見や面白い疑問は、机間指導の際、発見する喜びを感じてもらうために他の生徒にも伝えた。机間指導をしながら生徒の気づきや疑問が学習指導要領の内容が網羅されるか確認した。生徒が気付いていない内容があれば、ヒントや、さりげなく発見させた。そうすることで、見えるとは何か、光の反射、屈折、実像、虚像、光の色による屈折の違いなど必要なキーワードがすべて出てきた。

(2) 単元の最終課題の設定

第2時の授業までに気づき・疑問カードを1枚の模造紙にまとめた。まとめる作業は、教員が行った。授業で扱えない内容と扱える物にわけ、扱うことが難しい内容は紹介だけにとどめた。第2時に、まとめた資料を生徒に提供した。黒板だけでは見えにくいので、各班にプリントした物を配付した(図3)。



図3 気づき・疑問カードの集約

見つけた気づき・疑問の中で追求したい内容をクラス全体で相談。「光の世界」では、「レンズの半分を隠しても像がスクリーンに映るのはなぜか」を最終課題にすることとなった。

本授業では、クラスで1つの課題を探求するクラス探求型で行ったが、「音の世界」では、各班1つの課題を決め、グループ探究型の授業スタイルでも行った。クラス全体で1度行っているの、グループでの活動は、スムーズに行うことができた。

(3) 気づきと疑問の内容の全体共有

気づきと疑問カードを元に授業を進めていった。発見した生徒が内容と、実験方法を説明し、他の班でも追実験した。発見者が説明し、授業の中心となることで、導入の時間がなくなる上に生徒が主の授業となった。まとめと補足は、教員の手で行った。気づき・疑問カードで教科書の内容が多く出されているので、この方法で教科書の内容は網羅できた。

(4) 単元の最終課題を探求

単元の最後に「レンズの半分を隠しても像がスクリーンに映るのはなぜか」の探究を行った。この現象を発見した生徒が説明し、クラス全体で検証した。現象の確認後、なぜそうなるのか口頭で説明し出す生徒が出てきたが、口頭ではわかりにくいという生徒が多く、作図で表現することになった。以前、高校の先生へのヒアリングの中で、実際の現象と作図とがうまく合致していない生徒が多くいるということが挙げられたが、本時では、それが生徒の中で違和感なく行うことができた。これも生徒が目的意識を持って主体的に授業に取り組んでいるからだろう(図4)。



図4 授業の様子

3. 生徒が行う授業

座学中心になる単元は生徒が授業を行った。生徒が授業づくりを行うことでわからないところをわかるまで自分で調べ探求していく力がつき、授業者側の視点も育つため、通常の授業でも受ける態度に変容が見られると考えた。

生徒が行う授業の流れは以下の通り。

- ①班ごとに授業内容決め。希望をとって、他の班と被った場合はクジ等で決める。
- ②授業準備(3時間)。
- ③教科書の順番通り授業。

1班あたりの授業時間は35分以内。授業後に質問の時間を設けた。班の数は、8~9班。約9時間分を生徒が授業する。その上で、簡単なルールも設けた(図5)。

- ①課題は、必ず書くこと。
- ②板書計画を教員に提出すること。
- ③授業後の質問に答えられるようにすること。

図5 生徒による授業のルール

質問に答える必要があるため、授業者は、表面上の勉強だけでなく、教科書に書いていないことも調べていた。この責任を伴う活動が、理科の深い学びの面でも

生徒 Agency を育む面でも大事であるとする。

また、3年間で3回授業を行うので、3年生になると形になってくる。中には、教員が考えないような授業をするグループもある。1年生の化石の授業では、安居中学校を博物館にしようという試みも行われた(図6)。このときは、福井大学の地学教室に生徒と一緒に伺い、化石の説明を受け、さらに化石を貸していただいた。授業を行った生徒からは、「本物の化石に触れるなんてすごい」「自分たちで考えたことが本当に形になると思わなかった」という声を聞くことができた。



図6 安居博物館の様子

4. 外部との連携

(1) 安居科学の祭典

1年間の学習のまとめとして「安居科学の祭典」を開催した。コロナ前は、11月に福井県児童科学館で行われていた青少年のための科学の祭典に出展していたが、コロナで無くなってしまったため、安居中学校で、自分たちで開催した。

体育館に生徒が運営する体験型の科学実験ブースを10ブース設営。本校生徒とその保護者、近くの小学生を招待し科学に触れてもらった。実行委員を募って、運営はすべて実行委員で行った。

1ブースあたり3~4人で運営。メンバーでブース内容を決定した。準備時間は4時間。時間内で完成できるブース内容で行うことが大前提だが、間に合わないブースは昼休みにも自主的に準備をしていた。ブース内容は、今まで学んだ内容が使われているものとした。ブースに使うパネル、椅子、机等の準備物は、生徒が活動申請書を実行委員に提出し管理。予行練習を経てから本番に入った。

活動当日は、「煮干しの解剖をしてみよう」「静電気で電撃イライラ棒」「音の波形をつくってみよう」などのブースが出展され、80名を超える多くの方に来ていただくことができた(図7)。生徒からは、「小学生が楽しそう

に活動してくれて、科学の醍醐味を伝えられたと思う」「地域の活性化にもなった」等の声が聞かれた。この感想からもわかるように科学を通して地域とつながることもできた。地域とつながることで生徒は、さらに主体的に責任感を持って活動することができた。



図7 安居科学の祭典の様子

(2) 安居の植物図鑑

総合的な活動の時間の中で現3年生は1年生のときから、安居地区の植物図鑑づくりに取り組んだ。1年生の理科の「植物の分類」では、分類の知識をつける活動の一環として総合的な学習の時間との教科横断で取り組んだ。図鑑作りを行う上で、自然史博物館の方にアドバイスをいただいた。図鑑は30種類ほどの植物を掲載している(図8)。

作成した図鑑を使って安居小学校の3年生に「秋の生き物調べ」の授業も行うことができた。



図8 安居の植物図鑑

IV. 成果と課題

まず、令和4年度の全国学力学習状況調査から本実践と深く関わりのある3項目で検討を行った(図9)。「理科の勉強は好きですか」「理科の授業の内容はわかりま

すか」に対して、肯定的な回答だった生徒はどちらも9割以上と全国平均の66.4%と比べ大きく上回っていた。「理科の勉強は大切だと思いますか」に対して肯定的な回答だった割合は86.2%と全国平均の76.8%を上回っていた。また、「理科の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考えますか」に対して肯定的な回答だった割合は79.3%と全国平均の52.7%を大きく上回っていた。全学年を対象に理科の意識調査を行ったところ、「理科の授業は、自分達で考えたことを形にできることが面白い。自分達で考えるからこそ、そこに責任が生まれてもっと知りたくなる」などの意見が多数あった。この結果から、3年間の長期的なプロジェクト学習を通して、自ら考え主体的に行動し責任を持って理科の授業で活動してきたからこそその数値であると断言できる。

3年間の長期的なプロジェクト学習を行うことで、生徒 Agency の自ら考え主体的に行動し、社会変革を起こすために目標を設定し、責任ある行動をとる能力を育てることができたといえる。ただ、課題としては、各活動に振り返り(リフレクション)を設けられなかったことにある。今後、振り返りも含め、さらにこの活動を発展させ、理科の教科領域を超え、教科、総合的な学習の時間、特別活動関係なく生徒 Agency の育成を行える学校、教育のあり方を、活動を模索していきたい。

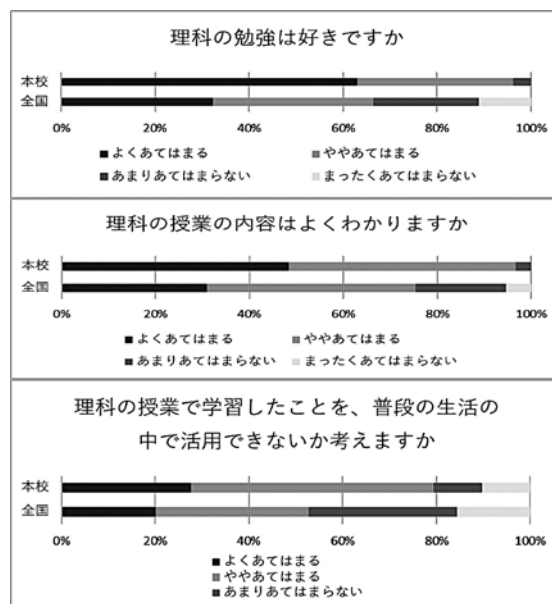


図9 全国学力学習状況調査結果

【参考文献】

・The OECD Learning Compass 2030

課題解決型学習(PBL)における産学連携データ利活用人材の育成

～企業と松山南高生が取り組むデータマーケティング教育プログラム～

愛媛県立松山南高等学校

教諭 渡部 靖司

1 はじめに

本校は松山市の中心部にあり、普通科と理数科を擁する公立高校である。明治24年に愛媛県高等女学校として開校し、創立131年を迎えた。スーパーサイエンスハイスクール(SSH)として、平成14年度以来5期連続指定の21年目となる。令和元年度から第5期(先導的改訂型)の指定を受け、「新しい価値を創生する国際競争力を持った科学技術人材育成— Society5.0の実現に向けたSTEAM教育—」を研究開発課題として取り組んでいる。第5期の大きな特徴の一つに、「データ利活用人材の育成」を掲げ、普通科全生徒が課題研究を学校設定科目「データサイエンス(DS)」(図1)で、1年生1単位、2年生1単位、3年生1単位で取り組んでいる。



図1 学校設定科目「データサイエンス」の概要

2 主題設定の理由

高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説において、数学編理数編では、数学I「データの分析」の課題学習において「生徒の身近な問題について、目的に応じて複数の種類のデータを収集し、適切な手法を用いて分析を行い、それらを用いて問題解決したり、解決過程や結果を批判的に考察したりする一連の活動を行うことが考えられる。」と述べられている。また、情報編では、情報I「情報通信ネットワークとデータの活用」において、「データを表現、蓄積するための表し方と、データを収集、整理、分析する方法について理解し技能を身に付けること。」と「データの収集、整理、分析及び結果の表現の方法を適切に選択し、実行し、評価

し改善すること。」と述べられている。さらに、理数編では、新たに「理数探究基礎」と「理数探究」の2科目が新設され、数学的な見方・考え方や理科の見方・考え方を組み合わせるなどして、課題を解決するために必要な資質・能力を育成することを目標に掲げている。「理数探究」の対象は、自然科学だけではなく、社会科学や人文科学、芸術やスポーツ、生活に関する事象なども対象とし、自ら課題を設定しようとする動機付けとすることを示している(長尾2019)。

そこで、これらのことを踏まえ、本実践は、高校までに習った記述統計の知識を活用し、地元企業で中四国大手スーパーの株式会社フジと総合印刷会社のセキ株式会社、東京にある購買ビッグデータプラットフォームを運営する株式会社 True Data のご支援をいただきながら、(株)フジの購買データを活用し、課題解決型学習(PBL)を通して「主体的・協働的に問題を発見し、解決する能力」を養う教育プログラムを実施した。

3 研究の目標

高校生が最新のデータ活用に触れ、(株)フジの購買データを活用し、主体的・協働的に課題を発見し、データマーケティングと自らのアイデアを用い、フジ藤原店の売上向上を目指し、売り場や販促の提案を行う。さらに、この活動を通して、データマーケティングを学習するだけでなく、地元企業との絆を深め、働くことについて体感することを目標とする(図2)。



図2 データマーケティング教育プログラムの目標と効果

4 研究の内容

生徒が購買データを活用して、フジ藤原店の売場や販促施策を企画・提案し、その効果検証を行う。授業は、小売業について(株)フジが、プロモーションなどの販促提案やプログラムの運営・推進支援をセキ(株)が、データ分析環境の整備とデータマーケティング支援を(株) True Data が担当する(表1)。取組の一部を紹介する。

表1 日程表

産学連携データマーケティング教育プログラム		
3月30日	オリエンテーション	3社
4月3日・10日	フィールドワーク (店舗視察・店舗業務・お客様の動き確認・レポート作成)	フジ
5月11日	データを使った顧客理解について	TrueData
5月25日	フジ藤原店のターゲット顧客について発表	3社
6月1日	販促について	セキ
6月8日	小売業における販促について	フジ
6月15日	購買データに基づく売上向上のための施策について	TrueData
6月18日	施策作成に向けての意見交換会①	3社
6月22日	施策作成に向けての意見交換会②	フジ・セキ
7月2日	施策作成に向けての意見交換会③	3社
7月6日	本校生徒によるフジ藤原店の売場・販促施策の発表	3社
7月13日	各班の計画に実現性を加味し修正したアクション	フジ・TrueData
7月20日～28日	POPなどの作成	
8月31日	最終発表に向けての内容説明	TrueData
9月7日	最終発表に向けてプレゼンテーション作成①	
9月14日	最終発表に向けてプレゼンテーション作成②	
9月21日	最終発表に向けてプレゼンテーション作成③	
9月28日	最終発表に向けてプレゼンテーション作成④	
10月5日	最終発表に向けてプレゼンテーション作成⑤	
10月8日	数値による効果検証方法について	TrueData
10月19日	最終発表に向けてプレゼンテーション作成⑥	フジ・セキ
10月26日	最終発表	3社
3月9日	SSH研究成果報告会	3社

(1) フィールドワーク (店舗視察)

小売業の現状を知るため、4月3日・10日、生徒31名が5グループに分かれ、フジグラン松山とフジ藤原店で、フィールドワークを実施した。最初に店長から地域貢献活動や店舗・バックヤードの説明を受けた。その後、食料品売り場のレイアウトや品揃えなど各自で観察した(図3)。最後に店長や店員の方に質問をした。これらの内容をレポートにまとめ、提出した。このレポートの結果から、16名を選出した。



図3 フィールドワークの様子

(2) 施策作成に向けて企業の講義

施策を作成するために、各企業からそれぞれの立場で講義が行われた。

(株) True Data から「データを使った顧客理解について」と「購買データに基づく売上向上のための施策について」の講義が行われた。

「データを使った顧客理解について」では、一人一台端末を活用して、講義を受講したり、ブレイクアウトルームでグループワークを行ったり、各グループの考察発表を行ったりした(図4)。



図4 顧客理解についての講義の様子

「購買データに基づく売上向上のための施策について」では、例を示しながら、売上分析ツリー、アクションのためのSTEP、カテゴリ傾向読込、商品訴求キーワードについて説明していただいた。

その後、前回までに作成した顧客のプロファイルをベースに、顧客タイプ別の購買データに基づき、売上分解ツリーを作成し、アクションのためのSTEPとして、Why(どんな目的で)、Who(誰に対して)、What(なにを)、When(いつ)、Where(どこで)、How(どうやって)を考え、買上回数を増やしていくための訴求キーワードを考えた(図5)。



図5 購買データに基づく売上向上のための施策についての講義の様子

セキ(株)から「販促について」の講義が行われた。

情報が溢れる世の中で、しっかりと商品やサービスの魅力を伝え、購入につなげるためには、「売りたい相手(ターゲット)」にぴったり合ったツール(武器)とメッセージ(表現)で訴求することが大切であることを教えていただいた。このことを踏まえて、グループワーク「フジのプレミアムクリスマスケーキを売るためのプロモーション戦略を立ててみよう」では、各班ターゲットを設定し、「認知」してもらうために、「興味・関心」してもらうために、「比較・検討」してもらうために、「購入」してもらうために、どのような「ツール」を使って、どのような「メッセージ」を伝えるかを考え、班別に発表を行った(図6)。



図6 販促についての講義の様子

(株)フジから「小売業の販促について」の講義が行われた。

小売業における販促の役割について、「認知」→「興味・関心」→「比較・検討」→「選択」を恋愛に例えながら、お互いの関係性を考慮したアプローチが大切であることを教えていただいた。

販促の種類と特徴では、チラシ、DM、レシート、POP広告、HPやSNSなど、実際に店舗などで使われている実物などを見ながら、それぞれのメリットとデメリットについて

て教えていただいた。

売り場と販促の関係では、オリエンテーション時に教えていただいた、定番とエンド・平台のおさらいと、催事場、はみ出し陳列、メニュー提案、チラシ×売り場、デジタル×売り場について新たに教えていただいた。小売業にとって、販促は来店前にまず知ってもらい、興味を持って頂くところが第一歩であること。来店前から来店後、売り場に至るまで、一貫して販促と売り場を連動させることで、お客様がその商品、サービスに接する機会が増え、記憶を呼び起こすことができることや伝えたい相手、伝えたい内容で販促(打ち手)を選択することで、お客様にも伝わりやすくなることを教えていただいた。

施策を考えるにあたって、前準備を怠ると施策は失敗に終わることや施策は前準備も含めて考えることが大切であることを教えていただいた(図7)。



図7 小売業における販促についての講義の様子

(3) 施策作成に向けての意見交換会

今までの講義の内容を踏まえて、顧客タイプ別の購買データ、各班担当の顧客タイプの商品部門別の購買データ、曜日・時間帯別や施策別の来店回数と購入金額、該当店舗の月別売上分解ツリーのデータに基づいて、「売上分析ツリー」、「5W1Hで考えるアクションのためのStep」(図8)、「訴求キーワード」について、各班の担当ターゲットと担当商品部門について考えた。その中で疑問に思うことを、(株)フジ、セキ(株)、(株) True Data の担当の方々に質問をした(図9)。

テンプレート2：5W1Hで考えるアクションのためのStep		Strictly Confidential
Why - どのような目的で -	1来店あたりの購入個数を増やす	
Who - 誰に対して -	タイプDの「新商品好きさん」	
What - なにを -	新商品の「菓子」	
When - いつ -	タイプDの来店者数が多い土日	
Where - どこで -	<ul style="list-style-type: none"> お菓子コーナーのポップの変更 アルコール消毒液のそばに訴求する商品のポップを設置 惣菜コーナーに新商品のお菓子のおスマーチャンダイジングを設置 	
How - どうやって -	<ul style="list-style-type: none"> 「NEW!!」のポップの色を目立つように変更する。 メッセージで新発売ということを強調する。 お菓子コーナーのエンドに小容量の新商品のコーナーを作り、2,3種類ほど 陳列する。 アルコール消毒付近のポップで「今だけ新商品〇〇販売中」+写真 クロスマーチャンダイジングで、小容量の新商品を1,2種類置く。 ポップで「食後のおやつにどうですか？」 	

図8 5W1Hで考えるためのStep 生徒記入用紙



図9 施策作成に向けての意見交換会の様子

(4) 生徒が考案した販促施策による売場実証検証

購買データから1班は「まとめ買い高齢主婦」、2班は「平均的な午前中来店の主婦」、3班は「新商品好きさん」、4班は「たくさん働く仕事人」をターゲットに設定した。購買データから各ターゲットの傾向を読み解き、1班は「朝どれ養殖鯛」、2班は「便利野菜と旬野菜」、3班は「新商品のお菓子」、4班は「唐揚げ&耐ハイ、生野菜サラダ、総菜」の売上向上を目指す施策を考え、鮮魚、青果、お菓子、お惣菜の4つの売場で、POP等を生徒が考案・作成し、販促施策を実施した(図10)。



図10 生徒が考案した販促施策による売場の様子

(5) 施策後の効果検証に向けて企業の講義

施策後、(株) True Data から「数値による効果検証方法について」の講義が行われた。

講義内容は、最終発表に向けて「施策実施店と施策未実施店の比較」、「施策実施店での施策実施期間と未実施期間の比較」について購買データから分析を行うための説明があった。

購買データから「実施前からの伸び率」と「比較店舗との伸び率比較」を売上(買上金額)、買上延べ客数(レシート枚数)、カテゴリ購入率など各項目について分析し、プレゼンテーションにまとめ、生徒が行った施策によって施策実施店での売り上げがどのように変化したか、数値で検証する。



図11 数値による効果検証方法についての講義の様子

(6) 最終発表会

最終発表では施策の効果検証を、フジ藤原店での施策前と施策後、施策を実施したフジ藤原店とフジの未

実施店舗のそれぞれの購買データを比較し、分析ツールを用いて分析・考察し、それらをまとめた。さらに、今回の施策の分析結果から施策を再考し、改善した施策を提案した。これらのことを班ごとに発表した。

各班の発表に対して、(株)フジ販売企画・マーケティング部 矢野恭子様、宮脇正美様、岩本淳様、(株) True Data アナリティクス・ソリューション部 鳥谷正彦様から質疑が行われた。

全ての班の発表が終わった後に、(株)フジ大西文和取締役、セキ(株)関宏孝代表取締役社長、(株) True Data 米倉裕之代表取締役社長からご講評をいただいた。「今回の取組は、一つの正解を求めるものではないこと」、「プロセスの中で気付いたことをどう次に生かすのが大事」、「感覚で語るのではなく、データなど根拠に基づいて語ることが大事」、「考察することが重要で、その考察によって次、どうするのが大切」、「効果が出たことや出なかったことのノウハウをデータとして蓄積する」、「今回のプログラムで、社会人の考え方に触れて学びがあったのではないか」、「データと知恵で未来をつくる」などお話しいただいた。



図 12 最終発表会の様子

5 成果と課題

今回の取組を通して生徒は、企業の方々からのサポートを受けながら、購買データから主体的・協動的に課題を発見し、班員と協力して様々な視点で販促提案を行うことができた。取組後のアンケートの結果(表2)から、多くの生徒は、購買データから施策を提案するのは難しいと感じながらも楽しんで活動を行うことができ、販売促進について興味関心が高まった。また、企業のイメージアップにもつながり、より高度なスキルも身に付けるために学校の勉強を頑張ろうと全員の生徒が勉強に対して前向きな気持ちになってくれたことは、喜ばしいことである。生徒の感想を一部紹介する。

- ・データの読み取り、ターゲットに沿った商品の決定、目をとめてもらえるようなポップの作成などのさまざまな経験を通して、自分たちで考え、店頭施策として実施することの難しさを実感しました。
- ・はじめは不慣れなデータを扱うために慣れるので精

一杯でしたが、回数を重ねていくと単なる数値の羅列に見えていたものも、その一歩先を読み取ることができるようになりました。

- ・店舗視察の際、売り場に自分たちの施策があるのを見て感動した。
- ・今回の活動では完璧とまではいかないが、自分たちなりに取り組むことができました。また、お客様の立場になって考えることの重要性を学びました。そして、大人の仕事の雰囲気を実際に肌で感じることで、とても良い経験をすることができました。

課題として、今回の教育プログラムを行う上で企業の方々からの支援が必要であり、継続して支援をいただけるように、企業の方々の負担にならないような仕組み作りが必要であると感じた。

表2 取組後のアンケート結果

質問事項	1	2	3	4	5
[質問 1]企業が行う授業は、学校で通常行われる授業より興味深かった。	0	0	0	3	13
[質問 2]データを利活用するイメージがこの講座に参加して、1年生のときより具体的になった。	0	0	0	1	15
[質問 3]購買データから施策を提案するのは楽しかった。	0	0	0	4	12
[質問 4]購買データから施策を提案するのは難しかった。	0	0	0	1	15
[質問 5]データ利活用について関心が高まった。	0	0	0	2	14
[質問 6]データマーケティングのイメージが具体的になった。	0	0	1	5	10
[質問 7]売場づくりの販売促進について関心が高まった。	0	0	0	7	9
[質問 8]販売促進のプロモーションについて関心が高まった。	0	0	0	8	8
[質問 9]フジの企業イメージが良くなった。	0	0	2	5	9
[質問 10]セキの企業イメージが良くなった。	0	0	0	4	12
[質問 11]True Dataの企業イメージが良くなった。	0	0	0	5	11
[質問 12]グループで課題に取り組むスキルを学んだ。	0	0	0	4	12
[質問 13]データの見方など、データ分析をするスキルを学んだ。	0	0	0	3	13
[質問 14]企業の方とのコミュニケーションの仕方を学んだ。	0	0	1	9	6
[質問 15]より高度なスキルを身に付けるためにも、学校の勉強を頑張ろうと思った。	0	0	0	8	8

1:当てはまらない 2:あまり当てはまらない 3:どちらでもない 4:やや当てはまる 5:当てはまる

6 おわりに

今後は、企業や大学などの外部機関と連携をさらに進め、データから課題を把握し、データを利活用して解決・提案するような課題研究の指導を行っていきたい。また、新しい価値を創生するために必要な幅広い視野や多角的なものの考え方、論理的思考力を養い、文系・理系の枠を超えたデータ利活用人材を育成するカリキュラム開発を外部機関と協力しながら進めていきたい。

7 引用・参考文献

- ・文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領 解説 数学編理数編』
- ・文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領 解説 情報編』
- ・文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領 解説 理数編』
- ・長尾篤志(2019.9.4)『教育課程部会 長尾主任視学官発表 資料「理数探究」の充実とSTEAM教育について』

生徒主体の活動で多様性のある社会の実現を目指す

～ジェンダーフリーな制服を自由に着られる校内環境づくりから～

群馬県立大間々高等学校

校長 高橋 みゆき

1 はじめに

これからの時代においては、年齢や性別、人種、障がいの有無に関わらず、多様性を認め合い一人一人が尊重され活躍できる社会の構築が重要である。進むグローバル化やSDGsの浸透により、多様性に関する人々の意識が高まっており、学校現場においても生徒・職員の意識改革の推進は必須である。

本校においても、誰でも活躍できる学校づくりの一環として、2020年10月、性別に関わらず誰もが自由に制服を選べる制服選択制度を導入した。しかし、導入当初は、ジェンダーに対する固定観念や偏見から、女子生徒がスラックスを着用しにくい雰囲気があった。さらに、課題の解決に至るには、校内だけでなく、地域、社会の人々の意識が変わる必要がある。

そこで、「総合的な探究の時間」を中心に、日々の教育において生徒の意識改革を図るとともに、本校の取組を地域、社会へ向けて発信することにした。

2 本校の歴史と伝統

本校は、明治33年に「共立普通学校」という名称で、わずか14人の生徒でスタートしている。創立者の井上浦造校長は、「地域の柱となり、社会に貢献する人材の育成」を目指し、日々熱心な教育を行っていた。以降123年間、この精神は大切に受け継がれ、現在も「社会に貢献できる人材の育成」を目標とし、市内唯一の高校として地域の期待を背負い、日々教育活動を行っている。

3 現在の教育方針と特色ある取組

2020年度からの「総合的な探究の時間」において、全生徒がSDGsの視点を踏まえた課題解決型探究学習に取り組んでいる。その目的は、地域、社会の課題に自ら気づき、解決に向けて貢献する力を身に付けることである。

その活動をリードするのは、有志の生徒から成る組織「SDGs井上浦造みらい塾」（以下みらい塾）である。

放課後に集まり、外部講師から様々な社会課題に関する講義を受けたり、本や新聞を読み、ディスカッションを行ったりしている。

この「みらい塾」の生徒を中心に、校内でジェンダーフリーな制服を自由に着られる環境づくりが始まった。

4 具体的な取組

(1) アンケートによる生徒の意識調査（2020年10月）

本校では、2020年10月に制服選択自由制度を導入した。生徒は性別に関係なく、スラックス、スカート、ネクタイ、リボンを自由に選択できるようになった。導入の背景には、男子はスラックスにネクタイ、女子はスカートにリボンという固定観念の排除と性的少数者への配慮がある。

女子生徒においては、それまでスラックスという選択肢がなかったが、新たに女子の体型に合うものを導入した。それまで男子生徒が着用していたスラックスをI型とし、新たなスラックスをII型とした。生徒は、性別に関係なくI型とII型のどちらを選んでもよいとしている。さらに、ブレザー等においても、それまでの「男子用」「女子用」という呼称を廃止し、I型、II型とし、同様に自由に選択できるようにした。

この取組は、様々なメディアで取り上げられ、県内で広く知られることとなった。

しかし、新制度導入直後は、スラックスを着用する女子生徒はほとんどおらず、その後もなかなか増えなかった。

そこで、「みらい塾」の生徒たちが、その理由を知るため、全校生徒を対象にアンケート調査を行った。その結果、「人目が気になる」「着用する人が少ないから着用しづらい」等の回答が得られた。

(2) 解決に向けた生徒の活動（2020年11月～2022年3月）

以下、性別に関係なく誰でも好きな制服を着られる環境づくりに取り組んだ「みらい塾」の生徒の活動である。

- ①全校生徒の意識改革を目的としたポスター制作
- ②地域住民の意識改革を目的としたカレンダー制作
- ③社会へ向けた動画制作と発信

最初に行ったのが、「全校生徒の意識改革を目的としたポスター制作」である。ポスター制作を進める上で、生徒たちは当初悩みを抱えていた。その悩みは、防寒や機能性を重視した方がよいのか、トランスジェンダーの生徒のためのポスターにした方がよいのか、ということである。これに対しては、私たち教員もどのようにアドバイスしてよいのか結論を出すことができなかった。そこで、トランスジェンダーの当事者であり、LGBTQ支援団体ハレルワの間々田久渚氏に依頼し、生徒たちとディスカッションしていただく機会を設定した。その話し合いの場で間々田氏から、「トランスジェンダーであってもなくても、誰もがありのままの自分でいられること、誰もが自由に着用できるようになることが大事」とのアドバイスを貰った。実際のポスター制作にあたっては、自分たちがモデルになり、写真部に所属している生徒が撮影を行った。



[ポスターとカレンダーに使用された写真]

ポスターに入れるキャッチコピーやメッセージについては、何度も話し合い、間々田氏や立命館大学の大学生からもアドバイスを貰った。完成したポスターには、「違うことはいいことだ」というキャッチコピーが付けられ校内に貼られた。ポスターの効果もあり、少しずつスラックスを着用する女子生徒が増えていった。

校内での意識改革が進み始めたものの、まもなく生徒



[間々田氏とのディスカッション]

たちは次の問題を抱えることとなった。校内ではなく、学校外で感じる偏見である。社会においては、女子生徒のスラックス姿はまだ珍しく、驚いたような目を向けられることも少なくなかった。

そこで、まずは学校周辺の地域の人たちに意識を変えてもらうために、ポスターよりも掲示してもらいやすいと考えてカレンダーを制作し、配布することにした。各家庭、商店、飲食店、駅、市役所等を一軒一軒訪ね、配布の趣旨を説明してカレンダーを渡した。また、市内の小中学校、県内全ての高等学校、中等教育学校、特別支援学校への配布も行った。

このような地道な活動により、学校の取組を理解し、



[地域の方へカレンダー配布]

応援していただける方が増えた。この経験から、生徒たちは、自分たちの取組をさらに知って貰うことで、社会の課題解決の一端を担うことが出来るのではないかと考えるようになっていった。

そして、これを経て考えついたのが、動画の制作と発信である。動画制作については、今までのポスターやカレンダー制作と違い、生徒たちだけで取り組むには乗り越えなくてはならない障害が大きかった。そこで、日頃からSDGsや探究に関してアドバイスをいただいている立命館大学の大学生に指導を依頼した。動画のストーリーは生徒が考えて、脚本と出演を担当し、演技指導と撮影・編集制作は大学生が行った。

完成した動画「思い込みからの自由へ」は、2021年6



[大学生との動画制作]

月から学校ホームページ、YouTubeにて発信している。

(3) 整理・分析と新たな課題発見

活動を始めてから生徒の意識がどのように変わったかを知るために2022年3月にアンケート調査を行った。活動を始める前は、スラックスを所有している女子生徒は0%であったが、活動を始めて約1年半が経過した時点では、14.6%まで増えた。また、持っていない女子生徒においても、スラックスを着用したいと思っている生徒は、38.7%いることがわかった。さらに、以前よりスラックスを着用しやすい雰囲気があると感じている生徒の割合は、85.1%であった。

2022年度に入学した生徒に対しては、校内に自由に制服を選択できる雰囲気があることを知らせるためのチラシを制作し、合格発表の日に配布した。これらの活動の成果もあり、入学時にスラックスを購入した女子生徒は17.3%、今後購入する予定のある生徒を含めると33.3%に達した。

また、このアンケート調査により、新たに2つの課題が明らかになった。1つは、男子がスカートを着用することはまだまだハードルが高いということである。

もう一つは、「スラックスを着用したい」という女子生徒がいるものの、経済的な理由から、スカートと併せて購入することが難しいという点である。さらに、これまで男子が着用していたI型スラックスと比較して、II型スラックスは需要が少ないため、値段が割高になることが分かった。

(4) 新たな課題の解決に向けた取組（2022年4月～10月）

1つ目の課題については、2022年4月の「総合的な探究の時間」において、「みらい塾」の生徒がこれまでの活動発表を行い、2人の男子生徒がスカートを着用し、偏見に対する意識改革について訴えた。授業後に行ったアンケートでは、肯定的な意見が多く、「多少違和感がある」と答えた生徒も「見慣れれば普通のことだと思う」と付け加えており、否定的な意見はなかった。

2つ目の課題である制服購入時の経済的負担を減らすため、現在の3年生が卒業するときに、下の学年の希望者にスラックスを譲るリユースについても検討を始めた。計画を進めていく中で、スラックスは、腰回りや足の長さなど個人差が大きいことから、希望する生徒の体型に適用させることが難しいのではないかという意見が出た。そこで、発想を変えてスラックスは生徒が自費で購入し、スカートをリユースする方法に転換した。本校のスカートはプリーツスカートであるため、ウエストのサイズだけ合えば、腰回りは多くの生徒に合いやすいと考えられる。さらに、

II型スラックスの購入が促進されることで、II型スラックスの値段が下がることも期待できる。

このシステムを導入した場合、どのくらいの生徒が利用を希望するかを知るため、本年10月に実施するオープンスクールにおいて、中学3年生とその保護者を対象としたアンケート調査を行う予定である。



【スカートを着用し、偏見を無くすよう訴える男子生徒】

5 全校生徒への波及と教員の役割、外部人材の活用

以上のような活動を学校全体で行うためには、全体の生徒をけん引するリーダー「みらい塾」の活動が鍵となっている。この生徒たちは、日頃から社会課題について考え、解決方法を模索し、活動している。さらに、「総合的な探究の時間」においては、各クラスでファシリテーターを務めたり、課題を投げかけたりして全校生徒を活動に巻き込んでいく役目を果たしている。

そして、このリーダーたちを育成している校内の教員

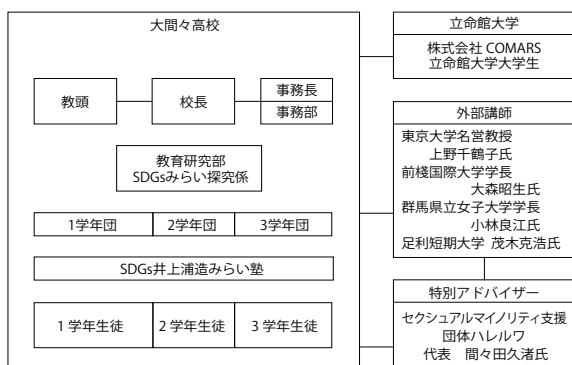


【各クラスで指導するみらい塾の生徒】

の組織が、2021年に新設した教育研究部である。8名の教員から成り、年間計画や他部との調整、新たな企画立案を行う。「総合的な探究の時間」の授業検討会や企画会議には校長も加わる。

生徒の指導においては、新聞や本を読ませ、自分の考えを自分の言葉で話すディスカッションの場を数多く

設けることを実践している。さらに、大学の学長や、ジェンダーに関する研究者等、外部講師へ講義を依頼し、生徒との討論の場を設定することが教員の役割となっている。東京大学名誉教授の上野千鶴子氏には、2021年から全校生徒にご教示いただいているが、今年度からは、「みらい塾」の顧問に就いていただいた。また、最近では、ジェンダーレスの制服の製作にも取り組み始めており、製作にあたっては、足利短期大学講師の茂木氏とLGBTQ支援団体の間々田氏から定期的に授業をしていただくなど、積極的に外部人材を活用している。



[研究体制図]

6 成果と今後の取組

これまでの活動により、校内では性別に関係なく制服を選べる雰囲気が醸成してきている。

また、引き続き広報活動にも力を入れ、2022年度版ポスター、カレンダーの制作も行い、学校や地域、企業へ配布した。

この2年間の取組が評価され、2022年7月、愛媛



[2022年度版ポスター]

大学社会共創コンテスト地域課題部門において、応募総数188の中から準グランプリを受賞することができた。このような賞をいただくことで、本校の取組が全国で広く知られ、多様性のある社会の実現のために少しで

も貢献できればと考えている。

さらに、今年度は、「みらい塾」の活動を全国に広げようと「みらい塾コミュニティ」を設立し、顧問である上野千鶴子氏による第1回討論会を6月20日に実施した。

その後も、様々な講師を招いた討論会を実施し、県



【上野氏とのディスカッション】

内外の高校生と交流を行っている。有識者による講義を聴いたり、全国各地の高校生と社会課題について語り合ったりする機会を頻繁に得られることは、生徒たちの主体性を高め、探究活動の発展的な循環を生み出す原動力になっている。

7 おわりに

本校の2年間の活動は、課題を見つけ、その解決に向けて取り組み、また新たな課題を発見し、解決に向けて取り組むことを発展的に繰り返しており、今後も続いていくと思われる。

新学習指導要領において、高等学校では「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」となったが、これは、より探究的な学びが重視され、「自ら問いを見いだす」ことに価値が置かれたことを意味している。生徒を主体的にするためには、課題解決型の学びが必要であると実感している。

私たちの目的は、ただ制度を変え、制服を自由に着られる学校をつくることではない。生徒や社会の人々の意識を変え、思い込みから解放し、誰もが尊重される社会を実現することである。社会の課題解決への探究こそが、学校教育における探究の在り方であると考えている。

絵本の楽しさを味わい、豊かな感性と表現力をもった幼児の育成

～ねらいや手立てを明確にした読み聞かせ活動の工夫を通して～

群馬県沼田市立利南幼稚園

園長 下田 高男

1 はじめに

本園は群馬県北部の沼田市の南東部に位置する3歳児、4歳児、5歳児各1クラス、全園児23名の小規模幼稚園である。園児は市内6小学校区より通園しており、家庭は幼稚園に対する関心が高く、地域も幼稚園の教育活動に対して協力的である。また小学校、中学校、高等学校が隣接しており、各学校との交流活動も計画的に行われている。

本園は教育目標を『人間性豊かで心身共にたくましい子』とし、「明るく元気な子」「友達と仲良く遊ぶ子」「豊かに表現する子」というめざす幼児の姿の具現化に向けて日々の教育実践をすすめている。全職員で幼児の姿を共有し、教員の持ち味を活かした『チーム保育』、一人一人の幼児の特性に応じた『支援と見守りのバランス』、様々な環境の中で学びのある『主体的活動の重視』、園と家庭や地域との連携による『共育』を経営方針の柱としている。

2 主題設定の理由

幼児期は人間形成に必要な基盤が培われていく大切な時期である。しかし人と心を通わせたり、心を動かしたりするような実体験が少なくなり、心の豊かさが失われてきている。このような時代に生命を尊重する心や他者への思いやりの心、感動する心など豊かに感じる心、そして感じた気持ちを素直に表現する力を育てることは、一人の人間としてよりよく生きていくために大変重要である。幼児期から絵本に親しみながら現実と空想の世界を行き来し、実生活ではできない経験をしたり、主人公の感情に触れ、喜びや悲しみをともにし、心を動かしたりすることで想像力や創造性、やさしさや思いやりなどの豊かな感性が育ち、自分の思いを表現したいという気持ちをかき立ててくれると考える。

本園幼児は絵本への興味・関心は高く、絵本の部屋

へ行ったり、保育室に絵本を持ってきて見ている幼児が多い。毎日行っている担任による読み聞かせでは静かに聞いていたり、話の内容について思ったことや話の予想を言ったりしながら楽しんでいる。

一方教員は絵本の内容を十分に吟味しないまま絵本を選んで読み聞かせを行ったり、幼児の内面を大切にしたい読み聞かせの工夫が足りなかったり、読み聞かせ活動がマンネリ化の傾向にある。

また幼稚園評価の保護者アンケートでは家庭での読み聞かせについての項目が他の項目から比べると評価が低く、保護者の読み聞かせに対する意識に温度差があることがわかった。

そこで読み聞かせのねらいを明確にし、絵本題材の選び方や読み聞かせの方法、読み聞かせの環境などを工夫することで、幼児が絵本を楽しみながら絵本の世界から喜びや哀しさ、切なさなどの様々な感情を受け取り、その感情を発達段階に応じた表現ができるようにしていきたいと考えた。さらに園と家庭で連携を図りながら家庭での読み聞かせの環境づくりを支援していくことで幼児が絵本の楽しさを十分に味わえると考え、本主題を設定した。

3 仮説

(1) 絵本題材の選び方や読み聞かせの方法などについてねらいと手立てを明確にした読み聞かせ活動を行うことで幼児の豊かな感性と表現力を育てることができよう。

(2) 園や家庭における絵本の環境構成を工夫することで、幼児は絵本に関する興味・関心を高め、絵本に親しみ、絵本の楽しさを味わうことができるであろう。

4 研究の内容・手立て

幼児が絵本の楽しさを味わい、豊かな感性と表現力を高めるために、ねらいを明確にした題材の選び方や

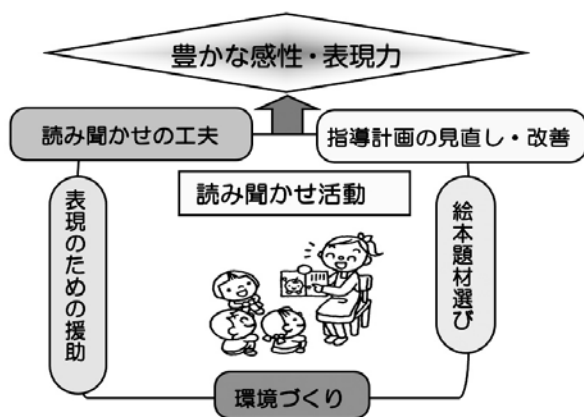
読み聞かせの方法・工夫、絵本に関する環境づくりに視点をあてた読み聞かせ活動の有効性を明らかにしていく。

(1) めざす幼児像

- 3歳児：絵本を楽しめる幼児
- 4歳児：絵本を楽しみ、絵本から様々な思いを表現できる幼児
- 5歳児：絵本を楽しみ、感じた思いや考えたことを表現しながら友達と伝え合える幼児

(2) 研究の手立て

- ①読み聞かせに関する指導計画の見直し・改善を図る。
- ②幼児の生活や興味・関心、発達段階に応じた絵本の選択を工夫する。
- ③幼児一人一人の感動や内面の動きに添った読み聞かせの方法を工夫する。
- ④幼児が思いやイメージを表出できる援助の方法を工夫する。
- ⑤家庭等と連携した読み聞かせの環境づくりをすすめる。



5 具体的実践

(1) 指導計画の見直し、改善【手立て①】

期ごとの指導計画の指導の「ねらい」や「内容」に関して読み聞かせ活動からアプローチできる項目を洗い出した。その項目について指導計画にアンダーラインを引き、活用できる絵本名等を書き加えた。各学年での取り組み内容や絵本選びについての成果、課題について定期的に情報交換、共有を行い、効果的、計画的な読み聞かせ活動につなげた。

(2) 実践例「どうぞのいす」(年少)

①ねらい

入園後まだ自分中心の姿が多く、友達と遊ぶのは楽しいが、自分の要求だけを通そうとしたり、友達と譲り合って遊べなかつたりする幼児がいる。読み聞かせを通して相手の存在に気付いたり、相手に優しい気持ちもてるよう、絵本「どうぞのいす」を読み聞かせた。

②実践【手立て②、③】

「どうぞのいす」を読み聞かせた翌週、物語に出てくる「どうぞのいす」とカゴ(模型)をつくり、絵本「どうぞのいす」をそばに添えて保育室に置いた。

翌日登園してきた幼児は「どうぞのいす」であることに気が付き、座ってみたり、かごの中の食べ物などを見たり触ったりしていた。その後何人かが集まってお話のように「どうぞ」の言葉とともにいすを譲り合うことを遊びとして交替でやっていた。

また「先生、僕もパンを作りたい!」「たくさん作ったからみんなも食べてくれるかな~」「私はパンをもらったから飴を置いていってあげよう」など次に座る人のための物を紙などを使って作り、かごに入れる幼児もいた。気が強く自分の思いを曲げないA児が自分の作ったパンを他の幼児が嬉しそうに食べてくれている様子を見て嬉しそうな表情を見せていた。

読み聞かせ後お話の世界を保育室の中に作り、ごっこ遊びとして楽しみながら「どうぞ」という優しさのある言葉で友達とのあたたかい関わりや友達との遊びを楽しめた。人に譲ることをいやがっていた幼児も遊びの中で「どうぞ」と言って譲る気持ちよさや優しさを感じている姿があった。



【どうぞのいす】



【かごに入れられた食べ物】

(3) 実践例「ばばばあちゃんとアイスパティー」(年少)

①ねらい

連日の猛暑で水遊びや水の心地よさを感じていた。読み聞かせを通して夏の暑さや水の心地よさ、涼しさを感じながら自然物に親しみをもてるよう、絵本「ばばばあちゃんとアイスパティー」を読み聞かせた。

②実践【手立て②、③、④】

読み聞かせ数日前に保育室壁面に「ばばあちゃん」の大型絵を飾ると、幼児は「誰これ？」と興味をもった。「誰かなあ？おばあちゃんも暑そうだね」と「ばばあちゃんとアイスパーティー」の絵本を見せた。幼児は「あ！同じだ！」と壁面と絵本のおばあちゃんと同じことに気付き、読み聞かせに期待感をもつ様子が見られた。

読み聞かせを終え、「アイス作り、楽しそうだったね。みんなも作ってみたい？」と絵本と自分たちの遊びをつながられるように話をすると、「作りたい」「え？作れるの？」と期待感をもった。

教師と一緒に冷凍庫で作り始めると「もうアイスできたかなあ？」と待ちきれない様子だったので、ばばあちゃんが「まだまだ」と気長に待つページを見せ、楽しく待てるようにした。翌日できあがったアイスを見て「わあ、すごい！」「いただきまーす。冷たいー！」と驚いたり、喜んだりした。手で触った時の冷たさやスプーンですくおうとした時の滑り感など幼児が思いのまま遊び、試したり気付いたりすることを教師が支援した。いろいろな氷の様子や変化に夢中になる姿が見られ、実物に触れる大切さを感じた。



【ばばあちゃんの壁画】



【アイスパーティー】

(4) 実践例「おおきなかぶ」(年中)

①ねらい

じゃがいも、だいこん植えやチューリップの球根植えなど園生活で野菜や植物と触れ合う機会は多い。しかし植物を使った集団遊びを取り入れる幼児は少ない。植物に関連した集団遊びを取り入れることで身近な自然物に関心をもち、友達と親しみ、一緒に活動する楽しさを味わい信頼感をもてるようにするために、絵本「おおきなかぶ」を読み聞かせた。

②具体的実践【手立て②、③、④】

園行事のいも植えやチューリップの球根抜きを終えた頃、絵本「おおきなかぶ」を読み聞かせた。順に登場してくる人物や動物の名前を口にして「うんとこしょ、どっこいしょ」の台詞をクラス全員でリズムカ

ルに繰り返しながら楽しんだ。床に寝転んだ一人の幼児を「おおきなかぶ」に見立てて、手を引っ張って動作を楽しむ幼児もいた。

実物のかぶを用意し、絵本と一緒に保育室に置いた。教師は「絵本のかぶのおじさんからもらってきたの。」と言うと幼児は匂いを嗅いだり、触ってみたりしていた。「かたい」「つるつるしてる」「冷たい」など様々な感想を言っていた。また幼児と大きなかぶを手作りし、リズムに合わせてみんなでお話を演じた。交替しながら絵本の登場人物になりきって台詞を言い合い、楽しむ姿が見られた。

その後、図鑑と園庭の実物の植物を見比べる冒険ごっこを楽しむ姿が見られるようになった。



【絵本と実物のかぶ】



【みんなでどっこいしょ】

(5) 実践例「たなばたプールびらき」「星空キャンプ」(年長)

①ねらい

園外保育でプラネタリウムに行ったことから、幼児は星に興味をもち始めた。星に関する絵本を読み聞かせることで、幼児がより星や宇宙へのイメージを膨らませ、思いを出し合って実際にプラネタリウムを造りあげる感動を味わわせたいと考え、絵本「たなばたプールびらき」「星空キャンプ」を読み聞かせた。

②具体的実践【手立て②、③、④】

プラネタリウム鑑賞で多くの幼児が「きれい」「夢みたい」と感動していた。「ほし組、にじ組さんにも見せたい」「幼稚園にもプラネタリウムを造ってみたい」という幼児もいた。保育室の絵本コーナーには星に関する絵本を並べ、保育室には風船や星をぶら下げ、宇宙空間をイメージしやすくした状況で「たなばたプールびらき」を読み聞かせた。

天の川に関する部分になると「いいなあ、天の川で泳いでみたい」「でもお空で泳いだら下に落ちちゃうじゃないの？誰か助けてくれるかな」「流れ星もあるのかなあ」「そしたら3回お願いしようっと」「流れ星がきたら虫取り網でキャッチすればいいんじゃない」な

どのやりとりがあった。

翌日ポリ袋をつなぎ合わせて、穴を開けてプラネタリウムを造った。完成後「先生、泳いでいい？」と一人の幼児が聞く。「たなばたのプールびらき」の一場面を思い出したのである。

その翌日「星空キャンプ」を読み聞かせる。数日後自作プラネタリウムの中でバーベキューごっこをする幼児がいた。「寝っ転がってみる？たくさん星が見えるよ」と仰向けになる。「星空キャンプみたいだね。夜になったからみんなでここで寝ようよ。」と言いながらキャンプごっこを続けた。

どの幼児も星への興味が高く、絵本の内容が遊びへと広がった。直接体験と絵本の世界が相互に作用しあっ



【プラネタリウム作り】



【星空キャンプ】

たことで、より豊かな感性が育まれたと感じた。

(6) 家庭と連携した環境づくり【手立て⑤】

①読み聞かせの日

読み聞かせ活動の質的向上をねらい月1回「読み聞かせの日」を設定し、「沼田市読み聞かせの会」の方による読み聞かせをクラスごとに行った。学期に1回は保護者と子どもと一緒に読み聞かせを聞く「親子読み聞かせの日」とした。また「読み聞かせの日」は家庭で読み聞かせを行うよう保護者に呼びかけた。

②読み聞かせ講演会

各家庭の読み聞かせに温度差があったので、「読み聞かせておもしろい」というテーマで外部講師によるPTA講演会を実施した。事前に保護者に質問を募り、その場で講師から回答してもらい、保護者の読み聞かせへの意識の向上を図った。

③おすすめ絵本リストの作成

「どんな絵本を読み聞かせたらよいかわからない」という保護者の意見を受け、保護者対象の「おすすめ絵本」アンケートをとり、保護者のおすすめポイントをつけた「おすすめ絵本リスト」を作成し、配布した。絵本選びにむずかしさを感じている保護者への支援につながった。



【親子読み聞かせの日】



【読み聞かせ講演会】

6 成果と課題

(1) 成果

①ねらいを明確にし、行事やクラスの実態、幼児の興味・関心に応じた絵本を選んだことから、幼児にとって絵本がより身近になり、絵本を楽しむ姿が以前にも増して多く見られるようになった。

②読み聞かせ後にねらいに即した「ごっこ遊び」や「表現活動」「創作活動」等を意図的に取り入れたことで、幼児が自分で感じた感情を再確認したり、より深く刻んだりすることができた。

③絵本から感じたことや思いを表現した作品等を発表し合う場面を設定したことで、自分の思いや考えを友達と共有できた喜びを感じることができた。思いを表現することの安心感や自己肯定感にもつながったと考える。

④「読み聞かせの日」や「PTA読み聞かせ講演会」など家庭と連携を図った読み聞かせの環境づくりをすすめた。保護者の意識を向上させることができ、幼稚園評価のアンケート結果から読み聞かせに積極的に取り組む保護者が増加した。

(2) 課題

①自分の思いや感情をうまく表出できない幼児がいる。幼児が感性をはたらかせている場面を教師が適切に捉え、代弁したり、言葉で伝えたりして思いを表出することへの抵抗感をなくしていきたい。

②感性を伸ばすための読み聞かせをめざし、より効果的な読み聞かせの工夫や絵本選択のための研修機会を増やしていきたい。

7 おわりに

ねらいや手立てを明確にし、家庭と連携を図った読み聞かせ活動をすすめてきた。成果や課題を踏まえ、幼児の豊かな感性の育成に向け、今後もより充実した読み聞かせ活動を推進していきたい。

経験値をベースにしながら歩む防災・減災教育

～地域・有識者・各種団体とつながる学び・活動を通して～

長野県長野市立長沼小学校

校長 市川 英臣

一、はじめに ～被災地だからこそその防災教育を～



2019年10月13日、台風19号の影響により学校近くの千曲川の堤防が決壊し、学区は壊滅的な被害を受けた。本校の全ての児童が被災し、全家庭が数週間から2年間に渡り避難生活を余儀なくさせられた。

被災から2年が経ち、学校の施設も全て復旧し、ほとんどの子どもたちが自宅から通学できるようになった。コロナ禍ではあるものの、少人数校の良さを生かし、ほぼ通常の学校生活が行われるまでに回復した。

子どもたちの心の回復を心配しつつも、またいつ訪れるか分からない災害に備え、防災・減災教育を進めていくことが本校にとっては急務であると共に、地域としても学校と共に災害に強く、安全が確保できる地域作りを推進していくという願いをもっている。子どもたちの心情に配慮しながらも被災地だからこそでき、様々な方の力をお借りしながら本格的な防災・減災教育の歩みを進めることにした。

二、防災・減災教育の具体的な取り組み

令和2年度末に、本校では防災教育カリキュラムを作り、それをベースにしながら実践につなげた。

1. 低学年の学習と活動

どのように進めれば良いか見えにくかったのが低学年の防災教育だった。

ほとんど避難訓練に頼っていた防災教育だが、



避難訓練の経験も含め楽しみながら防災教育につなげたいという担任の願いを元に、日本赤十字社の防災プログラムに沿って進めた。

日赤指導員の指導の下、絵図を元に地震時の具体的な行動のあり方を考えた。危険を予想する力と、災害（地震）が発生した時にどのような行動をとることが自分の命を守ることになるかを考えた。

- ・安全な場所が教室の真ん中や太い柱がある場所だということが分かって良かった。
- ・地震の時、下に車がついていて動くような物は危険だということが良くわかった。
- ・自分より小さい人が近くに居たら危ない場所を教えて、安全な場所に連れて行きたい。
- ・避難したら、自分の事だけ考えるのではなくて、みんなに迷惑がかからないようにしたい。

プログラムが大変分かりやすく、子どもの気づきを中心に進めていただいたので、楽しく学べた。避難訓練の経験や避難所生活での周囲への配慮を口にするなど、自らの経験も生かした発言が見られた。

2. 高学年の学習と活動

4年生では、社会科と関連させながらハザードマップの学習と共に地域の防災関連施設の調査を行った。

ハザードマップでは真っ赤に塗られ大変危険な場所では自分たちは生活していることを知ることができた。しかし、生まれ育ったこの地域から他の場所へ移動するかとの問いにはどの児童も、ここ長沼で生活を続けたいと強く望んでいることもうかがえた。学習のスタートはそんな「危険なこの長沼で自分たちはどのように安全に生活したら良いか」という学習問題が単元を貫く問いとなり、その答えを探す学習が進められた。

危険な場所ではあるものの、あれだけの大規模な水害においても犠牲者が少なかったことからそこには様々な工夫や人々の苦勞があったのではないかと仮説を立て、それを元に地



域に実際足を運び、そのための工夫や取り組みを学んだ。

防災倉庫では、非常時に必要な物資が入っていることを初めて知り、安心できた。また防災無線や非常時の最大水位の表示も至る所に設置されていることを確認し、今まで気づかなかった身の回りの安全対策について、初めて意識化できた。

また、千曲川堤防から学区を見渡すと、長沼地域では堤防が一番高い場所であり、そこを千曲川が飲み込んだ場合には学区に逃げ場が無いことも知った。学区で唯一逃げ場となりうるのが「穂保の高台」と呼ばれる人工的に作られた高台の公園である。実際その場所に足を運び、周囲の様子を確認すると共に、改めて早めの避難が何よりも有効であることが確認された。

- ・長沼小の学区がハザードマップでは真っ赤でびくびくりした。自分の住んでいる場所が危険な場所だと分かったので、早めに避難したい。
- ・防災倉庫や防災無線などいざという時のための準備があることを知り、ありがたかった。
- ・自分の家も危ないので、危険なときは早めに穂保の高台や北レクに避難したいと思った。
- ・防災倉庫に非常食や水など色々な物があることを知ったので少し安心した。
- ・逃げるときには、近所の人にも声を掛けたい。

5学年では昨年度学習した社会科の「自助・共助・公助」の考え方を関連させながら、理科で「流れる水の働き」の単元で川の流れについて学習した。また、防災グッズや災害用伝言ダイヤルなど具体的に役立つ災害対応についても学習した。

①水害時における避難についての学習

様々な災害の中でも水害は事前に予測可能な災害である。そのため流域警戒ステージやハザードマップ、上流のライブカメラなどをチェックすることで減災につながっていく。

6年生はそうした基本情報となるハザードマップや流域警戒ステージを表す表、ライブカメラの設置場所と、そこから長沼までのタイムラグを調べ、いつどこに誰とどのように避難するか、またそれまでにどのような行動を起こしておくか、準備品は何かといった具体的な行動につながるタイムラインを作成し、家族の行動について考えた。

②タイムラインの作成

新たな流域警戒ステージに即したタイムラインを班毎に作成するワークショップ形態にした。流域警戒ス

テージ1～5の中で3に達したら避難することを基本にししながら、タイムラインを完成させた。

大まかな思考としては「行動・携行品・心の面」の分野に分類し、成すべき事を洗い出した。

具体的には、スマホの充電・天気予報の確認・ニュースのチェック・ネットでライブカメラの映像確認・祖母や親戚に避難の連絡・近所の人に避難場所の確認と避難の声がけ・洗濯物の取り込み・道路状況の確認・非常食の確認・当面必要な衣服の持ち出し・土嚢の準備と設置・ブレーカーを切る・車のガソリンチェックと必要に応じ給油・避難場所の確認・車（農作業車）を土手に避難させるなど、実際に避難経験がある強みが十分生かされた。

また、携行品の面では、防災ラジオ・非常食・毛布・マスク・お金・本やカード、ゲームの持参・水・ナイフ・缶切り・懐中電灯・割り箸・乾電池各種・筆記用具とメモ・自分を証明するもの（マイナンバーカード・免許証）・着替え・医薬品（救急用品）・常備服用薬・カイロ・タオル・保険証・銀行の通帳・印鑑・ゴミ袋・レジ袋・ウエットティッシュ・ティッシュペーパー（ボックス）・避難所でのスリッパ・スマホ充電器・貴重品などがあげられ、こちらも経験値がものをいった。

心の面では落ち着いて行動する・他の人に迷惑を掛けない・自分ができることは率先して行うなど、他者に対しての配慮も感じられた。

2年前の記憶を辿りながら、自宅2Fに家電製品や重要なものを移動させることや、避難所生活での必需品や配慮事項まで詳細に書く班が多く、記憶に避難生活が残っていることがわかった。

③外部とのつながり

令和3年度、地域に阪神淡路大震災後に設立された防災支援団体SEEDS Asiaの長野県支部が設立され、交流の話が舞い込んだ。インド・バングラデシュ・フィリピン・ミャンマーと国内の三重・宮城など災害に見舞われた5カ国10校を結び、故郷の紹介と災害の状況の説明、そ



して防災学習の様子を互いに紹介した。初めて知る海外の災害規模の大きさに驚いていた。

特にインドの津波の大きさは想像以上のもので、水の勢いと怖さを知っている6年生にとっては、十分共感できる発表だった。またどの地域の子どもたちも酷い災害に見舞われても自分の故郷を大切に思い、移りたくないという思いを持っていることも感じられる時間になった。子どもたちからは「私たちは、何度水害に遭ってもここ長沼でがんばっていきたい」という力強い言葉が印象的だった。

④地域の方と共に学区の危険箇所を探す

信州大学教育学部廣内教授ご指導の元、アプリ、「フィールド・オン」を活用し災害時危険が予想される場所を写真に撮り、災害マップ作りを行った。学区の安全マップを子ども自らの手で作成すると共に、子どもたちと地域の見守り隊の方が共に学区点検を行うことで災害への共通認識ができた。



いつも登下校時に見守ってくださる「見守り隊」の方々と用水路からあふれ出る水を心配する姿や、

電柱の水害予想の水位を写真にとる姿、防火ホース設置場所の確認や、カーブミラーのぐらつきなど細かな点検を行った。

毎日通る通学路を、防災・減災の視点で見ること、日常に起こる危険について意識化できた。

- ・毎日通る通学路にも、地震や水害、交通面で危険な場所がたくさんあり、気をつけたい。
- ・学区内の他の地域と合わせ、自分たちの防災マップができると思うととても楽しみ。
- ・フィールド・オンは写真とコメントでまとめられるのでとても分かりやすく、ありがたい。
- ・水害は起きてしまうとどうしようも無いこともあるけど、予想水位なども分かるようにしてあるので、早めの避難を心がけたい。
- ・今回作った地図で学校のみならず、地域の皆さんにも危険な場所を知らせたい。

3. 情報共有する場と地域の役員の方々への発信

10月13日は水害に見舞われた日である。この日を「長沼防災の日」と学校では位置づけた。令和3年度はこの日にそれまで学んだ学習の成果を各学年で発表し、情報を共有するばかりか地域の防災を推進する代表者にも学

校の取り組みをご覧いただき、ご意見を頂戴した。

低学年は日赤のプログラムで学んだ防災教育をクイズ形式



で全校に発表した。特に地震に見舞われたときに、本棚や台車、蛍光灯、写真や絵の額、ガラス戸などが危険物になることを紹介すると共に、室内の安全場所を全校に伝えた。

4年生は、自分たちが学んできたハザードマップから学んだことや学区にある防災施設の発表を行い、驚いたことや新たに学んだこと、他学年に伝えたいことを中心に発表を行った。

5年生は、理科学習と絡めながら、川における増水の怖さや堤防が川の流れによって浸食されていく様子を中心に発表すると共に、防災グッズ・災害時にとるべき行動・警戒レベル・災害用伝言ダイヤル・ハザードマップについて発表した。

また、昨年度から社会科で学びを深めている「自助・共助・公助」の考え方を元に、自分がなすべきこと、地域が行うこと、公共機関が行うことの種類を行った。高学年として「自分で何ができるか」を具体的に避難時や避難所の場面で検討する中で、隣近所への声かけなど、他者にも配慮すべき点について発表できた。

地域の方々からは、この発表を地区でも行い、減災への共有を図りたいというお言葉をいただいた。



6年生は、各災害によって対応や被害が全く異なることが紹介された。地震や水害、火山噴火などの特性に応じた被害や対応、避難について発表できた。

4. 教師の取り組み

防災・減災教育は教師にとっても新たな教育分野である。地球温暖化の影響もあり、毎年のように災害に見舞われる日本にとってこの分野の教育は必要不可欠になっている。しかし、教師にはそうした分野の研修機会が少なく、今回の研修やそのノウハウが次の勤務先でも学校や子どもの安全を保障していくものとなることを期待した。



この研修では、一足先にできた長沼地区のタイムラインをベースにしながら、流域警戒ステージ3を中心にその前後に職員がどのように動かかをイメージしながら、学校の施設や備品などの物品の保護、児童の安全確保、避難所での受け入れ準備、職員の車の移動などを考えた。

施設対応・児童対応・重要物品対応と分担を決め、具体的な職員名を入れてタイムラインを考えた。

また、5回の研修は長野市危機管理防災課の担当職員や長野市教育委員会学校教育課の指導主事、そして長沼地区住民自治協議会防災担当区長にも参加いただくと共に、作成に関して丁寧に御助言いただき、様々な機関と連携がとれるよう横つながりも意識した。

学校にとって一番の収穫は、“地域と共に”防災・減災に向け協力ができたことである。

- ・何をどのようにという具体的なことはこうして実際作成しなければ分からないので、良い経験。
- ・施設、物、子どもと分けたことで考えが整理でき、具体的な動きが見えてきた。
- ・今後に生きる有意義な研修になった。
- ・本当に様々な視点や視野で考えることが必要だと分かった。
- ・他校に転任するときに、長沼にいたことが自信につながり、胸を張って異動できる力になった気がした。今後赴任する学校の職員や子どもたちにも広めたい貴重な研修の機会になった。

地域や各機関との連携が重要であるということを変更して感じた。学校は単独であるのでは無く、地域や行政と密接につながっていることも再認識できた。「地域との連携」とよく言われるが、一番大事な安全面でこうした連携ができている実践は少ないだけに、職員や行政、地域や保護者からも高い評価につながった。

三、まとめ

防災教育の必要性は東日本大震災以降学校現場で語られ、実践されることが年々増えてきた。



しかし、子どもはもとより教師の経験がその学習の広がりや深まりに強く影響し、経験値で語られる実践には重みや具体が必ず付随している。本年度の実践は本校にとって本格的な防災教育のスタートであったが、体系化も組織化もまだまだ未熟であり、前年度末に作成した各教科・領域を網羅した「防災教育カリキュラム」の実践ができ

るかどうかというレベルからのスタートだった。

また、児童の心理状態を心配し、防災教育を進めてもよいのか、まだ早いのかといった心配も抱えつつ子どもの様子を見ながら少しずつ学習を進めた。

2学期から本格的にスタートした防災教育だが、実践から多くのことを学ぶことができた。

①水害の経験から防災・減災教育に強い関心を持ち、犠牲者を出さないよう真剣に取り組んでいた。

②教師も防災教育について、ノウハウが不足していた。

日本赤十字社や有識者、防災担当の行政担当者、国土交通省の担当者、教育委員会、住民自治協議会の防災担当者、ボランティア団体をはじめ各種団体の支援を得ながら学習を進めていくことが何より確実に正しい防災学習につながる。

③教師もタイムラインを作成することで防災教育について意識の醸成がなされ、緊急時に具体的な動きをイメージでき、現実に役立つ指導と学習を始める足がかりになり、自信にもつながった。

④子どもも職員も様々なつながりや関わりを通してながら多面的で多角的な視野を持つことで新たな視点で防災教育に取り組めた。

⑤学校が単体で動くのではなく、自助・共助・公助という感覚を大切にしながら、各家庭や避難場所や地域といった、子どもを取り巻く環境全体で防災教育を広く捉えられるようになった。

⑥そして何より、早めに避難や荷物の移動などを行う事が減災につながることを学んだ。

スタート当初は一般的な呼称である「防災教育」だったが、そのうちに自然災害を防ぐことは難しく「減災教育」という呼称の方が学校現場としては適切だという考えが主流になった。このことは職員の防災教育への意識の高まりだと歓迎したい。

防災・減災教育は、幼い内から発達段階に応じ、分かりやすく、適時適切に指導し考えさせていくと共に、そのような行動ができるような体を作っていくこと、とっさの時に瞬時に迷わず判断ができる子どもを育てていくことが何より重要である。

課題はまだまだあるが「人命が一番大切」…これを中心にしながら「早めの行動」と「日頃からの準備」を大切にしながらこれからも本校・本学区から犠牲者を出さないよう引き続き地域や有識者、各種団体と手を携えながら防災・減災学習に取り組んでいきたい。

(執筆責任者 令和3年度 校長 下 育郎)

考えを『つなぐ』、学びを『つなぐ』児童の育成

～インタラクション(相互作用)とリフレクション(振り返り)を重視した算数科授業を通して～

広島県竹原市立大乘小学校

校長 柏木 雅子

1 はじめに(主題設定の理由)

大乘小学校では、2年前から算数科授業を通して研究を重ねてきた。

著書「授業を磨く」の中で田村学先生は、「アクティブ・ラーニングを実現するためには、自分の思いや願いを実現したり、課題を解決したりするプロセスの充実を意識することが重要となる。そのプロセスを充実させる上で、カギを握るとみられるのが、授業の中にインタラクション(相互作用)と、さらにリフレクション(振り返り)を入れることである。他者と相互にかかわり合う中で、自分の考えをまとめて表現することや、新たな知を生むことを経験する。その行為を自ら振り返ることで、思考や表現の仕方を見直し、それらの能力を高めていく。」と書かれている。それを算数科の学びにも生かすことが有効だと考えた。そこで児童が主体的に学習を進めることを意図して、算数科でインタラクション(相互作用)を起こすことのできる授業の構成を図ることにした。さらに、学習における自己認識を高める必要性を感じ、そのためのリフレクション(振り返り)の視点づくりを行い実践に生かすことにした。

また、児童が思考力・判断力・表現力等を身に付けるためには、数学的な見方・考え方を教師が授業の中で意識して指導し、児童に理解・活用させることが必須と考え、全教員で研修を行いながら授業の質を高めていく取組を進めることにした。

これらの方策によって、考えを『つなぐ』、学びを『つなぐ』児童を確実に育成したいと考え、本研究主題を設定した。

2 研究仮説

(1)「問題」と「話題」を精選し、問題を解決するプロセスにインタラクション(相互作用)とリフレクション(振り返り)を適切に位置付ければ、考えをつなぎ、学びをつなぐ、主体的・協働的な学びができるであろう。

(2) 数学的な見方・考え方を育むことで、児童に思考力・

判断力・表現力等を身に付けることができるであろう。

3 研究の実際

(1) 授業にインタラクション(相互作用)とリフレクション(振り返り)を導入する

算数科の授業において、児童を、考えたくなる・伝えたくなる環境に置き、児童の主体的・協働的な学習活動を生み出すための、教師の働きかけとして意図したものは次の3点である。まず、「問題」を精選し児童に提示する。次に問題解決のプロセスで、児童が考えたくなる・伝えたくなる「話題」を、意図して教師が投げかけ、児童がそれをきっかけにインタラクション(相互作用)を起こし活発に考え交流する時間を設定する。最後にリフレクション(振り返り)を適切に位置付け、この時間の学習が自分にどんな効果をもたらしたか確認できるようにする。これらを全学年で実践し授業改善を行った。

① 大乘小学校 授業の組み立て方

ア 単元間や学年間、他教科、日常生活と関連付ける「問題」を設定する。

- ・児童に学習意欲を起こさせるもの
- ・学習の展開に有効に働くもの
- ・必要感のあるもの

イ 問題を解決するプロセスにインタラクション(相互作用)を起こす「話題」を精選し児童に働きかける。

- ・既習や友達との考えなどとのずれ
- ・既習や友達との考えなどとの比較
- ・立式したものや友達の答えなどを批判的にみる。
- ・賛成派と反対派に分かれる、
- ・複数の解法で解決していく。
- ・見つける(ひみつ、きまり、同じもの、かくれているもの、何が入るか など)

ウ インタラクション(相互作用)を行う形を決める。

- ・全体で ・グループで ・ペアで

エ 活用できるツールを選ぶ。

- ・ノート ボード A3などの用紙 実物投影機で写してクロムブック等

己肯定感の向上につないでいった。今日はどんな言葉で褒めてもらえたかな、と、児童はノートを開いている。児童の、その姿を楽しみに教師はコメントを書いていた。

エ 考えを『つなぐ』、学びを『つなぐ』児童のフィールドを育てる教師集団に

学習の展開を改善すると並行して、伝え合うためには、インプットとアウトプットの技術も必要である。それが児童が自信をもって活動できるツールともなる。そこで、聞く・話す面での指導も精選し行った。

○「比べ聞き」をして思考する

ただ友達の発言を聞くのではなく、思考を働かせて聞くために、「比較」という視点を主に持たせていくことにした。発言者の方を向き、3年生は自分の考えをグループで話し合い、他のグループの考えについて自分たちの考えと比較し交流をしていった。「比べ聞き」とネーミングをし、全校児童が身に付けることができるように視点を示し共有した。(資料3)



「比べ聞き」の視点 (資料3)

「比べ聞きをしよう」

・自分の意見と比べて、似ているところ、違うところ、気が付いたことを見付けながら聞こう。

○似ているところ：いいねえ・自分と同じ考えだ

○違うところ：自分と違う・なるほどね・どっちがいいかな

○気が付いた：付け足したい・教えてあげたい・こう思ったよ

○話す・説明する力を育む

「話す・説明するのは苦手」という児童に、ただ話すことを促しても効果はない。そこで児童、学級集団、そして教師も加えた学習集団で話す、それを助け合う空気をつくろうと、共通の申し合わせをし、意識づけた(資料4)。それにより、「聞く・待つ・つなぐ」話し合いができる学級づくりを進めて行った。そして、そこに役立つのが「インタラクション」である。児童が「話したい。」と気持ちが高まる「話題」を教師が投げかけることで、自然にグループの仲間に話し、そこで自信を付けて全体の場で考えを述べるようになるようになっていった。

「話す・聞くための児童と教師の意識作り (一部抜粋)」(資料4)

児童

○相手意識を持ち、「聞いて分かってもらおう」という意識をもつ。

○「分からないところは質問をする」、「分かりやすい説明になるように意見を言う」など児童同士で深める話し合いをする。

○困ったら、「だれか続けてください。」と、次の友達につなぐ。

教師

○児童の説明を途中で止めたり説明を付けたりせず児童が考えを自分で話しきることを大切にする。(困っている児童については、支援をしたり他の児童につないで付け加えたりさせる。)

○児童の発言を繰り返したり、解説をしたりしない。児童同士で聞き合い話し合う力を育てる。

○教師は補助的な発問をして、内容の理解を図ったり、軌道修正したりする。

○肯定的評価をしたり、大切な点を板書して示したりしてよい説明に方向づける。

○ICTの活用で主体性アップ

より話し合いを活性化させるために、Googleclassroomのジャムボードを活用した。児童は、自分の



の考えを書き込んだり、またグループで1枚のシートに意見を付箋で貼り付けたりと、意見の交流をすることができた。話すことより書くことが得意な児童も目を輝かせて活動し主体的な姿を見せていた。

(2) 数学的な見方・考え方を育み、児童に思考力・判断力・表現力等を身に付ける

授業で児童に力を付けるには、内容も大切である。算数科授業の中で数学的な見方・考え方を育み、それを活用して学んでこそ、学習内容を真に理解するとともに、ものの見方・考え方も培うことができる。それには、教師自身が数学的な見方・考え方を理解し、授業の中で意図的に数学的な見方・考え方に沿った児童の言葉を引き出し、認め、広げることで、児童たちの言葉として、思考ツールとして活用することができる。そこでまず、大乘小学校で児童に使わせたい数学的な見方・考え方を整理した。本市採用教科書(啓林館)に示されている3つの見方・考え方、「にている：類推的」「もどる：演繹的」「きまり：帰納的」からはじめ、12の見方・考え方に広げていくことにした。はじめの3つ、そして12の見方・考え方を児童の言葉に具体化し、教員で研修し理解を深めた。見方・考え方を活用した児童の発言を「算数言葉」とし、授業でこれらの言葉が出たら、板書に吹き出しで書いて強調したり他

「これからの社会を生きる力」を育む探究的な総合学習

～地域活性化レー(カレー)作りという本物の経験を通して～

静岡県御前崎市立白羽小学校

教諭 山下 賢吾

1 テーマ設定の理由

本校では、総合的な学習の時間を学級総合としてクラス毎テーマを設定し、授業に取り組んでいる。令和3年度に担任した6年2組の子供たちは、御前崎市には特産品がいっぱいあることに気付き、特に食材を生かしたものを取り扱いたいという思いをもった。何度も話し合いをした結果、地域の食材をたくさん入れられるということからカレーを作ることに決めた。そして、できたカレーをみんなに味わってもらいたい、売上金で下級生の為に学校備品を購入したいという結論に至り、昨年度はカレー作りを総合学習の題材に決めた。

総合的な学習の時間の改訂の趣旨及び要点において、「教科の枠を超えた横断的・総合的な学習と探究的な学習が重要である。特に『①課題の設定②情報の収集③整理・分析④まとめ・表現』のプロセスが大事(一部抜粋)」とある。自分たちでやりたいと考えたカレーの商品作りという本物の経験ができる材であれば、一年間追求していくことを通して、商品完成のために必要な課題に自ら気付くであろう。そしてその課題を解決するための探究的な学びはこれからの社会で役に立つ力になると考え本テーマを『「これからの社会を生きる力」を育む探究的な総合学習』とした。

2 研究仮説

カレーの商品開発という本物の経験を通して、達成までに必要な課題を自分たちで考え、解決するというプロセスを積み重ねていけば、その過程で今までの学びが生かせることを実感したり、達成感を味わったりし、これからは生きて働く本物の学びになるであろう。

3 研究実践

(1) 資金調達の為のクラウドファンディング

カレー作りを始める前に、最も重要だと感じていたことは、資金面である。神奈川県にある大岡小学校の成功例を参考にし、お金の大切さを学ばせるためにクラウドファンディングを行おうと考えた。しかし、「クラウド

ファンディングをやろう」といきなり提示しては、子供たちの学びにはつながらない。自分たちで方法を模索し、実施してこそ本物の学びになると思い、子供たちに「お金が必要だけどどうやって集める?何かいい方法ないか調べてみて。」と提案した。調べる時間を十分取った後、ある子が「クラウドファンディングはどう?」と発言した。ほとんどの子はクラウドファンディングという言葉さえ知らなかったが、調べるうちに「面白そう」「やってみたい」とつぶやき、クラウドファンディングで資金を調達することに決まった。色々なサイトを調べ、手数料が最もかからない「CAMPFIRE」というサイトを使用することにした。

次の課題は、「どのような呼びかけなら支援したくなるか」ということである。「見た人が支援したくなるような文章やデザインを考えることが大事だよ。国語で学んだことを生かせるといいね。」とだけ伝え、後は任せることにした。すると、子供たちはどうレイアウトすれば、伝わりやすくなるのか真剣に話し合い、他の人が作ったページを参考



にしたたり国語の教科書を見たりしながらページを作り上げた(資料1)。教師が手を貸さなくても追【資料1】子供たちが作成したCAMPFIREのページ】求する必要がある内容であれば、既習を生かしながら学びを進めていく力が子供たちにあることを実感した。

以上のことから、クラウドファンディングという実生活でも取り組める方法で資金を集めたことは、子供たちにとって、生きて働く本物の学びにつながったと思われる。



(2) 地元のブランド牛を主軸とした材料選定

御前崎市には「遠州夢咲牛」という高級ブランド牛がいる。カレーのメインとなる材料は夢咲牛にすぐに決まった。他に入れる野菜についても家で入れるカレーを調べてきたり、友達に入れたい野菜についてアンケートを取ったりして調査を繰り返した。「オリジナルのものを作りたい」「御前崎市の食材を使いたい」という子供の思いから、入れる野菜は市の特産品であるさつまいもと、地元の玉ねぎ、人参の3種類に決定した。

夢咲牛は「肉のハナマサ」（地域の肉屋）、野菜はJAで手に入れられることを知った子供たちに、「連絡を取ってみたいらどう？」と声を掛けた。小学生で働く大人に肉や野菜の注文をする経験は滅多にない。また、自分たちで注文することで、より本物の学びに近づくのではないかと考え、二店に連絡を取らせることにした。

肉屋には肉の部位ごとの値段の違いを尋ねたり、JAには野菜の注文をしたりした。「大人のひとと電話をしたのも初めてなのに野菜の注文なんてどきどきした」や「高い部位だと40万円するんだって」など、緊張しながらもどこか誇らしい表情が見られた。



【肉屋に値段を聞いている様子】



【JAの方から野菜を頂いた時の様子】

無事に野菜が届いた後、自分たちで発送の準備をし、お金の支払いも経験させた。夢咲牛の代金は約30万円、野菜は3万円かかった。支払いの後は「あんな大金初めてで緊張した」JAで大人のひとがお金をどう払うのかわかった」など学びを実感する姿が見られた。

これらのことから、自分たちで考えたカレーの材料を自分たちで注文したり、支払いをしたりした経験は社会参画していこうという態度を養うことにつながったと思われる。



【JAに野菜代を支払に行った時】

(3) 算数の学びを生かした業者検索

コロナ禍ということもあり、自分たちでカレーを直接作ることは難しく、子供たちにどうやってカレーを作るか尋ねた。「レトルトカレーなら自分たちで作らなくても工場にお願いすれば作れそう」という案が出た。そこで、レトルトカレーを作ってくれる業者を探すグループ

の子供に「できるだけ安く、試食も経験させてくれるところが見つかるといいね。」と声を掛けた。

県内だけでなく、全国の色々な業者の作れる個数と値段を調べた。東京都にあるA社では、「1,000個で1個あたり360円」、B社は、「380円×500パック」、宮城県にある会社では「試作50パック36,000円、1,000パック110,000円」ということがわかった。「どの会社に頼むことが一番得かな？」と問いかけると、初めは戸惑っていたが、「1個の値段で比べればいいんじゃない？」と気付いた子の発言により、「算数と一緒にじゃん」と今までの学びと結び付けて考える姿が見られた。そして、1個分で比べてみると、宮城県の会社が1個あたり、140円程度となり、一番安いこ



【宮城県の「はらから」さんのHP】

とがわかったので、「はらから」に依頼することにした。業者を決めた後、連絡をどう取るのかが、次の課題となった。聞かなければいけないことを話し合いながら、Chromebookにまとめ、「試食は何回できるのか。完成にはどのくらい時間がかかるのか。肉や野菜はいつまでに送ればいいのか。」を聞くことに決め、子供たち自身が電話をかけた。



後に聞いた話だが、電話

をかけた子の保護者の方

【「はらから」さんに質問中】

が、「子供たちが業者に電話する経験はとてもよかった。一から子供たちが作り上げたことは、いい財産になると思う。」と仰っていたことから、業者を調べ、依頼する経験の子供たちに任せたことは、これからの生活に生かせる財産になったと思われる。

(4) Chromebook を活用したデザイン作成

レトルトカレーを作る際にはカレーだけではなく、パッケージの作成も必要である。まず、パッケージの色、載せるキャラクター、文字などどんなデザインにするのかを話し合った。次に、Chromebookを活用して、実際にどんなパッケージがあるのか調べたり、人を惹きつける色の組み合わせについて検索したりする姿が見られた。そして、Chromebookの描画ツールを活用し、一目でカレーだとわかるような肌色のベースに、自分たちが3年生の頃の総合学習で作った学校公認のオリジナルキャラクターの「しらなみさん」がカレーを持ったデザイン案を考えました。全員が納得いくデザインにしたいと、学級でアンケートをとった際には、「カレーと皿の境界

線をはっきりさせた方がいい」「手書きの文字が小さいから見やすくした方がいい」などとアドバイスをもらい、修正を繰り返しながらデザインを完成させた。

次は、出来上がったデザインをパッケージとしてプリントしてくれる業者をどこに依頼するのが課題となった。カレーの業者を決める時と同じように、「1,000個の箱を作ってくれること、できるだけ安いところがいいよね」と自分たちで考え、デザインを作ってくれる業者を探した。色々な業者を比べた結果、「印刷のグラフィック」という会社が、他の業者と比べ1個あたりの値段が最も安く、ここに依頼することにした。

依頼してから2週間後、完成した箱を見て、「売り物みたい」「頑張ってるよ」と、自分たちがデザインしたパッケージが実際の売り物と同じように出来上がったことに対し、達成感を得た姿が見られた。

(5) お客様が喜んでくれる味を目指した試食会

レトルトカレーに入れる具を決定した後、カレーのルーについて話し合った。多くの子が家庭でも「C社の①のルー（以下①のルー）」を使用していたので、その意見が多かったが、ある家庭では「C社の②のルー（以下②のルー）」をブレンドしているということを知り、2種類をブレンドすることにした。「どのぐらいの割合で入れればいいのか」と問いただけると、算数で習った比を活用しながら、色々な比率でのブレンドを考えた。そこで、実際に「①のルー」と「②のルー」を鍋に用意し、試食する場を設けた。「何対何の比率のカレーがよかったか教えてね。」と



【カレーの比率を変えて食べている様子】



伝え、スプーン何杯分を混ぜているかという比率を考えながら自分たちでブレンドして味わう姿が見られた。その結果、一番バランスが取れているということで、「①

のルー」と「②のルー」を3：2の割合で入れることにした。

また、ただブレンドするだけではオリジナル感がないということで、次は「隠し味を入れたい」ということになった。「みんなで家の人に何を入れているか聞いてきて、試してみればいいんじゃない？」ということになり、後日聞いてきたことを発表し合った。リンゴ、ハチミツ、コーヒー、バナナなどいろいろな意見が出て、どれを試したいか話し合った。全部試してみればいいのか意見が出たが、「①のルーでもともとりんごとはちみつが隠し味ってCMでやっているよね？」と気付いた。そして、どの家でも試したことがないという理由から、「①のルー」「②のルー」を3：2、隠し味を「コーヒー」で試作品を発注することにした。

発注に際して、入れる具材をどのようにカットするのかということも子供たちで話し合った。どんな切り方がいいか聞くと、「夢咲牛は大きい方がいい」「野菜はどのパックにもしっかり入っていてほしい」「さつまいもはオリジナルだから形が残っていた方がいい」などという意見から、「夢咲牛とさつまいもはブロック状、たまねぎとにんじんはミキサーにかける」という形に決定した。

(6) 試行錯誤を繰り返した商品作成

2週間後に試作品が学校に届いて早速味見をした。自分たちで考えたカレーが売り物のようになっているだけでとても興奮していたが、一口食べたら表情が曇った。おいしくなかったのである。匂いもどこかカレーらしくなく、食感もよくない。なにが原因だったのか、入れたものについて話し合っていくうちに隠し味のコーヒーの量が多すぎたということが分かった。10食に対して2g程度でいいものが20g入っていたのである。これでは、おいしいわけがなかった。そこで隠し味を変えよう、ということになった。

前回の試食の時に挙がった隠し味の候補になるものをカレーに入れて食べてみることにした。ブルーベリー、バナナ、みそ、ソースなど色々試した結果、醤油とはちみつを混ぜたものが一番おいしかったと答えた子が多く、隠し味は「醤油とはちみつ」にし、量も10食に対して2gずつとし、試作品を注文した。

2回目の試作品が届いた。すぐに試食を行ったが前回ほどおかしい匂いもなく、見た目はとてもよかった。しかし、食べてみるとおいしいはおいしいが、甘みが強く、少し水っぽいという意見が出た。他の子たちも概ね納得していた。なぜそう感じたのか、話し合うと、「さつま

いもの甘さじゃないかな？」という意見が出た。確かにじゃがいもよりも甘みが強いさつまいもをカレーに入れば甘くなるだろう。さらに、「玉ねぎとにんじんを細かくしてあるから水っぽく感じるんじゃない？」と、改善点に自分たちで気付く姿が見られた。

カレーの味はこれでいいかと尋ねると「小さい子でも食べられるからこれでもいい」や「クラウドファンディングを支援してくれた人は大人だからもっと辛い方がいい」など、食べてくれる人のことを考えた発言で話合いが進んだ。その結果、「甘いカレーを辛くするのは難しいけど、辛いカレーならハチミツとかで甘くしてもらえばいい」という意見に納得し、カレーの味をもう少し辛くする方向でまとまった。

どのように辛くするか考えた際に、ある子が「①のルー」と「②のルー」が同じ中辛であっても「②のルー」の方が辛いことに気付いた。そして、「『②のルー』の方が辛いなら、それを辛口にすればいいんじゃない？」と発言し、全員が納得して味を変更した。また、水っぽさを解消するために、野菜は形を残そうということに決まった。

最終的に「①のルー（中辛）」と「②のルー（辛口）」が3:2、夢咲牛と野菜は全てブロック状にする、ということに決まった。何度も試食をし、失敗を重ねたからこそこの結論に至ることができた。

このような正解がない場面で試行錯誤して納得解を得る経験はこれからの生きるものだと思う。

4 その後について

完成したカレーは浜の子発表会（学習発表会）で保護者に販売したり、クラウドファンディングに支援してくれた人に支援の返礼品として配送したりした。発表会では、お客さんに試作品と完成品を食べ比べてもらうための試食会を企画した。自分たちがこの材料に決めた理由、箱のデザイン、何度も試食を重ねて商品を完成させた過程を、自信をもってプレゼンする姿が見られた。カレーは見事に販売することができた。

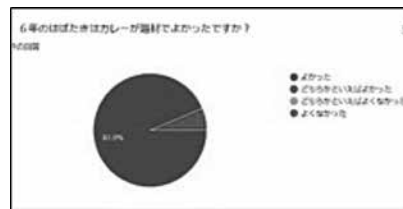
販売で得た売上金については、当初から計画していた下級生の為に使うことにした。みんなで楽しく使ってほ

しいという思いから、体育で使うTボールのセットとボールを購入し、校長を通して学校に寄付した。

今回は、カレーを題材にして1年間学習に取り組んできたが、商品づくりに関わる本物の経験が積めたのではないかと思われる。

5 成果

・年度末のアンケートでカレーという材ではばたき学習を取り組



【アンケートの結果】

てよかったと回答した子が100%であった。「6年生でお金関連のことに取り組むことができ、貴重な経験になった」「クラウドファンディングや材料集めなどやることがなかったし、全校のためにもなれた」など、今まで経験できなかったことを自分たちでやり遂げられたのは、よりよい商品を作るために何度も試行錯誤した成果である。「食品」と「お金」は子供たちに身近で必要感のあるものであり、これからの生活にも大に関わる本物の経験である。カレーを材にしたことで、子供たちの主体性を引き出し、達成感を味わうことにつながったと思われる。

・はばたき学習を通してどんな力が身に付いたかというアンケートで「試す力、工夫する力、説明する力」「ネットを通して人と関わる力」や「考える力やみんなと協力する力」などこれからの社会でも生きて働くであろう力が身に付いたと感じた子が多くいた。

6 おわりに

本実践を通して、商品作りというこれから子供たちが実際に関わるかもしれないことを1年間追求したことで、目標を達成するために課題を見つけ解決するというプロセスの大切さを子供たちも感じる事ができたと思う。また、子供たちが自分事



【完成したカレー】

として学びたいと思える材を共に考え、取り組む機会を十分に与えてあげれば、子供たちだけで学びを進めていく力があることがよくわかった。これこそが、これからの社会で生きる本物の経験になり得るものであると感じた。今後も、子供たちのこれからの生活に少しでも生きる経験ができる総合的な学習を目指し、子供たちと共に取り組んでいきたい。

出会い・感動・発奮 ふるさとキャリア教育

～地域の偉人・先人の生き方に学ぶ道徳教育を基盤とした第6学年の実践をモデルとして～

鳥取県八頭郡八頭町立船岡小学校

教諭 杉谷 義和

1. はじめに

ふるさとキャリア教育とは、子どもたちが自立し、自分らしい生き方を実現するとともに、将来にわたりふるさと鳥取に誇りと愛着をもち、将来の鳥取県を担う人材を育成していく営みである(2020、鳥取県教育総務課)。八頭町では、令和2年度より3年間のモデル事業として取り組みを進めている。鳥取県教育振興計画～未来を拓く教育プラン～には、教育理念として、「自立して心豊かに生きる 未来を創造する 鳥取県の人づくり」が掲げられ、その基本理念を支える4つの「力と姿勢」の一つに、「ふるさと鳥取県に誇りをもち、未来を創造する力」が明記されている。本校の学校教育目標は、「ふるさとを愛し 心豊かにたくましく 未来を創造する子供の育成」であり、ふるさとを愛する子供を育成することに県内の学校教育が果たす役割は大きいと考える。

2. 主題設定の理由

これまで本校は、人の生き方に学ぶ「出会い・感動・発奮」のある道徳教育に力を入れており、道徳の教材を通した偉人との出会いやオリンピックのメダリストなどの出会いを通して、共に体験したり夢や目標を実現するための秘訣を伺ったりするなど、心豊かにたくましい子供の育成に努めてきた。このような取組に対して、保護者から肯定的な評価を得てきた。一方で、子供たちは、自分たちの地域(八頭町)のひと・もの・ことについての出会いは限定的であり、年度によって、担任によって、実践に偏りが見られる傾向にあった。また、「地域の歴史や地域に関わった人物などについては、よく分からないことが多い」という保護者の声も少なくなかった。そこで、地域人材や資料の活用をカリキュラムの中に取り入れることで、地域の偉人・先人と、感動のある出会いを可能にし、キャリア発達へと発奮を促すことができると考えた。そのためには、教科横断的に学べるカリキュラムをデザインすることが必要だと考えた。本稿では、道徳教育を基盤とした6年生のふるさとキャリア教育の実践を紹介する。

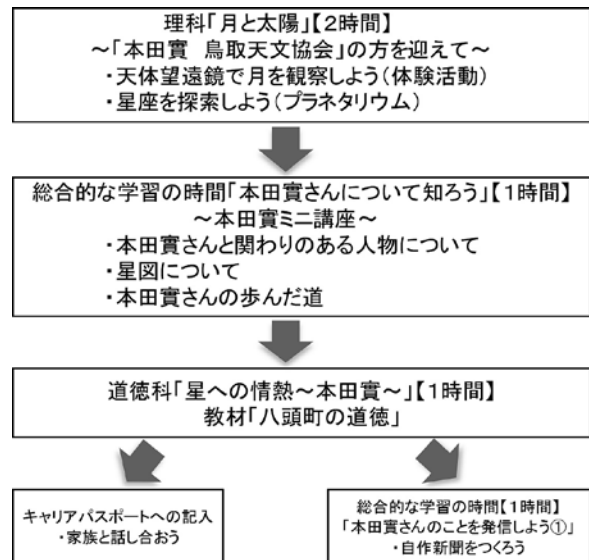
3. 地域の偉人、本田實の生き方に学ぶ



図Ⅰ 八頭町の道徳

2019年、八頭町で道徳教材「八頭町の道徳」が作成された。天文学の発展と普及に貢献した本田實をはじめとする八頭町の偉人の知恵や生き方を知ることのできる教材集である(図Ⅰ)。しかし、道徳の授業でどのように活用して

いけばよいのか悩む教師も少なくなかった。理由として、教科書のように指導書がなく、一から授業づくりを進めなければいけないことが挙げられる。教科書のように内容項目(道徳的価値)を意識して作られたものではなく、偉人の人生が丸ごと描かれたもので、小学生にとっては長文であるため(本田實の教材は8ページ)、道徳の教科書と同じように授業実践を進めていくことが容易ではないと答える教師が少なくなかった。そこで、道徳の時間だけの学びに終わらせるのではなく、時代背景の理解や実感的に学ぶ体験と連動させた教科横断的な学びをデザインした(図Ⅱ)。校長や教頭、町の教育委員会との連携を密にし、人材や資料の発掘に努めた。



図Ⅱ 本田實の生き方に学ぶ単元構成

3.1 実際の学びと考察

理科「月と太陽」



図Ⅲ 月の観察の様子

月が、午前中に南の方角に現れる日に合わせて観察を行った(図Ⅲ)。公民館からお借りした初めて見る天体望遠鏡(以下、望遠鏡)

に関心を寄せながら子供自身で組み立てた。観察では、望遠鏡で月を捉えたかと思えば、すぐに雲に隠れてしまうなど、思うように進めることができなかった。その後、星のエキスパートである町のゲストティーチャー(以下、GT)と一緒にプラネタリウムで星座について学んだ。子供たちは学習を通して、時間の経過に伴う月や星座の見え方の理解を深めることができた。そして、星は見たいときに見られるものではないことを実感すると共に、本田實が、いかに多くの時間を費やして星の観測のために八頭の空を眺め続けたかを知るきっかけとなった。

総合的な学習の時間「本田實さんについて知ろう」

本田實をよく知る地域の方をGTとして招き、ミニ講座を開いた(図Ⅳ)。教材に登場する本田實と関わりのある人物である国内初の民間天文台を建設した原澄治や多くのアマチュア天文家を育てた山本一



図Ⅳ GTによるミニ講座

清について写真を提示しながらクイズ形式で説明していただいたり本田實が使用した星図を実際に見せていただいたりした。子供たちは、本田實に星を探求するきっかけをつくった人物がいたことや、そのつながりを大切にしながら未知なる星のにめり込む本田實に興味をもつことができた。また、本田實が幼稚園の園長をしながら生計を立てたことや、理科で使う顕微鏡を星座の位置の確認に使用したことを紹介するなど、試行錯誤を重ねた本田實をよく知るGTならではの学習となった。幼少のころから天文家になるまでの生立ちをダイジェストで語っていただいたことで、当時の時代背景や本田實の置かれた環境の大体を知ることができた。

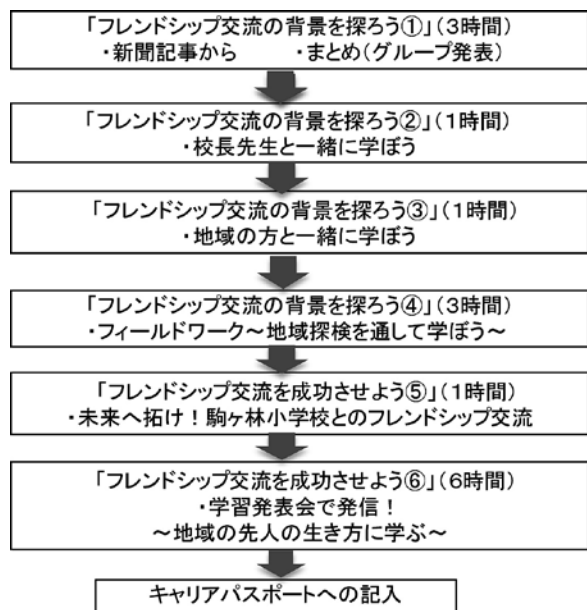
道徳科「星への情熱～本田實～」

主題を「夢や目標に向かって」内容項目を「希望

と勇気、努力と強い意志」として、授業を実践した。本教材「星への情熱～本田實～」は、本田實が子供のころから新星発見の夢を抱き、様々な困難な状況があってもくじけることなく、生涯、新星発見に情熱を注いだことが実感できる教材である。8ページに渡る長文であることから、事前に読ませて(一回目は宿題、二回目は朝の読書の時間に教師が範読)授業を迎えた。また、事前に「みんなで話し合いたいこと」をアンケート用紙に書かせ、話し合う内容を予め焦点化した上で授業「本田實さんの生き方に学ぶ」に臨んだ。子供たち自身が関心を寄せたテーマ「本田實さんの生き方で『すごい』『まねしたい』と思うところはどこか」「いろいろ大変だったのに、星を探し続けたのはどうしてなのか」をもとに話し合いを進めた。友達の意見や考えに耳を傾けながら本田實の生き方から学びたいことを今の自分と重ね合わせながらしっかり考えることができた。また、GTからお借りした本田實が両親と山本一清にあてた手紙を読んで聞かせた。本田實自筆の手紙だったこともあり、子供たちは、手紙の内容に興味を抱きながらじっと耳を傾けて聞いていた。「何が何でも夢を実現させようとする強い心や覚悟を感じた」「自分にも大好きな野球がある。本田實さんのように諦めずに夢に向かっていきたい」など、本田實の生き方に学ぶ姿が見られた。その後、学びをキャリアパスポートに記入したり新聞にまとめ発信したりした。

4. 地域の先人の生き方に学ぶ

総合的な学習の時間を活用した地域の先人の生き方に学ぶ単元構成を以下に示す(図Ⅴ)。



図Ⅴ 地域の先人の生き方に学ぶ単元構成

4.1 実際の学びと考察

「フレンドシップ交流の背景を探ろう」

フレンドシップ交流は、太平洋戦争中の集団疎開が縁で交流を続けている神戸市長田区の駒ヶ林小学校（駒ヶ林小の前身である二葉小は、2006年閉校）との交流のことである。阪神・淡路大震災（以下、「阪神・淡路」）の際は、船岡町が支援を行った。職員室前の廊下に関連する新聞記事がいくつか掲示されているが内容を知らない子供が多い（図VI）。そこで、単元の導入に、これらの新聞を子供の前で紹介した。「何が書いてあるのかじっくり読みたい」とい



図VI 掲示された新聞

う声が挙がり、授業で友達と新聞を読み合い、話し合いを進めた。「阪神・淡路」の2つが、今のフレンドシップ交流につながっていることが分かりました」「船岡の地域の人たちが神戸の戦争孤児のお世話をしていたことが分かりました。もっと知りたいです」という感想が出た。また、新聞記事を指差し、「この役場の前に写っている人たちはどんなことをしたのか詳しく知りたい」という発表も出た。そこで、戦争で孤児を船岡に受け入れたときのことを校長に、「阪神・淡路」の支援の様子をGTとして地域の方に、お話しいただくことを計画した。GTには、これまでの学びと、これからの学びを丁寧に説明した。「人前での話に自信はないが、子供のためなら」と快諾をいただいた。「校長先生と一緒に学ぼう」の学習では、当時の疎開地日誌を提示され、疎開児童がどのような生活を送っていたのかを話された（図VII）。「大変な生活だ」とた



図VII 疎開時の様子を伝える校長

くさんのつぶやきが出るほど、子供たちは、自分たちの学校生活とは程遠いものに驚きを隠せない様子であった。そして、そのような境遇にいる疎開児童に笑顔を取り戻そうとした船岡の方たちの温かい支援を知った。子供は、「戦争孤児が大きくなったときに、船岡は第2のふるさとだと言ったことがあった気がします」と感想を述べた。学校の伝統として大切に受け継がれてきたフレンドシップ交流の学びに、校長が参画する意味は大きい。GTとの学習では、実際に被災地に支援に行った方から話を聞くとあっ

て、子供たちは、とてもわくわくした様子であった。「阪神・淡路」が起こったその日に町役場から有線を通じてボランティアが呼びかけられ、その翌日には婦人会をはじめとする多くの方が公民館での炊出しに参加し、その日のうちに支援物資を集めて出発したことなど、支援の様子やそのときの思いを詳しく語っていただいた。「街灯がなく、真っ暗で道路が陥没したところもあって危険だったのに、一人でも多くの命を救いたいという一心で行動に移せたことがすごいし、かっこいい」「町の様子が太平洋戦争のときと重なって、神戸の人たちへの支援の思いがとても強くなったのだと思う」などの感想が出た。その後、震災を扱った道徳の学習と繋げたり、フィールドワークを通して関わりのある旅館や施設などについて調べたりして、学びを深めた。

「フレンドシップ交流を成功させよう」

神戸の駒ヶ林小の6年生を迎えたフレンドシップ交流では、ゆかりのある場所を案内して、戦争孤児の生活や大震災での船岡の方たちの関わりを説明した（図VIII）。駒ヶ林小の子供も熱心にメモをとり、「宿ではどのような生活をしていたのか」「いくつの宿で受け入れをしていたのか」など、積極的に質問をし、学びを深めていた。



図VIII フレンドシップ交流



図IX 学習発表会

その後の学習発表会では、自分たちで内容や構成を話し合い、劇で表現した（図IX）。「未来に拓く」と題して、船岡の方々の優しさやたくましさをこれからも大切していきたいというメッセージを堂々と伝えた。以下、キャリアパスポートやアンケートに書かれた保護者の感想である。

- ・フレンドシップ交流がなぜ行われているのか、分かっていたつもりでしたが、発表を見て「そうだったのか」と気付かされるところがたくさんありました。
- ・子供たちみんなの「伝えよう」という強い気持ちが言葉や態度、身振りや歌声などを通して、見ている側にしっかりと伝わってきました。この発表会を通して、船岡のことを好きになり、誇りをもってほしいと思いました。素晴らしい学びを紹介した自分たち自身にも、自信をもってほしいと思いました。

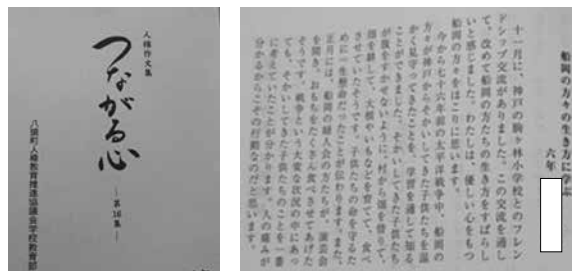
5. 成果と今後の展望

「八頭町の道徳」には、他に、第5学年「橋本興家」、第4学年「安藤伊右衛門」とあるが、どちらも本実践をモデルとした総合単元的道徳学習をデザインすることができた。町出身のG Tの参加、町主催の展覧会や祭りへの参加、用水路の現地学習など、地域のひと・もの・ことが生かされたものとなった。例えば、4年生では、社会科「きょう土の伝統・文化と先人たち（新しい社会 4）」「半島をうるおす用水（わたしたちの鳥取県）」の学習と関連付けて、地域の先人である安藤伊右衛門がつくった安藤井手を実際に見学し、地域の方に安藤伊右衛門の思いや活動等の話を聞いて、実感的に理解を深めた。その上で道徳の授業を実践し、偉人の知恵や生き方に深く学ぶことができた。まさに、地域に開かれたカリキュラムとなった。ふるさとの魅力や地域の方と共に考えるきっかけとなった本実践は、地域にとっても有益なものだと考える。本実践に参加いただいたG Tから、「今後も授業に参加してほしい」と言っていた。子供の教育に地域の方と協働できることは、学校にとっても、子供にとっても嬉しいことである。まさに Win-Win-Win の関係である。3年分の板書と指導案、活用した資料を蓄積することで、担任（指導者）が変わっても多様な授業づくりを目指す環境を整えることができた。今後は、P D C A を重ねる中で、地域人材との協働の在り方やカリキュラムタイムマネジメントのブラッシュアップを図ることと、1年生から3年生においても「八頭町の道徳」の偉人や地域の先人に出会わせて4年生からの学習をより意欲的で主体的なものへと変換することを進めたい。そして、近い将来、「八頭町の道徳船岡モデル」を提案し町内共通の取組を見出し、キャリア教育を推進させたい。本実践を通して、地域の偉人や先人の生き方に感動する心やふるさとへの誇りが人から人へと紡がれる喜びを実感することができた。また、町のケーブルテレビにも取り上げられ、取組が周知されることとなった。加えて、鳥取県東部小学校教育研究会道徳部会で、「八頭町の道徳」を活用した本実践を発表し、ふるさと教育に関わるカリキュラムや授業づくりについて研鑽を積むことができた。さらには、町内の公立学校から、本カリキュラムを参考にして授業を実践したいという要望があり、作成したカリキュラムと授業の動画を送付し、実践に役立ててもらうこともできた。

子供たちは、地域の方との出会いを通して、地域の

偉人や先人に会い、地域のことを知り、地域に誇りをもち、自分の生き方をより良くしようという思いをもつことができた。本実践のような地域を通じた出会いを持続可能にすれば、子供は、心豊かにたくましく育ち、自ずと地域力は高まっていくものと確信する。

以下、「地域の先人の生き方に学ぶ」を学習した子供が、学期末に書いた作文である（図X）。町が発行する人権作文集に掲載された。本実践での学びが、子供の心の中でしっかり芽生えていることを感じさせられた。



図X 学びが反映された6年生の人権作文

船岡の方の生き方に学ぶ 6年 ○○ ○○

～文集「つながる心」より一部抜粋～

船岡の方たちは、困った人を放っておかず、何ができるのか考えて、すぐに行動に移しました。このことがすばらしいと思います。わたしも、これからの人生で、いろいろなことを経験すると思います。そんなとき、船岡の方たちのしてきたことを見習って、人の役に立てるようなことを考えて、すぐに行動できる人になりたいと思いました。優しい心をもって、人生を歩んでいきたいです。

事前事後の児童アンケート結果では、「ふるさと（八頭町・鳥取県）が好き」87.5% → 100%、「地域の良さや、それに関わる人の思いや生き方を知っている」56.2% → 87.5% と肯定的に回答した子供が増え、本実践を通して、地域への愛着や誇りが高まってきていることが示唆された。今後は、他の学年においても同様の効果が期待できるか検証したい。

6. 終わりに

偉人や先人をはじめとする様々な人との出会いを通して、子供がその生き方に感動し、発奮する。地域と共にこのような機会をつくることのできる学校教育に魅力を感じざるを得ない。ふるさと鳥取県や八頭町に思いをはせながら、高い志をもって自己実現を目指す子供を育てるためにも、今後も地域と連携・協働を密にすることで、特色ある教育活動を展開したい。

新たな日常の中での、チームで取り組む食育の推進

～食の重点課題を明確に、学校内外で連携して取り組む食育について～

香川県高松市立仏生山小学校

栄養教諭 下岡 純子

1 はじめに

平成17年に「食育基本法」が制定され、全国で食育が進められてきた。しかし、食をめぐる社会環境は大きく変化しており、様々な課題を抱えている。高齢化が進行する中で、健康寿命を延ばすことや生活習慣病の予防が課題であり、栄養バランスに配慮した食生活の重要性がさらに増している。食に関する価値観やくらしの在り方も多様化し、健全な食生活を実践することが難しくなっている。地域の伝統的な食文化が失われていくことも、危惧されている。また、気候変動や環境問題の解決のためにも、食の在り方を見直す必要性が高まっている。さらに、新型コロナウイルス感染症の影響が、人々の生命や生活に加えて、行動・意識・価値観にまで波及している状況にある。

このような現状を受けて、令和3年に国から示された「第4次食育推進基本計画」では、新たな日常の中でも、食育がより多くの国民による主体的な運動となるよう、①生涯を通じた心身の健康を支える食育の推進、②持続可能な食を支える食育の推進、③「新たな日常」やデジタル化に対応した食育の推進が、特に取り組むべき重点事項として定められた。これらの指針を受けて、コロナ禍でも効果的な食育を行うことができるよう、本校でも改めて検討することにした。

本校では、学校教育目標「豊かな心を持ち 自ら考え実行し たくましく生きる子どもを育てる」の下、教育活動のキーワードとして「SDGs」「ボランティア活動」「地域連携・協働活動」を掲げ、持続可能な社会の担い手となる児童の育成や、誰一人取り残さない教育に取り組んでいる。学校や児童の実態を踏まえて、学校内外で連携して、新たな日常の中での「今だからできる」食育の推進に取り組んだ。

2 実践の概要

食育推進基本計画や学校教育目標を踏まえ、児童の実態から本校の食の重点課題を抽出し、新たな日常の中で効果的に食育を推進できるよう、全体計画を見直し、取り組んだ。児童が自分たちの食の課題に対して、多くの

人との関わりの中で考えを深め、主体となって解決に向けて取り組むことができるような食育の在り方について考えた。また、学校における食育推進の要である栄養教諭として、学校内外で連携しながらチームで食育に取り組んだ。

3 具体的な実践内容

(1) 児童の実態等に基づく、食育のPDCAサイクルの確立に向けて

学校で効果的に食育を行う上で、児童や地域の実態を的確に把握し、学校教育目標等も踏まえて、全教職員で共通理解を図った上で計画的な指導を行うことが重要と考えた。そこで、本校では、独自の食生活アンケートを作成し、毎年児童の実態を把握できるようにした。令和元年度より実施しているアンケートの結果、本校では朝食欠食の児童が約1割いること、朝食の内容に課題（特に野菜不足）がある児童が約8割いることがわかった。メディアの使用時間の増加に伴い、就寝時刻が遅い児童が多いこともわかった。また、食事のお手伝いを毎日している児童が3割未満、郷土料理や行事食を知っている家庭が約7割程度にとどまっていることもわかった。こうした実態を踏まえて、食に関する指導の全体計画の中に、本校の食育重点目標と数値目標を具体的に明示して、本校の食の課題が何か全教職員で共通理解を図った上で取り組むことができるようにした。

【本校の食育の重点目標・数値目標（令和4年度）】

毎日、朝ごはんを食べる	98%
主食・主菜・副菜のそろった朝ごはんを食べる	23%
食事のお手伝いを毎日する	30%
郷土料理・行事食に関心をもつ	77%
給食の残食率（主食）	1%以下

これまで、食育の計画（P）と実行（D）は行ってきたものの、評価（C）と改善（A）が十分実施できていなかったため、前年度の取組を評価した上で改善し、次年度につなげることが効果的な食育の推進のために重要

と考えるようになった。新年度の目標や計画が漠然としたものにならないようにするため、評価に基づいた改善、計画を行うことにした。文部科学省の「食に関する指導の手引」や先進校の評価指標を参考に、本校独自の「成果指標」と「活動指標」を作成した。数値による「成果指標」によって、どこまでできれば達成したと考えることができるか判断基準が明確となり、前年度の取組を客観的に評価した上で、次年度の計画を行うようにした。また「活動指標」については、栄養教諭だけでなく、管理職や教務主任、学年主任、給食主任、養護教諭、調理員など様々な立場の職員に本校の食育・給食について4段階で評価してもらったことで、様々な視点から本校の食育について評価し、次年度の改善につなげることができた。

(2) 学校課題である「朝食」の改善に向けた取組

食育推進基本計画の重点事項である「心身の健康を支える食育の推進」の中でも、本校では特に「朝食」の改善が重要であると考え、全教職員で共通理解の上、改善に向けて取り組むことにした。

家庭と連携して改善につなげるため、毎月発行している食育だよりで本校の実態を保護者に知らせ、朝食の重要性や、朝食において野菜をとるための工夫、簡単朝食レシピを掲載して啓発を行った。



【学校の課題をもとに作成している食育だより】

また、教員主導で「やらされる」のではなく、児童が主体となり、興味・関心をもって取り組むことができるよう、朝食の内容改善に向けてどのような活動ができるか、給食委員会の児童といっしょに考えることにした。本校では、夏休みに児童が家族と食事作りを行う実践を行ってきたが、児童の発案で、この内容を朝食メニューコンテストに変更し、全校生が無理なく楽しく取り組むことができるような企画を考えた。委員会活動の時間に、本校で不足しがちな野菜を朝食に取り入れるためには、どのような工夫が必要か話し合いを行った。児童が

らは「簡単にできること、短時間で準備できること、食べやすいこと」がポイントではないかという意見が出た。給食委員会でどのようにメニューを募集したらよいかを考え、野菜を使って簡単に作ることができる、「ごはん・パン」「サラダ・あえもの」「汁・スープ」「おかず」の4つのメニュー部門の中から1つを選び、家族といっしょに朝食レシピを考えて調理を行うことにした。

夏休みの朝食コンテスト実施にあたり、食育だよりで保護者に協力を依頼した上で、1学期の終業式の際に、給食委員会から全校生に呼びかけを行った。

昨年度は夏休み明けに、コンテストを企画した給食委員会児童と委員会担当教員で審査を行った。「全校生の参考になるか、短時間で簡単に作ることができるか」といった視点で優秀作品を選び、メニュー部門別に表彰を行って全校生に紹介した。また、児童から優秀作品を給食に出すことはできないかという意見が出たため、給食調理員にも最終審査に参加してもらい、特別賞を選定することになった。調理方法が簡単で朝食に取り入れやすく、おいしく食べられる「野菜とコーンのツナマヨあえ」と「三色そばろ丼」を給食で提供して紹介することになり、全校生にも好評だった。



【優秀作品を給食メニューにも取り入れて紹介した】

この他、朝食摂取に向けて養護教諭や生徒指導担当教諭と連携し、以前は分掌ごとに別々に提案していた生活チェックを「スマートメディア・早寝・早起き・朝ごはん」として1つにまとめた「元気チェック」を年3回実施した。元気チェックの中にメディアの使用についても組み込むことで、就寝時刻の見直しにつながり、朝食摂取の改善にも効果が見られた。

また、6年生の家庭科「できることを増やしてクッキング～朝食に生かそう～」において、学級担任と栄養教諭がT・Tで、朝食の必要性や内容の改善について学習

を行った。多くの児童が食べているごはんやパンなどの主食（黄）は、脳のエネルギー源になることを学習し、続いて肉や魚、卵などを使った主菜（赤）が体温を上げる働きがあることを学んだ。さらに、ほとんどの児童が朝食でとれていなかった野菜を使った副菜（緑）は、胃腸の働きを活発にして便のかさを増すことで排便を促す効果があることを学習した。排便のリズムが不規則な児童も多く、野菜の摂取不足が関係していることに気づくことができるようにした。タブレット端末を使って、赤・黄・緑の食品がそろそろよう朝食献立を考え、自分のいつもの朝食内容を改善できるようにした。緑のグループについては、果物だけでなく、野菜を必ず取り入れるよう助言を行い、児童が自分の朝食内容の改善につなげられるようにした。



【タブレットを使って朝食献立を考え、交流を行った】

(3) 持続可能な食を支える、児童主体の食品ロス削減のための取組

令和2年度の全国一斉臨時休業明けに、本校では児童の活動量や食欲の低下などによって、1日30kg以上の大量の給食の残菜が出るという問題が発生した。毎日の残菜を目の当たりにした給食委員会の児童から、全校生に呼びかけを行って残菜を減らしたいという声が出るようになった。給食委員会で話し合いを行い、給食時間に放送を行ったり、給食場前に毎日の残菜の写真を掲示したりして、全校生に現状を伝えた。

また、給食訪問時の様子や学級担任の情報から、感染対策のために量の調節が以前に比べて難しくなっていること、時間が来たら残してもよいという雰囲気になっていることなどが、残菜の増加につながっていると考えられた。改善に向けて、個に応じた量に配膳すること、食事時間の確保などについて、栄養教諭から職員会で提案を行った。残菜が少ない学級に、その学級で工夫していることを紹介してもらうよう依頼し、学校全体でできることから、残菜削減に取り組むようにした。給食時間に、栄養教諭からも残菜について全校生に向けた放送を行った。単にもったいないということだけではなく、食事作りに関わる人への感謝、いろいろな食品をとることや

様々な味を体験する重要性、環境への影響など、様々な食育の視点から放送を行った。家庭に向けても、食育だよりで学校での取組を知らせ、家庭でも毎日の食べ方を見直すよう啓発を行った。この結果、残菜が減少し、令和2年度末にはほぼゼロに近い状況となり、令和4年度現在も残菜が少ない状況を維持することができている。

令和4年度に入り、地域のコミュニティセンターで、家庭で余っている食品を回収して必要としている方へ届ける「フードドライブ活動」が行われることを児童が知り、給食委員会で話し合いを行って、家庭や地域と協力して、食品ロス削減に向けた活動を行いたいということになった。これまで学校で取り組んできた「食品ロス削減」というテーマの下、児童が自主的・主体的に地域とも協力して何ができるかを考えられるよう、栄養教諭として支援することにした。また、学校で呼びかけやフードドライブ活動を行うことで、食品ロスの問題が一人一人の考え方や行動と深く関わっていることに児童が気づき、社会で起きている問題の解決のために、自分たちの食生活を見直すきっかけにしたいと考えた。

コミュニティセンターや、実施団体の香川大学学生ESDプロジェクトSteePの学生さんとも事前に連絡をとり、本校でフードドライブ活動を実施し、集まった食品をコミュニティセンターに届けることになった。実施にあたり、全校生へオンライン朝会でフードドライブ活動の呼びかけを行い、保護者にも手紙で協力を依頼した。たくさんの食品を集めることが目的ではなく、家庭で食品ロス削減のためにできることを話し合うことが大切だと伝えるようにした。学校では3日間に分けて回収を行い、初日はSteePの学生さんが学校に来てくださり、給食委員会の児童といっしょに、賞味期限や回収可



【香川大学SteePの学生さんとフードドライブ活動を実施】

能なものかどうかを確認しながら、フードドライブ活動を行ってくださった。

3日間の活動で、合計285点の食品が集まり、コミュニティセンターで後日行われたフードドライブ活動の際に、児童の代表といっしょに届け、高松市社会福祉協議会を通じて寄付を行った。SteePの方から、小学校の

児童へ感謝状をいただき、今後の「食品ロス削減」の取組への意欲につながった。活動を通し、家庭も巻き込んで、地域と協力して食品ロス削減に向けてできることを考える機会となった。



【フードドライブ活動で集まった食品をコミセンへ届けた】

(4) 新たな日常の中での ICT を活用した食育の推進

コロナ禍で、オンライン会議システムを利用する機会が増え、今年度の1学期末に、本校の児童と、栄養教諭の兼務校である三溪小学校の児童で、オンライン交流を行った。朝食の内容など共通の課題があることから、兼務校の給食主任とも連携して、2校の給食委員会の児童代表が、夏休みの朝食コンテストについてオンラインで情報交換を行った。交流後、他校から教えてもらったことを、今後の参考にしたいという意見が出た。コロナ以前では難しかった他校の児童との交流が、オンラインを活用してできるようになった。



【他校の児童とオンライン交流を実施】

また、本校の重点課題である、郷土料理や行事食への理解を深めるため、3年度の冬休みに全学年でお雑煮づくりに取り組んだ。冬休み前に、オンラインでお雑煮について給食委員会が全校放送を行い、冬休みに家庭で取り組んでほしいことについて呼びかけた。今年度は冬休み前に再度、三溪小の児童とオンラインで情報交換を行い、実施内容を検討する予定である。

各教科等の指導では、1人1台配布のタブレット端末を活用して、献立を作成したり、食育の授業で各自が考えた内容を端末で見せ合ったり、電子黒板で共有したりして、児童が交流できるようにしている。給食時間においては、電子黒板用の給食指導資料データを栄養教諭が作成し、郷土料理や行事食、旬の食材、食事のマナーなどについて、各学級で担任が献立に合わせて指導を行っ

ている。

ICTの活用によって、児童が食への興味・関心を持ち、食育においても活発な交流を助ける手段となった。

4 実践の成果

新たな日常の中で、チームで連携して取り組んだ食育の成果をまとめると、以下の通りである。

(1) 前年度の取組を評価・改善した上で全体計画を見直し、食育の重点目標や数値目標を設定したことで、学校全体で共通理解が図りやすくなり、どの学級でも足並みを揃えて食育を行うことができた。

(2) 重点課題である朝食の改善に向けて、児童が課題意識を持ち、主体的に活動することができた。家庭とも連携しながら取り組んだことで、「朝食で主食・主菜・副菜がそろっている」児童が2年度末17.0%→3年度末19.2%となった。定期的な生活チェックを実施したことで、メディアの使用時間の見直しと睡眠時間の確保につながり、3年度末は朝ごはんをほぼ毎日食べる児童が97%となった。

(3) 3年度11月の学校給食栄養報告における給食の残菜率はごはん0.4%、パン0%、おかず0%となり、4年度に入って欠席数が増加している中、残菜は少ない状況を維持している。給食だけでなく、フードドライブ活動を通して、家庭や地域とも連携して、食品ロス削減のために児童一人一人が自分の食行動について考えることができた。

(4) ICTの活用によって、食育の授業や給食時間において、児童の食への興味・関心を高めることにつながった。また、オンライン会議を活用することで、他校の児童とも交流する機会ができ、食を通じて新たなつながりをもつことができた。

5 課題と今後に向けて

朝食の内容については、まだ十分な改善に至っていないため、引き続き家庭とも連携しながら取り組んでいく必要がある。コロナ禍の中で、本校では朝食コンテストや残菜の削減、フードドライブ活動など、児童が主体となって、自分たちの食の課題を解決するための方法を考え、全校で取り組んできた。本校が目指す「持続可能な社会の担い手の育成」のためにも、大人にやらされるのではなく、児童が主体となって取り組む食育についてこれからも検討していく必要性を感じている。栄養教諭が中心となってチームで食育を推進し、今後も学校・家庭・地域、そして他校とも連携して取り組んでいきたいと考えている。

未来社会を切り拓く「生きる力」を育むキャリア教育の実践

～ICT活用と地域との協働による「学びをつなぐ」活動を通して～

宮崎県西臼杵郡日之影町立日之影中学校

教諭 早田 泰大

1 はじめに ～研究の動機と教育の情報化～

本研究の出発点は、前校長との出会いにある。前校長は激変する社会情勢や現代に求められる学校と地域の在り方を踏まえ、R2年度までに本校における「キャリア教育プログラムの再構築」を実践された。また、本町はR2年度からR4年度まで「ふるさと日之影への愛着と誇りを持ち、自分の夢に向けて行動できる児童生徒の育成」を目標とするキャリア教育推進プランを作成し、小中学校が連携した児童生徒の育成に努めている。本校に赴任するまで学力向上や受験指導に重点を置いて指導してきた自分にとって、前校長や本町の実践は新しい視点であり、教育の本質を深く考えさせられた。

近年の学習指導要領改訂により、情報活用能力が学習の基盤となる資質・能力と位置付けられ、本校でも生徒が学校や自宅でタブレット端末を活用できる環境が整えられた。そこで、我々教員もどのような有効的な活用方法があるのか研修したり実践をしたりしながら、ICT活用を考えていくことが必要不可欠となった。

2 本校の現状（主題設定の理由）

日之影町は高齢化率45.6%（R3年10月時点）であり、全国平均（28.6%）を大きく上回るとともに、これは県内でも4番目に高い少子高齢化を示す数値である。町の『日之影町の未来を担う人材を育てる教育を展開して欲しい』という願いを実現するため、学校と地域が協働した学びがR2年度から始まった。3年生の学級担任として、卒業時には自分の考えを堂々と発表したり、夢に向かって進路実現を達成したりする生徒を目の当たりにし、この取組に大きな成果を感じた。

一方で、卒業生（R2 11月時点）に行ったアンケート結果から、予想よりも低かった項目（【表1】を参照）もあった。そこで、「対話力や探究する力」をさらに伸ばす必要があるため、本町キャリア教育推進プランのゴールでもある“ひのかげ近未来会議”に向けた総合的な学習の

時間における活動を通して、生徒たちに未来社会を切り拓く「生きる力」を育成したいと考えた。

【表1 ひのかげ近未来会議を通してどんな力が身についたか？】

1	日之影の将来や課題解決への当事者意識が高まった	
2	地域の方や社会人の方と対話する力が高まった	
3	協働して解決する力や最後までやり抜く力がついた	
4	実際に行動する力がついた	
5	計画を立て、見通しをもって行動する力がついた	
質問1		73.3
質問2		46.7
質問3		23.3
質問4		20.0
質問5		6.7

※ 数値=複数回答可での出現率(%)

3 研究の目標・仮説及び方法



科学技術の発展や新型コロナウイルスなど、将来の予測がつかない現代社会や、IoTで全ての人とモノがつながる未来社会において、目の前の課題を解決しようとする探究力とICTを活用した情報活用能力は、未来社会を切り拓く「生きる力」の基盤であると言える。上記の方

法 a・b を行うメリットは以下の通りである。

方法 a-①のメリット

- ・生徒が実社会や実生活において実際に考え、判断し、行動するための経験値が積める。
- ・身近でありながら他人事になりがちなるさとの課題を「自分事」として捉えることができる。

方法 a-②のメリット

- ・大人と協議することによる対話力の向上や、地域の正確な現状や情報等の収集と、生徒に現実的な視点を付与することができる。

方法 b-①のメリット

- ・タブレット端末を活用した情報の収集や整理・分析、プレゼンの作成と発表は、思考力・判断力・表現力を向上させるために効果的である。
- ・統計資料等を効率的に作成でき、写真などを加えたプレゼンは聞き手の印象に残りやすく、根拠に基づいた発表ができる。

方法 b-②のメリット

- ・学校を超えた学びを通して、様々な考えに触れ、生徒が多様な見方・考え方を習得できる。

新学習指導要領(2018)では、「学習内容を人生や社会のあり方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身につけ、生涯にわたって能動的に学び続けること」そのために「主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会のあり方を結びつけたり、多様な人との対話で考えを広げたり」することが重要であると指摘している。よって、生徒がよりよい人生を送るための「生きる力」を育む上で、学校と実社会の「学びをつなぐ」ことは意義があると言える。

4 実践の概要

a-① スパイラル的な学びとマイプロジェクトの展開

探究活動において教師はあくまでファシリテーターに徹することにした。例えば探究活動スタート時に「林業」というテーマを教師が生徒に提示するが、調査後に「どれが林業の最大の課題だと思うか?」「どうすれば課題が解決できると思うか?」など、教師は生徒に問いかけることを心がけた。その過程で生徒が答えに窮する時があり、仮に教師が教師自身の考えを生徒に伝えてしまうとスパイラル的な学びとならない。そこで「担当してくださるメンターの方に相談してみてもは?」と生徒に助言した。相談後は生徒自ら判断したり決定したりするようになり、スパイラル的な学び(【図1】参照)を展開することができた。

【図1: 探究のスパイラル】

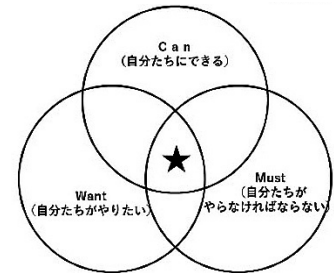
- 林業とはどんな仕事か?町内にはどんな企業がある?
- 林業の課題は何か?
- どうすれば後継者不足が解決できるか?
- 後継者不足解決のためにどんな体験や調査が必要か?
- 後継者不足解決のために自分たちができることは何か?
- 後継者不足解決のために町へどんな提案ができるか?

(「林業の振興」班の例)

フィールドワークが終わった段階で、中学生の自分たちでも町の課題解決に貢献できる取組=“マイプロジェクト”を実行してみるよう生徒に提案した。「林業の振興」班は、小学校を巻き込む形での積木制作を考案したが、小学校の先生方にマイプロジェクトの意図を説明したり小学校内で日程を調整していただいたりしなければならず、その案が実現困難であるという現実と直面した。“ひ

【図2: マイプロ3つの視点】

10月末にあることから、生徒自身もマイプロジェクトを9月末までに終えなければならぬ。そこで、3つの視点(【図2】参照)を踏まえるよう生徒た



ちに助言した。すると生徒自身が積木を制作し、保育園に積木を贈呈して園児たちに木材の良さを伝える、というマイプロジェクトを実践した。(写真1・2)中学校内で積木を制作するのは調整がしやすく、林業班以外の中学生にも木材の良さを伝えるという目標も達成できた。



写真1: 地域の方と積木制作 写真2: 保育園に積木を贈呈

a-② 町職員メンターとの協働

探究活動においては調査班ごとに1名のメンターが付くことが望ましい。そこで探究活動開始前に、校長を通じて地域振興課課長へ事前に連絡をしていただいた上で、打ち合わせを行った。地域振興課職員に今年度の計画とテーマなどを伝え、協力を依頼すると、「児童福祉の充実」班には町民福祉課、「農業の振興」班と「林業の振興」班には農林振興課、「観光業の活性化」班には地域振興課からそれぞれ1名ずつの町職員メンター

を配置していただいた。これで中学校と役場との連携体制が整った。メンター職員と年3



写真3: メンター職員との協働活動

回の協働活動(写真3)によって対話力を高めるとともに、フィールドワークやマイプロジェクトを的確な助言を得た上で実践することができた。この校外活動を通して、生徒たちは日之影町観光協会や町おこし協力隊の方々、林業・農業従事者の方々、町内の保育園と小学校およびその職員といった方々と出会い、地域人材とのつながりが大きく広がった。このつながりを最大限活用するため、**学校での学び→地域での学び→学校での学び→地域での学び→...**というサイクルを繰り返し、学校と実社会の「学びをつなぐ」ような流れを意識した。

b-① ICTを活用したアウトプット

生徒たちは「分かりやすい資料づくり」「印象に残る伝え方」をテーマに、年4回の発表活動やタブレット端末を活用したチラシや統計データの作成活動を通して、ICT機器を活用した表現方法の取得と表現力の向上が見てとれた。一方、モニターに提示した資料等が画面を切り替えると消えてしまうため、聞き手に重要な情報等を十分に理解してもらえない可能性があるというデメリットもある。そこで、タブレット端末を活用したプレゼンテーションの発表と、ホワイトボードに手作りの掲示物を貼っていくスタイルを組み合わせたハイブリッド型プレゼンを行った(写真4)。



写真4: ボードとICTを組み合わせたハイブリッド型プレゼン

b-② 学校を超えたオンライン交流

本校と似た中山間地域で探究学習を進めている椎葉村立椎葉中学校と「学びをつなぐ」オンライン学習会を実施した(写真5)。互いの探究学習の途中経過を発表した後、地域の良さや発表について意見交換を行った。はじめは会話がぎこちなかった生徒たちも、徐々に



写真5: オンライン交流

に打ち解け、活発に意見を交わす様子が見られた。

5 研究の成果と課題

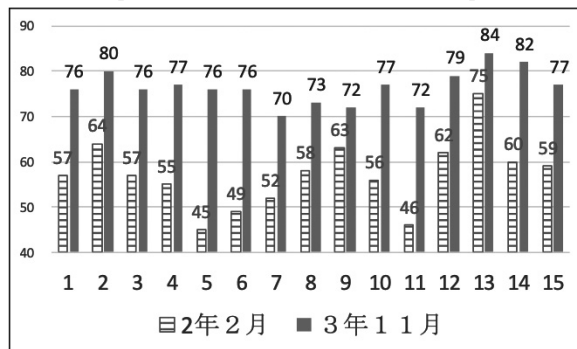
(1) 成果

目標A 課題解決に向けて探究する力の向上

【表2 探究的な学びに関するアンケート】

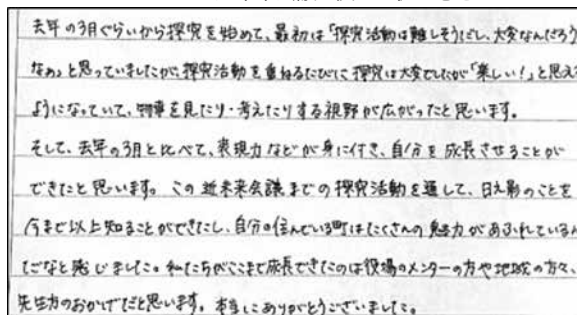
1 解決課題について「なぜだろう」「やってみよう」と思う
2 解決課題について、「多分こうではないか」などと予想するようにしている
3 課題解決のために、進んで資料を集めたり取材をしたりする
4 情報収集の前には、その方法について考えるようにしている
5 調べたことを、図やグラフなどにまとめている
6 調べた情報を、比較分類したり、関係付けたりして考察している
7 授業では、自分の考えを積極的に伝えている
8 自分の考えやその理由を、相手に分かりやすく発表している
9 考えたり提案したりしたことに、実際に取り組んでいる
10 学習の振り返りでは、どこまで分かったかや失敗した理由などを考えている
11 学習後には、もっと考えたい・もっと調べたいことなどを考えている
12 普段の学習や生活で、これまでの学習内容や学習方法を使っている
13 授業では、友達と話し合って自分の考えを深めたり広げたりしている
14 授業では、実際にものを使ったり地域や自然の中での体験活動をしている
15 総合の時間では、自ら課題を立て情報を集めて整理し発表する活動をしている

【グラフ1 探究的な学びに関する変容】



※数値=肯定的な回答をした生徒の割合 (%)

＜“ひのかげ近未来会議”後の生徒の感想＞



本年度の3年生を探究活動開始前と比較すると(【グラフ1】参照)、探究的な学びの指標は全項目において上昇が見られた。特に「学習後にもっと考えたい・調べたい」と肯定的に回答した生徒の割合が26%上昇しており、ある生徒は独自に探究を進め、その内容を租税作文に記し「宮崎県租税教育推進中央協議会 金賞」を受賞した。生徒の感想に「役場のメンターの方や地域の方々のおかげです」とあることから、「地域人材との協働活動」は、「探究する力の向上」に有効であっ

たと考える。

目標B 学習の基盤となる情報活用能力の向上

【表3 ICT活用についての質問と回答】

1	タブレットを使って資料を集めたり取材をしたりできる
2	調べたことを、タブレットを活用して図やグラフなどにまとめることができる
3	調べた情報をタブレットを使って比較・分類したり関係付けたりして考察できる
4	タブレットを使って自分の考えを積極的に伝えたり説明したりできる
5	自分の考えやその理由を、タブレットを使って相手に分かりやすく発表できる

質問	1	2	3	4	5
2年2月	60%	40%	38%	45%	49%
3年11月	76%	70%	68%	75%	71%

※数値＝肯定的な回答をした生徒の割合

先述した内容と同じように比較すると、肯定的な回答をした生徒の割合の平均上昇率は25.6%で、タブレット端末を活用したアウトプットやオンライン交流は情報活用能力の向上に有効的であると考えられる。

“ひのかげ近未来会議”において生徒たちが町へ提案した内容（【表4】を参照）およびその後は以下の通りである。

【表4 各グループの町への最終提案】

グループ名	町への提案
児童福祉の充実	ヘッドセット整備、公費支援型塾定期開催
林業の振興	循環型林業体験の実施
農業の振興	農家支援型民泊体験の実施
観光業の活性化	旧役場・廃校跡地でのイベント開催



役場関係各課が令和4年度予算案に計上し事業化

※令和3年12月現在

学校での学びにICTの活用と地域との協働を足し算するという取組を行ったが、まるでかけ算をしたかのような大きな手応えを感じている。実際に、事業化の一報を聞いた時は「生徒自身の手でふるさとの新たな未来を切り拓いたのだ」と強く感じた。

＜“ひのかげ近未来会議”後の生徒の感想＞

これまでの活動で私たち中学生が日立町について考えていくこと、そして行動していくことが大切だと感じました。私たちも、考えたり提案したりするだけでも、日立町の未来は変わっていくのかなと思いました。
私が、これかきできることは、これかき日立町の未来について考えていくことだと思っています。今は考えているだけでも、実践を個人で大人にならなくても、必ず自分自身で進んで、解決策を見つけていくことが大事です。

私は提案が実現できれば、1つの物事を深く、深く考え続ける先に自分自身の答えを見つけたい過程が大事だと思いました。
--

「未来は変わる」「解決策は違う」「自分なりの答えを見つけ出す過程が大事」などこれら生徒の感想は、未知なる未来社会で新たな答えを生徒自身の手で創造していく可能性を感じさせる記述である。本校生徒の成長は学校の学びだけでは不可能であり、「学校×ICT×地域」の「学びをつなぐ」教育活動は、生徒の「生きる力」を育む上で有効であった。

(2) 課題

① 持続可能な体制づくり

本年度は、学年職員3名のうち2名が昨年度も3学年を担当しており、学習や発表、協働活動の流れを把握していたため大きな問題もなかった。しかし、本校はへき地校であるので教諭は3年で入れ替わってしまい、町長をはじめとする行政の方々を巻き込む形の学びは成果が大きいものの、連携体制にヒビを入れるわけにはいかないため、業務をどう引き継ぐかが課題である。この学びを持続可能にするためには学校単独で進めるのではなく、例えば教諭と町職員のプロジェクト会議を年度開始前の3月に行うなど、4月に転入された先生と行政の方々が手を取り合いながら3年生の学びをサポートする体制が事前に整っている状況が望ましい。

② 追究テーマ設定の工夫

追究テーマによっては、地域の実態に合致していなかったり適切なメンター職員が確保できなかったりするため、長期間にわたる探究に耐えうる追究テーマをどう設定するかが課題である。そこで、このテーマも3月に行う教諭と町職員のプロジェクト会議で決定してはどうだろうか。そうすれば、役場は学校という町の課題解決のためのパートナーを得ることができ、学校にとってはメンター職員を確保できるため、学校と行政の“協働”は“win-win”の関係に発展していく。この点からも、年度開始前の事前打合せを行うことは重要なポイントになるであろう。

来年度以降も、同僚の先生方や地域の方々とのつながりを大切にしなが「学びをつなぐ」役割を果たし、どの学校、学年でも未来社会を切り拓く「生きる力」を育むキャリア教育の実践に挑戦したい。

第28回 日教弘教育賞

教育研究集録 第34集

令和5年6月発行
編集・発行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会
URL:<https://www.nikkyoko.or.jp>
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 5-4-6
TEL 03-3354-4001
FAX 03-3354-4068

印刷 株式会社 ニシカワ
〒207-0005 東京都東大和市高木 3-351-1
TEL 042-566-6669
